財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書　第458集

楡　木　II　遺　跡（2）

（縄文時代編）

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

２００９

国　土　交　通　省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

楡木II遺跡（2）（縄文時代編）
八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
二〇〇九
国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

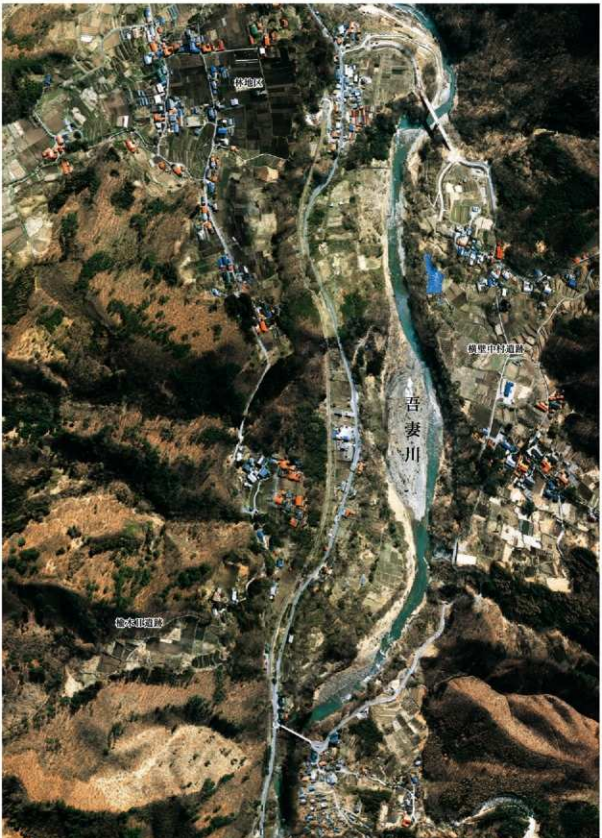
楡 木 II 遺 跡（2）

（縄文時代編）

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

２００９

国　土　交　通　省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



① 林地区航空写真

左側が北である。檜木Ⅱ遺跡は写真の中央を下（西）から上（東）に流れる吾妻川の左岸の最上位段丘面に位置する。対岸側（南）には横堀中村遺跡が存在する。檜木Ⅱ遺跡での発掘調査が開始される前の平成9年度の撮影である。

口絵 2

② 84区の縄文時代の12号竪穴住居の南斜め上からの撮影。山からの転石が散らばっているが、ほぼ中央に石囲いがが存在する。【平成12年度調査】

③ 12号竪穴住居の石囲いがは、残りの良さから保存処理を施して、現在は八ッ場ダム調査事務所の展示室に展示されている。

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水及び治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、当事業団が平成６年度から実施し、本年度で15年目を迎えました。楡木Ⅱ遺跡は平成12年、13年、16年及び17年の４ヵ年にわたる発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代から中近世にかけての遺構、遺物が数多く検出されました。

今回は縄文時代の遺構と遺物に関する報告をまとめる事が出来ました。特徴的な遺構としては、早期初頭の撚糸文土器の時期の竪穴住居内で確認された多数の石囲い炉の存在、遺物では多数のスタンプ形石器や砥石などがあげられます。これらの事象は当時のこの地域の生業を考える上での重要資料でもあります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、及び長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また、ひいては本書が吾妻郡内、群馬県の歴史を解明する上で末永く活用される事を願い序といたします。

平成21年３月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　高橋　勇夫

例　言

1．本書は2000・2001・2004・2005（平成12・13・16・17）年度の八ッ場（やんば）ダム建設工事に伴う楡木Ⅱ（にれぎに）遺跡の発掘調査報告書である。

2．楡木Ⅱ遺跡の今回の発掘調査の範囲は，群馬県吾妻郡長野原町大字林字楡木612番地他である。（ぐんまけん・あがつまぐん・ながのはらまち・おおあざはやし・あざにれぎ：Ｎｉｒｅｇｉ，Ｈａｙａｓｈｉ，Ｎａｇａｎｏｈａｒａ-ｍａｃｈｉ，Ａｇａｔｓｕｍａ-ｇｕｎ，Ｇｕｎｍａ-ｋｅｎ）市町村コード　10424

本遺跡の名称は，長野原町教育委員会が実施した分布調査報告書「長野原町の遺跡」1990に基づく。

（遺跡ＩＤ　667、県文化財システム遺跡番号　長野原町0051、八ッ場ダム関係埋蔵文化財遺跡番号　ＹＤ04－09）

3．発掘調査は、国土交通省関東地方整備局からの委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。本遺跡の発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期　　間　第１年度　2000（平成12）年９月20日～12月22日、第２年度　2001（平成13）年７月11日～12月20日
第３年度　2004（平成16）年４月１日～７月31日、第４年度　2005（平成17）年９月20日～12月22日

管理・指導　理事長　小野宇三郎（平成12・13・16・17年度）、高橋勇夫（平成17年度）、常務理事　赤山容造（平成12・13年度）、吉田　豊（平成13年度）、住谷永市（平成16年度）、木村裕紀（平成17年度）　事務局長　赤山容造（平成12年度）　事業局長　神保侑史（平成16年度）、管理部長　住谷　進（平成12・13年度）、矢崎俊夫（平成16・17年度）　調査研究部長　能登　健（平成12・13年度）、八ッ場ダム調査事務所長　巾　隆之（平成16・17年度）、調査研究部長　佐藤明人（平成16・17年度）

事 務 担 当　調査研究課長　飯島義雄（平成12年度）、下城　正（平成13年度）、斉藤和之（平成16年度）、中沢　悟（平成17年度）
坂本敏夫（平成12年度）、大島信夫（平成13年度）、丸岡道雄（平成16年度）、宮城結城雄（平成17年度）、小山建夫（平成12・13年度）、竹内　宏（平成16年度）、高橋房雄（平成16年度）、笠原秀樹（平成12・13年度）、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏（平成12・13年度）、森下弘美（平成12・13年度）、片岡徳雄（平成12・13年度）、阿久沢玄洋（平成16年度）、栗原幸代（平成16・17年度）、佐藤聖行（平成16・17年度）、今泉大作（平成17年度）、清水秀紀（平成17年度）、野口富太郎（平成16年度）、富澤よねこ（平成16・17年度）、町田文雄（平成17年度）、大澤友治（平成12年度）、今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子

調 査 担 当　麻生敏隆（平成12・13・16年度）、新井英樹（平成13年度）、飯田陽一（平成17年度）、石田　真（平成12年度）、久保　学（平成13年度）、佐藤享彦（平成16年度）、篠原正洋（平成17年度）、友廣哲也（平成17年度）、森田真一（平成17年度）、渡辺弘幸（平成12年度）

4．発掘資料の整理および報告書の作成は、国土交通省関東地方整備局からの委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

期　　間　2007（平成19）年４月１日～2008（平成20）年３月31日、2008（平成20）年４月１日～９月30日

管理・指導　理事長　高橋勇夫，常務理事　木村裕紀，常務理事　津金澤吉茂，総務部長　萩原　勉（平成19年度）　調査研究部長　佐藤明人（平成19年度），整理部長　相京建史（平成20年度）

事 務 担 当　石井　清（平成18・19年度）、笠原秀樹、佐嶋芳明（平成20年度）、大木紳一郎（平成20年度）、須田朋子、斉藤恵利子（平成19・20年度）、吉田有光、柳岡良宏、栗原幸代（平成18年度）、佐藤聖行（平成18年度）、矢島一美（平成19・20年度）、齋藤陽子（平成19・20年度）、今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、鈴木理佐（平成18・19年度）

編　　集　麻生敏隆

本 文 執 筆　第１章、第２章、第３章第１節・第２節、第４章第１節・第２節、第５章第１節　麻生敏隆
第３章第２節（早期土器）、第４章第３節　藤巻幸男　第３章第２節（前期・中期土器）、第４章第４節　山口逸弘
第３章第３節（鉄滓）笹澤泰史、第４章第５節　村上義章、第４章第７節　麻生敏隆

遺 構 写 真　各年度調査担当者　　遺物写真　佐藤元彦

遺 物 観 察　麻生敏隆、藤巻幸男、山口逸弘、笹澤泰史、村上義章

保 存 処 理　関　邦一、土橋まり子、小村浩一、森田智子、津久井桂一

資 料 整 理　新保純子、霜田順子、足立やよい、笠澤麻里、関　裕子、山口郁恵（平成18年度）、鈴木幹子、丸橋富美子、関口照子、大沢知代、大竹由美子（平成19年度）、鈴木幹子、堀米弘美、狩野なつ子、馬場信子（平成20年度）

機 械 実 測　岸　弘子、伊東博子、田所順子、小池益美

写真図版作成　荒井絵美、安藤美奈子、市田武子、酒井史恵、下川陽子、高梨由美子、廣津真希子、牧野裕美、矢瑞真観、横塚由香

委 託 測 量　株式会社　測研

5．石材同定にあたっては飯島静男氏（群馬地質研究会）にご教示を得た。

6．出土遺物および遺構・遺物の図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターが保管している。

7．本遺跡に関して、本報告以前にその概要が収録・公表されたのは下記の書籍である。

「年報20」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001　　「年報21」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
「年報24」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005　　「年報25」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
「遺跡は今9」 八ッ場ダム調査事務所　2000　　「遺跡は今14」 八ッ場ダム調査事務所　2006
「檜木且遺跡（1）（平安時代・中近世編）」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008

8．本遺跡の発掘調査には、嬬恋村・中之条町・長野原町・沼田市・東吾妻町在住の多くの作業員さんにご協力いただいた。

9．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご協力・ご助言を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
国土交通省八ッ場ダム建設事務所　群馬県教育委員会　長野原町教育委員会　金子直行　白石光男　宮田孝彦　土肥孝
原田昌幸　佐藤雅一　寺内隆夫　綿田弘実

凡　例

1．本書で使用した国家座標は、日本測地系によるものである。本調査ではその数値をそのままグリッドとして使用した。

2．本書における遺構番号は算用数字で、調査時に付されたものをそのまま使用した。

3．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付すか、遺物番号に縮尺率を併記した。
遺構図　竪穴住居　1：60　　炉　1：30　　土坑・溝・集石　1：30　　その他は明記
遺物図　縄文土器・弥生土器　1：1、1：2、1：3、1：4　　石器・石製品　1：1、1：2、1：3、1：4

4．遺物番号は本文・挿図・表・写真図版と一致する。

5．竪穴住居等の面積は、住居の周縁をプラニメーター（タニタ　プラニックス7）を用いて３回測定し、その平均値を記した。

6．挿図中の方位は調査時に使用したグリッドに準拠したものであるが、本文中の軸方向記載で用いた方位には、真北を用いた補正を行っている。

7．遺物の重量の計測にあたっては、10ｇまでは0.1ｇ単位、6000ｇまでは１ｇ単位、20kgまでは50ｇ単位、20kg以上は100ｇ単位の秤を使用して計測した。

8．各地図について、使用した原図類の名称については、その都度記載している。

楡木II遺跡（2）　縄文時代編

口絵
序
例言
凡例
目次（文章・挿図・表・写真）
第1章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第1節　発掘調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第3節　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第4節　整理の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第2章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第1節　地理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第2節　地形と地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第3節　歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第4節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第3章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第1節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第2節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
（1）遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
（2）遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
第3節　補遺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・202
（1）遺構
（2）遺物
遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207
第4章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・260
第1節　遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・260
第2節　石囲い炉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・262
第3節　早期第II群土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・266
第4節　前期・中期土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・283
第5節　砥石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・287
第6節　スタンプ形石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・299
第7節　地形の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・303
抄録
写真図版
奥付

挿図図版目次

第１図　遺跡位置図（国土地理院・５万分の１「草津」）
第２図　グリッド設定図
第３図　発掘調査範囲図（年度別）
第４図　遺跡位置図（国土地理院・20万分の１「長野」）
第５図　吾妻川流域の地形図（「長野原町の自然」）
第６図　周辺遺跡図（国土地理院・2.5万分の１「草津」）
第７図　基本土層図
第８図　遺跡全体図（1000分の１）
第９図　遺跡全体図（付図１）
第10図　縄文時代遺構分布図（付図２）
第11図　６・７・11・14号竪穴住居遺構（１）、４号竪穴遺構
第12図　６・７・11・14号竪穴住居（２）
第13図　６・７号竪穴住居が、11号竪穴住居埋甕
第14図　６・７号竪穴住居遺物（１）
第15図　６・７号竪穴住居遺物（２）
第16図　６・７号竪穴住居遺物（３）
第17図　14号竪穴住居遺物（１）
第18図　14号竪穴住居遺物（２）
第19図　14号竪穴住居遺物（３）
第20図　14号竪穴住居遺物（４）
第21図　４号竪穴遺物（１）
第22図　４号竪穴遺物（２）
第23図　10号竪穴住居遺構・遺物（１）
第24図　10号竪穴住居遺物（２）
第25図　12号竪穴住居遺構（１）
第26図　12号竪穴住居遺構（２）とが・遺物（１）
第27図　12号竪穴住居遺物（２）
第28図　15号竪穴住居遺構
第29図　15号竪穴住居遺物（１）
第30図　15号竪穴住居遺物（２）
第31図　18号竪穴住居遺構
第32図　18号竪穴住居遺物（１）
第33図　18号竪穴住居遺物（２）
第34図　32号竪穴住居遺構
第35図　32号竪穴住居遺構が・遺物（１）
第36図　32号竪穴住居遺物（２）
第37図　34号竪穴住居遺構
第38図　34号竪穴住居遺物（１）
第39図　34号竪穴住居遺物（２）
第40図　36・37号竪穴住居遺構（１）
第41図　36・37号竪穴住居遺構（２）・遺物（１）
第42図　36・37号竪穴住居遺物（２）
第43図　36・37号竪穴住居遺物（３）
第44図　36・37号竪穴住居遺物（４）
第45図　36・37号竪穴住居遺物（５）
第46図　36・37号竪穴住居遺物（６）
第47図　36・37号竪穴住居遺物（７）
第48図　36・37号竪穴住居遺物（８）
第49図　36・37号竪穴住居遺物（９）
第50図　36・37号竪穴住居遺物（10）
第51図　38号竪穴住居遺構
第52図　38号竪穴住居遺物
第53図　50号竪穴住居遺構
第54図　50号竪穴住居遺物（１）
第55図　50号竪穴住居遺物（２）
第56図　51号竪穴住居遺構
第57図　51号竪穴住居遺物
第58図　53号竪穴住居遺構
第59図　53号竪穴住居遺物（１）
第60図　53号竪穴住居遺物（２）
第61図　55号竪穴住居遺構・遺物
第62図　56・58・60・66号竪穴住居遺構（１）
第63図　56・58・60・66号竪穴住居遺構（２）・遺物
第64図　57・66号竪穴住居遺構・遺物（１）
第65図　57号竪穴住居遺物（２）
第66図　59号竪穴住居遺構
第67図　59号竪穴住居遺物（１）
第68図　59号竪穴住居遺物（２）
第69図　59号竪穴住居遺物（３）
第70図　60号竪穴住居遺物（１）
第71図　60号竪穴住居遺物（２）
第72図　60号竪穴住居遺物（３）
第73図　61・62号竪穴住居遺構・遺物（１）
第74図　62号竪穴住居遺物（２）
第75図　63号竪穴住居遺構・遺物（１）
第76図　63号竪穴住居遺物（２）
第77図　64号竪穴住居遺構
第78図　64号竪穴住居遺物（１）
第79図　64号竪穴住居遺物（２）
第80図　65号竪穴住居遺構
第81図　65号竪穴住居遺物
第82図　67号竪穴住居遺構
第83図　67号竪穴住居遺物（１）
第84図　67号竪穴住居遺物（２）
第85図　68号竪穴住居遺構
第86図　１号竪穴遺構・遺物（１）
第87図　１号竪穴遺物（２）
第88図　１～３号石囲いが遺構
第89図　４・５・６・７・８・９・10号石囲いが遺構・遺物
第90図　１号遺物集中遺物（１）
第91図　１号遺物集中遺物（２）
第92図　１号溝遺構（付図３）
第93図　１号溝遺物（１）
第94図　１号溝遺物（２）
第95図　１号溝遺物（３）
第96図　１号溝遺物（４）
第97図　１号溝遺物（５）
第98図　１号溝遺物（６）
第99図　１号溝遺物（７）
第100図　１・２号竪穴住居遺構（１）・遺物
第101図　１・２号竪穴住居遺構（２）
第102図　８号竪穴住居遺構（１）
第103図　８号竪穴住居遺構（２）・遺物
第104図　９号竪穴住居遺構・遺物（１）
第105図　９号竪穴住居遺物（２）
第106図　31号竪穴住居遺構
第107図　35号竪穴住居遺構・遺物（１）
第108図　35号竪穴住居遺物（２）
第109図　47号竪穴住居遺構
第110図　48号竪穴住居遺構
第111図　48号竪穴住居遺物（１）
第112図　48号竪穴住居遺物（２）
第113図　52号竪穴住居遺構
第114図　52号竪穴住居遺物
第115図　54号竪穴住居遺構・遺物
第116図　２号竪穴遺構
第117図　３号竪穴遺構・遺物
第118図　13号竪穴住居遺構
第119図　13号竪穴住居遺物
第120図　17号竪穴住居遺構・遺物（１）
第121図　17号竪穴住居遺物（２）
第122図　49号竪穴住居遺構・遺物

第123図　1号土坑遺構・遺物
第124図　10号集石遺構
第125図　10号集石遺物
第126図　1・2号集石遺構
第127図　3～6・8号集石遺構・遺物
第128図　9・11・13・14・15号集石遺構・遺物
第129図　2号配石遺構
第130図　2号埋甕
第131図　縄文草創期・早期　グリッド別分布図
第132図　遺構外遺物（1）
第133図　遺構外遺物
第134図　遺構外遺物（2）
第135図　遺構外遺物（3）
第136図　遺構外遺物（4）
第137図　遺構外遺物（5）
第138図　遺構外遺物（6）
第139図　遺構外遺物（7）
第140図　遺構外遺物（8）
第141図　遺構外遺物（9）
第142図　遺構外遺物（10）
第143図　遺構外遺物（11）
第144図　遺構外遺物（12）
第145図　遺構外遺物（13）
第146図　遺構外遺物（14）
第147図　遺構外遺物（15）
第148図　遺構外遺物（16）
第149図　遺構外遺物（17）
第150図　遺構外遺物（18）
第151図　遺構外遺物（19）
第152図　遺構外遺物（20）
第153図　遺構外遺物（21）
第154図　遺構外遺物（22）
第155図　遺構外遺物（23）
第156図　遺構外遺物（24）
第157図　遺構外遺物（25）
第158図　遺構外遺物（26）
第159図　遺構外遺物（27）
第160図　遺構外遺物（28）
第161図　遺構外遺物（29）
第162図　遺構外遺物（30）
第163図　遺構外遺物（31）
第164図　遺構外遺物（32）
第165図　遺構外遺物（33）
第166図　遺構外遺物（34）
第167図　遺構外遺物（35）
第168図　遺構外遺物（36）
第169図　遺構外遺物（37）
第170図　遺構外遺物（38）
第171図　遺構外遺物（39）
第172図　遺構外遺物（40）
第173図　遺構外遺物（41）
第174図　遺構外遺物（42）
第175図　遺構外遺物（43）
第176図　遺構外遺物（44）
第177図　遺構外遺物（45）
第178図　遺構外遺物（46）
第179図　遺構外遺物（47）
第180図　遺構外遺物（48）
第181図　遺構外遺物（49）
第182図　遺構外遺物（50）
第183図　遺構外遺物（51）
第184図　遺構外遺物（52）
第185図　遺構外遺物（53）
第186図　遺構外遺物（54）
第187図　遺構外遺物（55）
第188図　遺構外遺物（56）
第189図　遺構外遺物（57）
第190図　遺構外遺物（58）
第191図　遺構外遺物（59）
第192図　遺構外遺物（60）
第193図　遺構外遺物（61）
第194図　遺構外遺物（62）
第195図　遺構外遺物（63）
第196図　遺構外遺物（64）
第197図　遺構外遺物（65）
第198図　遺構外遺物（66）
第199図　遺構外遺物（67）
第200図　砥石
第201図　鉄滓1
第202図　鉄滓2
第203図　埼玉県日高市向山遺跡6号竪穴住居（報告書より転載）
第204図　早期遺構第Ⅱ群土器出土量・比率棒グラフ図
第205図　第Ⅱ群土器類別出土総量円グラフ図
第206図　第Ⅱ群1類土器（1）
第207図　第Ⅱ群1類土器（2）
第208図　第Ⅱ群1類土器（3）
第209図　第Ⅱ群2類土器（1）
第210図　第Ⅱ群2類土器（2）
第211図　第Ⅱ群3類・5類土器
第212図　第Ⅱ群4類土器
第213図　土製円盤
第214図　早期土器胎土別図
第215図　早期土器胎土別図
第216図　周辺遺跡の縄文前期初頭～中葉の土器
第217図　周辺遺跡の縄文前期後葉～末葉の土器
第218図　周辺遺跡の縄文中期初頭～前葉の土器（立馬Ⅱ遺跡）
第219図　遺跡地形変遷図（1）
第220図　遺跡地形変遷図（2）

付図

1　遺構全体図（第９図）
2　縄文時代遺構分布図（第10図）
3　１号溝遺構（第92図）

表目次

第１表　遺跡一覧
第２表　遺物観察表　縄文土器　早期
縄文土器　前期・中期
縄文石器
鉄滓
早期土器胎土別各一覧
周辺遺跡時期別一覧
砥石一覧

写真図版

ＰＬ－１
1　檜木Ⅱ遺跡遠景（南から）
2　檜木Ⅱ遺跡近景（南から）
3　84区基本土層（南から）
4　85区基本土層（南から）
5　84区住居群（平成12年度、上空から）
ＰＬ－２
6　6・7号竪穴住居セクションＡ－Ａ´（南から）
7　6・7号竪穴住居遺物出土状態（東から）
8　6号竪穴住居炉全景（南から）
9　7号竪穴住居炉全景（東から）
10　10号竪穴住居セクションＡ－Ａ´（北東から）
11　10号竪穴住居全景（南から）
12　10号竪穴住居掘り方全景（南から）
13　12号竪穴住居遺物出土状態（南から）
ＰＬ－３
14　12号竪穴住居掘り方セクションＢ－Ｂ´（南東から）
15　12号竪穴住居石囲いが検出状態（南東から）
16　12号竪穴住居石囲いがセクションＡ－Ａ´（南西から）
17　12号竪穴住居全景（南から）
18　12号竪穴住居ピット全景（南から）
19　14号竪穴住居全景（西から）
20　14号竪穴住居・4号竪穴遺構全景（南から）
21　14号竪穴住居掘り方セクションＡ－Ａ´（西から）
ＰＬ－４
22　14号竪穴住居・4号竪穴遺構掘り方全景（南から）
23　15号竪穴住居セクション（西から）
24　15号竪穴住居遺物出土状態（西から）
25　15号竪穴住居掘り方全景（南から）
26　18号竪穴住居遺物出土状態（南から）
27　18号竪穴住居掘り方全景（南から）
28　32号竪穴住居遺物出土状態（東から）
29　32号竪穴住居全景（南から）
ＰＬ－５
30　32号竪穴住居全景（東から）
31　34号竪穴住居セクション（南から）
32　34号竪穴住居出土状態（西から）
33　34号竪穴住居全景（南から）
34　34号竪穴住居ピット全景（南から）
35　36・37号竪穴住居遺物出土状態（南西から）
36　37号竪穴住居遺物出土状態（南から）
37　36号竪穴住居炉全景（西から）
ＰＬ－６
38　37号竪穴住居炉全景（南から）
39　38号竪穴住居全景（南から）
40　38号竪穴住居炉全景（東から）
41　38号竪穴住居掘り方全景（南から）
42　50号竪穴住居炉セクションＡ－Ａ´（東から）
43　51号竪穴住居全景（南西から）
44　51号竪穴住居炉セクション（南東から）
45　51号竪穴住居炉全景（南から）
ＰＬ－７
46　51号竪穴住居掘り方全景（南西から）
47　53号竪穴住居全景（南から）
48　53号竪穴住居掘り方セクション（南から）
49　53号竪穴住居掘り方全景（南から）
50　55号竪穴住居セクション（東から）
51　55号竪穴住居炉セクション（南から）
52　55号竪穴住居全景（南から）
53　56号竪穴住居全景（北から）
ＰＬ－８
54　56号竪穴住居セクション（東から）
55　57号竪穴住居遺物出土状態（南から）
56　57号竪穴住居掘り方全景（南から）
57　58号竪穴住居遺物出土状態（南東から）
58　59号竪穴住居掘り方全景（南から）
59　59号竪穴住居石囲いが全景（南から）
60　59号竪穴住居石囲いがセクション（南から）
61　59号竪穴住居掘り方全景（東から）
ＰＬ－９
62　60号竪穴住居遺物出土状態（東から）
63　61号竪穴住居全景（南東から）
64　61号竪穴住居掘り方セクション（南から）
65　61号竪穴住居掘り方全景（南東から）
66　62号竪穴住居全景（南から）
67　62号竪穴住居掘り方全景（南から）
68　63号竪穴住居セクションＡ－Ａ´（東から）
69　63号竪穴住居全景（南東から）
ＰＬ－10
70　64号竪穴住居が全景（東から）
71　65号竪穴住居セクション（西から）
72　65号竪穴住居がセクション（南から）
73　65号竪穴住居全景（南から）
74　65号竪穴住居が全景（南から）
75　66号竪穴住居セクションＡ－Ａ´（東から）
76　67号竪穴住居遺物出土状態（北から）
77　67号竪穴住居全景（北から）
ＰＬ－11
78　1号竪穴遺構セクション（東から）
79　1号竪穴遺構遺物出土状態（南から）
80　1号竪穴遺構全景（南から）
81　1号竪穴遺構ピット全景（南から）
82　39号竪穴住居　1号石囲いが全景（南から）
83　2号石囲いが全景（南から）
84　3号石囲いがセクション（南から）
85　3号石囲いが全景（南から）
ＰＬ－12
86　4・6号石囲いがセクション（南から）
87　4・6号石囲いが全景（南から）
88　6号石囲いがセクション（南から）
89　5号石囲いが全景（南から）
90　7号石囲いがセクション（南から）
91　7号石囲いが全景（南から）
92　8号石囲いがセクション（南から）
93　8号石囲いが全景（南から）
ＰＬ－13
94　9号石囲いが全景（南から）
95　9号石囲いが掘り方セクション（南から）
96　10号石囲いが全景（南から）
97　10号石囲いが掘り方セクション（南から）
98　1・2号竪穴住居セクションＡ－Ａ´（東から）
99　1・2号竪穴住居遺物出土状態（西から）
100　1・2号竪穴住居が掘り方セクション（西から）
101　1・2号竪穴住居掘り方全景（西から）
ＰＬ－14
102　8号竪穴住居セクションＡ－Ａ´（南東から）
103　8号竪穴住居遺物出土状態（南から）
104　8号竪穴住居炉全景（南から）
105　8号竪穴住居が掘り方セクション（南から）
106　8号竪穴住居が掘り方全景（南から）
107　9号竪穴住居遺物出土状態（南から）
108　9号竪穴住居掘り方全景（南から）

109　11号竪穴住居セクション（南から）
ＰＬ－15
110　11号竪穴住居全景（南から）
111　11号竪穴住居埋甕検出状態（南から）
112　31号竪穴住居がセクション（南から）
113　31号竪穴住居が全景（南から）
114　35号竪穴住居セクションＡ－Ａ′（西から）
115　35号竪穴住居全景（南から）
116　35号竪穴住居掘り方全景（南から）
117　52号竪穴住居セクションＡ－Ａ′（南から）
ＰＬ－16
118　52号竪穴住居全景（南から）
119　52号竪穴住居が検出状態（東から）
120　52号竪穴住居が全景（東から）
121　52号竪穴住居掘り方全景（南から）
122　54号竪穴住居セクションＡ－Ａ′（南から）
123　54号竪穴住居全景（南から）
124　54号竪穴住居がセクションＡ－Ａ′（東から）
125　54号竪穴住居掘り方全景（西から）
ＰＬ－17
126　54号竪穴住居掘り方全景（南から）
127　13号竪穴住居遺物出土状態（南から）
128　13号竪穴住居セクションＡ－Ａ′（西から）
129　13号竪穴住居遺物出土状態（南から）
130　13号竪穴住居ピット全景（南から）
131　17号竪穴住居セクションＡ－Ａ′（東から）
132　17号竪穴住居遺物出土状態（南から）
133　17号竪穴住居遺物出土状態（南から）
ＰＬ－18
134　17号竪穴住居がセクション（南から）
135　17号竪穴住居全景（南から）
136　49号竪穴住居遺物出土状態（南から）
137　49号竪穴住居がセクション（南から）
138　49号竪穴住居が全景（南から）
139　49号竪穴住居が（南から）
140　49号竪穴住居がセクション（南から）
141　85Ｋ２号埋甕出土状態（南から）
ＰＬ－19
142　１号土坑セクション（南から）
143　１号土坑遺物出土状態（南から）
144　１号土坑全景（南から）
145　１号溝セクションＡ－Ａ′（南から）
146　１号溝遺物出土状態（南から）
147　１号溝遺物出土状態（北から）
148　１号溝全景（南から）
149　１号溝掘り方全景（南から）
ＰＬ－20
150　１号溝掘り方全景（南から）
151　１号集石全景（南から）
152　２号集石全景（南から）
153　３号集石全景（南から）
154　３号集石セクション（南から）
155　４号集石全景（南から）
156　４号集石セクション（南から）
167　４号集石掘り方全景（南から）
ＰＬ－21
158　５号集石全景（南から）
159　６号集石セクション（南から）
160　８号集石全景（南から）
161　９号集石全景（南から）
162　10号集石全景（西から）
163　10号集石遺物出土状態（西から）
164　10号集石遺物出土状態（東から）
165　11号集石全景（南から）
ＰＬ－22
166　11号集石全景（南から）
167　13号集石全景（南から）
168　14号集石セクション（南東から）
169　15号集石全景（西から）
170　84ＫＶ－８グリッド上器出土状態（南から）
171　84ＫＶ－８グリッド上器出土状態（南から）
172　84ＫＶ－８グリッド上器出土状態（南から）
173　51号竪穴住居作業風景
ＰＬ－23
174　１号溝作業風景（南から）
175　１号竪穴遺構の遺物上げ作業風景（東から）
176　35号竪穴住居の測量作業風景（南西から）
177　文化庁・土肥孝氏見学風景（南から）
178　ラジコンヘリによる航空写真撮影風景
179　85区埋め戻し作業風景（東から）
180　95区Ⅱ－３グリッド試掘トレンチ（南東から）
181　84ＫＸ－10グリッド試掘トレンチ（東から）
ＰＬ－24
６・７号竪穴住居　11号竪穴住居　14号竪穴住居（１）
ＰＬ－25
14号竪穴住居（２）　４号竪穴遺構　10号竪穴住居
ＰＬ－26
12号竪穴住居　15号竪穴住居　18号竪穴住居　32号竪穴住居（１）
ＰＬ－27
32号竪穴住居（２）　34号竪穴住居　36・37号竪穴住居（１）
ＰＬ－28
36・37号竪穴住居（２）
ＰＬ－29
36・37号竪穴住居（３）　38号竪穴住居　50号竪穴住居
ＰＬ－30
51号竪穴住居　53号竪穴住居　55号竪穴住居　56・58号竪穴住居
57号竪穴住居
ＰＬ－31
59号竪穴住居　60号竪穴住居　61号竪穴住居
ＰＬ－32
62号竪穴住居　63号竪穴住居　64号竪穴住居　65号竪穴住居
67号竪穴住居
ＰＬ－33
１号竪穴遺構　１号遺物集中　１号溝（１）
ＰＬ－34
１号溝（２）
ＰＬ－35
１号溝（３）　１・２号竪穴住居　８号竪穴住居
９号竪穴住居　35号竪穴住居
ＰＬ－36
48号竪穴住居　54号竪穴住居　13号竪穴住居（１）・３号竪穴遺構
ＰＬ－37
13号竪穴住居（２）　49号竪穴住居　17号竪穴住居　１号土坑
ＰＬ－38
10号集石　３号集石　14号集石　遺構外（１）
ＰＬ－39　遺構外（２）
ＰＬ－40　遺構外（３）
ＰＬ－41　遺構外（４）
ＰＬ－42　遺構外（５）
ＰＬ－43　遺構外（６）
ＰＬ－44　遺構外（７）

PL－45　道柄外（8）
PL－46　道柄外（9）
PL－47　道柄外（10）
PL－48　道柄外（11）
PL－49　道柄外（12）
PL－50　道柄外（13）
PL－51　道柄外（14）
PL－52　道柄外（15）
PL－53　道柄外（16）
PL－54　道柄外（17）
PL－55　道柄外（18）
PL－56　道柄外（19）
PL－57　道柄外（20）
PL－58　道柄外（21）
PL－59　道柄外（22）
PL－60　道柄外（23）
PL－61　道柄外（24）

第１章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会が、その実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、1994（平成６）年３月18日に「八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結し、八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定された事によって開始される事となった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施期間は群馬県教育委員会で、調査期間は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、同年４月１日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、平成６年度から八ツ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

その後、1999（平成11）年４月１日に調査実施機関である財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長と関東地方建設局長が「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、それ以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

さらに、2005（平成17）年４月１日には期間変更の協定書の変更がなされた。

楡木Ⅱ遺跡は吾妻郡長野原町林にあり、縄文時代・平安時代などを中心とする周知の埋蔵文化財包蔵地である。発掘調査の開始当初は、「林楡木Ⅱ遺跡」の名称であったが、群馬県教育委員会と長野原町教育委員会、それに財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との協議で、町の遺跡地図で採用されている「楡木Ⅱ遺跡」で統一する事となった。

（遺跡ＩＤ　667、県文化財システム遺跡番号　長野原町0051、八ッ場ダム関係埋蔵文化財遺跡番号ＹＤ04－09）

第１図　遺跡位置図（国土地理院・５万分の１『草津』）

群馬県文化財システム
http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/

遺跡全体で約18,000㎡が当初は対象であったが、工事に絡む関係で開始の時期を計４年、５次に分割して実施した。各年度の期間、面積は2000（平成12）年度が9月から12月までの４ヶ月の間に1,865㎡、2001（平成13）年度が7月からの２回で10,690㎡、2004（平成16）年度が4月から７月までの４ヶ月間に1,130㎡、2005（平成17）年度が9月から12月までの４ヶ月間の3,812㎡であり、合計で17,497㎡である。なお、各年次の調査範囲は第３図に表示したとおりである。

その発掘調査の年度ごとの内訳は、2000（平成12）年度が県道林長野原線建設に伴う長野原トンネル建設工事のための工事用進入路部分の建設、2001（平成13）年度が県道林長野原線楡木地区改良工事予定地部分及び楡木沢改良工事用進入路部分、2004（平成16）年度が県道林長野原線楡木沢改良工事部分、2005（平成17）年度が林代替地造成工事に伴うものであった。

なお、2001（平成13）年１月から建設省関東地方建設局は国土交通省関東地方整備局に、2002（平成14）年４月から群馬県教育委員会文化財保護課は群馬県教育委員会文化課にそれぞれ改編・改称されたが、後者は2008（平成20）年４月に再び群馬県教育委員会文化財保護課に改称された。

また、2006（平成18）年３月27日に吾妻町は東村と合併して、町名が東吾妻町に変更となった。

第２節　発掘調査の方法

1994（平成６）年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては遺跡名称の略号、調査区（グリッド）の設定については「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。本報告でもこれに準じ必要箇所について記載する事とする。

発掘調査における遺跡番号は八ッ場ダム建設にかかわる長野原町の大字５地区（１．川原畑、２．川原湯、３．横壁、４．林、５．長野原）ごとに番号を付与し、八ッ場ダム建設に伴う略称「ＹＤ」の後ろに続けた。略称、地区番号の次にはハイフン（－）を記入し、その次に各地区内に所在する遺跡に対して発掘調査順に通し番号を付与して遺跡略称とした。楡木Ⅱ遺跡の場合は、林地区の９番（ＹＤＯ４－Ｏ９）である。

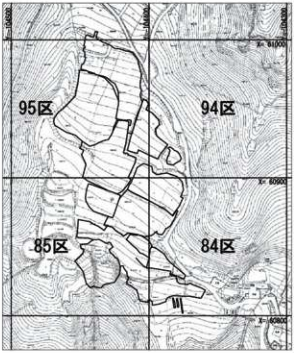
調査区（グリッド）については、八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財対象地域内を国家座標（2002年４月改正以前の日本測地系）の日本平面直角座標Ⅸ系を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（Ｘ＝58000.00　Ｙ＝－97000.00）とした。

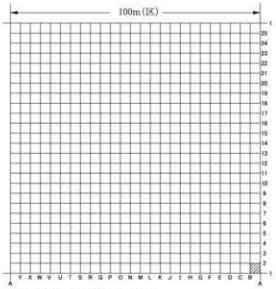
この基点から国家座標に準じて西・北方向に座標を設定した。八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財対象地域内は基点から西へ10km、北へ６kmの広範囲に所在する事から１km四方の大区画（地区と呼称）を西へ10区画、北へ６区画の計60区画を設定した。

この大区画の内部を100m四方の中区画（区と呼称）に区分し、東南角から南列を西に１区、２区、10区とし、次の列を11区～20区のように100区まで設定した。

この中区画の内部は４m四方の625個の小区画に細分した。この細分した区画は東南を基点に西へはＡ～Ｙまでのアルファベット、北へは１～25までの数字を付与して各区画を区分した。すなわち、楡木Ⅱ遺跡の所在する38地区85区の基点となる小区画は38地区85区Ａ－１と呼称される事になる。

この小区画を基にして遺構図測量、遺物取り上げ、旧石器時代等の試掘調査を実施するときの基準として使用した。





第２図　グリッド設定図

第３節　発掘調査の経過

楡木Ⅱ遺跡の発掘調査は工事工程の関係から、４ヵ年にまたがると共に継続する形ではない事から、先行して発掘調査する箇所の表土掘削を随時開始する事となった。そのため、その排出土については周辺の場所に一時盛り土保管場所として対応し、その後は発掘調査が終了した場所を随時置き場にした。また、発掘調査は基本的に以下の調査方法で行われた。以下、これを各年度毎の各調査範囲毎に繰り返し実施した。

1．掘削機（バックホー）による基本土層の第Ⅰ層の表土の暗褐色土層の掘削を行う。

2．第Ⅱ層の中近世遺構確認・検出面、及び第Ⅲ層の平安時代確認・検出面、さらにその下位からの縄文時代遺構は人手による遺構確認作業を行い、個々の調査を行う。（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ面）

3．遺構調査終了後、84区を中心に基本土層の第Ⅴ層から下位の地層に対しての試掘を実施し、より古い時代の遺構確認作業を行った。（Ⅳ面）

検出した遺構については平面、土層観察断面等の測量、写真撮影による記録を作成した。遺跡全体図や遺構個別図の測量は多くを委託したが、簡便なものは掘削作業員によって作図を行った。また、遺跡

第３図　発掘調査範囲図（年度別）

全体図や広範囲におよぶ遺構図については航空写真撮影による測量にて対応した。

遺跡全景や遺構個別写真等の記録写真の撮影には中型と小型カメラを併用して、基本的に６×７版白黒と35㎜の白黒（モノクロ）フィルムと、35㎜のカラースライド（リバーサル）で行い、遺構全景の撮影にはモニタリングカメラ、ローリングタワーを場合によって併用し、各段階での全体写真の撮影にはラジコンヘリ及び高所作業車を使用して、上空からの航空写真や高所からの俯瞰写真を撮影した。

各年度毎に、すべての作業が終了後に埋め戻し作業を行い、工事側への区画の引き渡しをした。

第４節　整理の方法と経過

楡木Ⅱ遺跡の整理作業は、2006（平成18）年の10月から2008（平成20）年の９月までの24ヶ月の計画に基づいて、当初は八ッ場調査事務所で開始されたが、2007（平成19）年４月から本部分室での整理体制への異動・移動という事態になり、急遽荷物をまとめる事となった。

そのため、整理作業に当たる整理作業員総入れ替えという異例の事態も伴い、引越し後の整理作業の再開にあたっては、その内容と工程について詳細な引継を行うというこれまた異例の事態となった。

まず、土器や石器・石製品などの遺物については、外部発注による洗浄・注記などの基礎整理を既に行っていたために、洗浄・注記の有無の確認、取り上げ番号などのチェックなどを行った。

次に、遺構別・層位別・地点別の分類・区分けの後に接合・復元作業を開始し、実測個体の選び出しと実測・トレース作業を行った。さらに、図面類については原図全体の確認・台帳化と、使用原図の選び出しと鉛筆によるトレース素図とトレース図作成を実施した。また、出土した遺物の図面上での位置の確認などを行った。そして、仕上がりの確認とともに、レイアウトの作成、遺構や遺物、それに関連する資料の図版作成を行った。

写真関係では、現場で撮影した35ミリと６×７の個々の白黒写真と35ミリスライドについては、出土状態など写真の種類などの確認、記録カード・台帳化を行った。特に、スライドは保存用と活用用の２種類への振り分け編集作業を実施し、報告書刊行後の利用に備える準備をした。

遺物は選び出し個体の写真撮影から行った。今年度からデジタル撮影に移行しており、これらの作業がほぼ終了した時点で、レイアウトの作成、遺物・遺構・写真図版の作成を開始した。

同時に、報文原稿については整理担当者を中心に執筆したが、一部については発掘調査担当者や各時代・各遺構・遺物を専門分野とする職員らの助言・協力を得た。自然科学分析などについては、それぞれの専門の研究者による各分析結果の内容を第５章として巻末に収録した。

これらの作業をすべて行い、報告書作成の作業が終了し、印刷工程を経て刊行となった。

こうした整理作業にあたっては、測量した遺構図および撮影した写真は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団資料管理マニュアルに従って基礎整理を実施した。

また、出土した遺物は土器と石器については洗浄・注記を行い、今回の整理作業まで八ッ場ダム調査事務所で保管していたが、年度間の基礎整理の進捗状況の差異による手直し・追加が生じたため、これを行ったうえで本部に収納保管した。

なお、金属器・金属製品については整理作業時に図の作成、写真撮影が可能な状態になるように保存処理を行い本部にて保管した。

第2章　遺跡の環境

第1節　地理

吾妻郡長野原町は群馬県の西部、長野県との県境に位置する浅間山の北東に位置する。

行政区画としては、東は吾妻郡東吾妻町（旧・吾妻町）、北は同郡六合（くに）村、北西は同郡草津町、西は同郡嬬恋（つまごい）村、南は長野県軽井沢町、南東は高崎市（旧・倉渕（くらぶち）村）にそれぞれ接する。

周囲は標高1,000m～1,800m級の山々が連なり、南東部の高崎市との境に鼻曲（はなまがり：標高1,655m）と浅間隠（あさまがくし：標高1,756.7m）、東の東吾妻町との境に高間（たかま：標高1,341.7m）、西部に浅間隠・菅峰（すがみね：標高1,473.5m）・高間・笹岳（ささとや：標高1,402m）、北部に吾嬬（かづま：標高1,181.5m）・薬師（やくし：標高974.4m）等の山々が存在する。

河川では、吾妻郡嬬恋村大字田代と長野県との境界に位置する鳥居峠（とりいとうげ：1,362m）付近から流れ出す吾妻川が東流し、それに万座川や白砂川、それに熊川等の小河川が南流、あるいは北流して、それぞれ吾妻川に合流する。

主な集落は吾妻川の河岸段丘上にある。吾妻川の谷は長野原地区付近ではその幅がやや広く、河岸に最上位・上位・中位・下位の4段もの河岸段丘が発達しているが、川原湯地区より東では基盤の第三紀層を刻み込んで吾妻渓谷を形成している。

本遺跡の所在する林地区は、周囲を山々に囲まれた東西に細長い地形を呈し、鳥居峠附近から流れ出す吾妻川が左右両岸に段丘が形成されているものの、山間地特有の河川の蛇行により主に右岸側のみが幅が狭くなっており、一部では渓谷を作り出している。本遺跡が立地する段丘は最下位面で関東ロームがほとんど堆積していない事から、その形成時期は完新世の時期と考えられる。この緩やかな傾斜の段丘やその上位の丘陵上に縄文時代から平安時代にかけての遺跡がいくつも存在しており、現在でも住宅地や水田、畑として利用されている。特に、楡木・上菅は豊富な湧水を利用しての沢水田も営まれている。

参考文献
長野原町誌編纂委員会編　1976　『長野原町誌』上

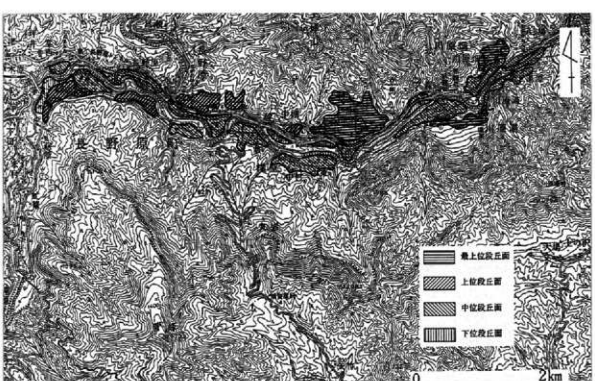
第4図　遺跡位置図（国土地理院・20万分の1「長野」）

第２節　地形と地質

長野原町の地形・地質に大きな影響を与えたのは浅間火山である。町域の北西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の４つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。約21,000年前の黒斑火山の噴火では、岩屑流と「応桑泥流」と呼ばれる泥流が発生している。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めている。この堆積物によって吾妻川の浸食が進み、その両岸に最上位と上位の段丘面が形成されている。浅間山は、この後も多くの火山堆積物を堆積させているが、特に町域では浅間－草津黄色軽石（As-YPk、10,500～11,500年前）の堆積が顕著である。また、1783（天明３）年の前掛山の噴火により発生した泥流は下位段丘や中位段丘を数m～数十mの厚さで覆っている。

平地は吾妻川に沿って僅かに分布しており、階段状の河岸段丘の上位にある。ここはこの地区の主な居住区であり、農業生産の中心にもなっている。

この段丘は、吾妻川からの比高の差を基準に下位段丘・中位段丘・上位段丘・最上位段丘の４つに分類されている。各段丘面の現在の吾妻川からの平均的な比高は、下位段丘で約10～15m、中位段丘で約30m、上位段丘で約60～65m、最上位段丘で約80～90mとなっている。このうち、上位・最上位の段丘面は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を基盤とし、その上に重なる関東ローム層中には、約11,000年前に噴出したと考えられるAs-YPkが最上位面で約２m堆積している。林地域では、集落の大部分が存在する林地区がこのなかの最上位段丘面に、中棚地区が上位段丘面に、下田地区が中位段丘面に、下原遺跡の位置する下原地区が下位段丘面にそれぞれ相当する。楡木・上菅はその最上位段丘面に急な傾斜地特有の崩落土壌による扇状地形が組み合わさったものである。



第５図　吾妻川流域の地形図（「長野原町の自然」）

第3節　歴史

この地域の歴史については、既に長野原町教育委員会の富田氏によって詳細な記述がなされており、それを参考に主として林地区を中心に記述する。

旧石器時代　現在までにこの時期の遺跡は確認されていない。ただし、遺構外ながら柳沢城跡で細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の削器が1点出土している。長野原一本松遺跡でも尖頭器が出土している。

縄文時代　縄文時代になると遺跡数は増大する。この時期の遺跡の主なものとして本遺跡以外に、石畑遺跡、坪井遺跡、長畝Ⅱ遺跡、暮坪遺跡、立馬Ⅱ遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、西久保Ⅰ遺跡、幸神遺跡、勘場木遺跡、向原遺跡、滝原Ⅲ遺跡等があげられる。草創期の遺跡として表裏縄文土器が出土した石畑岩陰遺跡が著名であるが、横壁勝沼遺跡からも表採ながら草創期の槍先形尖頭器が出土している。早期は立馬遺跡で初頭の撚糸文期の住居跡1軒、立馬Ⅱ遺跡で撚紋土器等、前期では坪井遺跡で初頭の花積下層式期の1軒、暮坪遺跡で前期前葉の二ツ木式期の2軒、前期中葉～後葉が楡木Ⅱ遺跡で10軒、中期は立馬Ⅱ遺跡で初頭から前半の五領ヶ台式～阿玉台式の9軒、幸神遺跡で完形の阿玉台式土器を埋設した土坑1基が検出されている。中期後半が最も多く横壁中村遺跡と長野原一本松遺跡では共に250軒以上の大規模な集落を形成していた事が判明している。この他に坪井遺跡の19軒、幸神遺跡2軒、勘場木遺跡1軒、長畝Ⅱ遺跡2軒が検出されている。後期に至っても横壁中村遺跡と長野原一本松遺跡でも引き続き集落が形成されており、他に向原遺跡で5軒検出されている。晩期は川原湯勝沼遺跡で2個の土器を埋甕した土坑が検出され、再葬墓の可能性が指摘されている。

弥生時代　この時期の遺跡は極めて希薄であり、前期は横壁中村遺跡で樫王式の甕を埋設した土坑が検出され、再葬墓の可能性が指摘され、楡木Ⅲ遺跡で土器が集中して出土している。中期後半は立馬Ⅰ遺跡で土器棺墓が1基と竪穴住居が2軒、後期の樽式は二社平遺跡で破片が多数出土している。

古墳時代　1938（昭和13）年に編纂された『上毛古墳綜覧』によれば、長野原町には2基の古墳が存在するとされており、大津の鉄塚と与喜屋の五輪塚が該当するが、現在までに発掘調査によって確認されたものはひとつも無く、現時点では東吾妻町の岩島地区が西限である。集落関係では林宮原Ⅱ遺跡で1軒、下原遺跡での1軒が2例目であり、遺物は1976（昭和51）年に刊行された『草津温泉誌』第壱号にも長野原町大津の金丸製材所の西地点で出土した壺型土器と高坏が掲載されており、これが吾妻川流域の最奥の古墳時代の資料として紹介されている。これらからみて、遺跡の数が極端に少なく、それぞれの規模も小さい事から古墳が構築される土台がなかった可能性が高いと言えよう。

奈良・平安時代　10世紀ころに編集された『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』によれば、古代律令制での吾妻（阿加豆末：あがつま）郡は、大田郷（おおた、吾妻町太田地区から吾妻川上流の三島までの右岸一帯）、伊参郷（いさ、中之条町から原町にかけての吾妻川左岸一帯）、長田郷（ながた：中之条町北東部から高山村にかけての名久田川流域）の三つの郷に区分され、その郡衙（役所）は原町の大宮巌鼓神社周辺と考えられているが、近年の発掘調査からは疑問視されてきている。一方、長野原町のある西吾妻地区には郷が存在しないとされている。確かに奈良時代の遺構・遺物は極めて希薄で、分布調査でも僅かに確認されているのみである。

だが、平安時代になると遺跡数は増加する。本遺跡以外では、主な遺跡としては長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、林宮原遺跡、向原遺跡、長畝Ⅰ遺跡、坪井遺跡、花畑遺跡、下原遺跡、川原湯勝沼遺跡が挙げられる。各遺跡での竪穴住居の検出数は数軒と少ないものの、本遺跡では9世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居が38軒もまとまって検出されており、「三家」などと書かれた墨書土器の存在から、高崎市山名町にある山ノ上碑に記載された

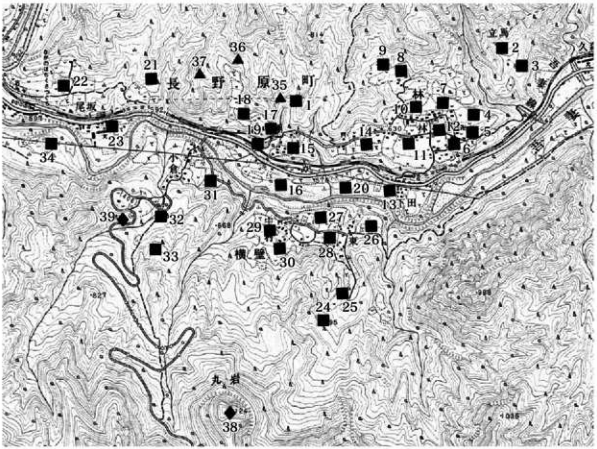
「佐野三家」との関連を強く想定させる。さらに、朝廷の直轄地である「みやけ・ミヤケ・屯倉・官家」との関連をも想定される。また、西吾妻地区でも最大規模の竪穴住居の数は、たとえ同時存在ではないにしろ、存続期間が９世紀後半から10世紀前半の約百年と短い期間であることから、古代の律令制における地方行政の最も下位の単位である郷に近い形態の集落の存在が推定される。また、町内から瓦塔の破片が発見されており、町重要文化財に指定となっているが、詳細な出土地は不明である。

中世　この時代の西吾妻地区の様子は、吾妻氏の拠点である東吾妻地区に比べて不明な点が多いが、『吾妻鏡』によれば、1241（仁治２）年には三原庄が存在したとされ、信濃源氏の末裔とされる海野氏とその一族の下屋・鎌原・西窪・羽尾らの支配下にあったとされている。後の戦国期には齋藤氏や真田氏らが活躍したと記されている。特に、林の地については、1563（永禄６）年の９月の長野原城の戦いの際に、齋藤氏らが王城山から林の神社（現在の王城）を拠点にして、合戦の地となった事が『加沢記』等にも記載されている。羽尾氏から1566（永禄９）年の御山城攻略に功績のあった湯本氏も20貫文を所領している。その後は、齋藤氏が滅亡すると共に、武田氏による湯本氏らへの支配が強化されるが、武田氏やその後の北条氏の滅亡後、真田氏が支配する事となる。この時期の資料としては柳沢城や丸岩城などの城館跡などが中心であったが、近年の発掘調査により掘立柱建物などを検出する遺跡が増えつつある。主な遺跡としては、横壁中村遺跡、二反沢遺跡、下原遺跡等が挙げられる。下原遺跡では中世の畑跡や建物跡が検出されている。二反沢遺跡からは中世の区画跡の他、羽口、鉄滓、椀状滓等の製鉄関連遺物が検出されている。真田の検地では571石と倍増されている。

近世　沼田真田氏による支配の後、1681（天和元）年の改易により、この地域の対部分は幕府領や旗本領のいわゆる天領となり、明治維新までその体制が続き、明治以後に林村から1889（明治22）年の１町６村による町村合併により現在の長野原町となった。村高は「寛文郷帳」では125石うち田方14石・畑方111石、「元禄郷帳」では195石、「天保郷帳」と「旧高旧領」では202石である。1857（安政４）年の人別改帳では、戸数73・人数322・馬16と記されている。なお、近世の遺跡の大部分が、1783（天明３）年の浅間山の噴火に伴い噴出した浅間Ａ軽石と泥流堆積物で埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡、石畑遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁中村遺跡、下田遺跡、中棚Ⅱ遺跡、久々戸遺跡、尾坂遺跡等が挙げられる。特に、久々戸遺跡の６次調査では、江戸時代の街道である「草津道」が検出されている。小林屋敷遺跡からは地区の豪農であった小林家の屋敷の一部が検出されており、文献との照合もなされている。尾坂遺跡や東宮遺跡からも屋敷が検出されている。林村の被害は、泥押し90石・流死者18・飢人25生産基盤としては、畑を中心に検出されており、その中に麻の占める割合が高い点、それに対して水田の比率が低い等があげられる。

また、下原遺跡などで1742（寛保２）年の洪水の際に生じた土砂崩れで埋没したと考えられる畑跡も検出されるなど、さらに古い洪水の存在も推定される。

参考文献
（概説書・図録類）　尾崎喜左雄監修　1987『日本歴史地名大系10　群馬県の地名』平凡社、日本地名大辞典編纂委員会編　1988『日本地名大辞典』10　群馬県　角川書店、中之条町歴史民俗資料館　2003『常設展示解説図録』
（県町村史誌）　群馬県　1938『上毛古墳綜覧』　群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第５号、長野原町誌編纂委員会編　1976『長野原町誌』上、群馬県史編さん委員会編　1990『群馬県史』通史編　１、1981『群馬県史』資料編　３
（発掘調査報告書）　群馬県教育委員会編　1988　群馬県の中世城館跡　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995～2007　年報：14～26、1998　長野原久々戸遺跡、2002　長野原一本松遺跡（１）、2002　八ッ場ダム発掘調査集成、2003　久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡、2004　久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡（２）・西ノ上遺跡・北郷Ａ遺跡、2005、横壁中村遺跡（２）2005　川原湯勝沼遺跡（２）、2006　横壁中村遺跡（３）、2006　立馬Ⅱ遺跡、2006　上郷Ｂ・廣石Ａ・二反沢遺跡、2006　横壁中村遺跡（４）、2006　立馬Ⅰ遺跡、2007　下原遺跡Ⅱ、2007　三平Ⅰ・Ⅱ遺跡、2007　横壁中村遺跡（５）、2007　長野原一本松遺跡（２）、1995～2007　遺跡は今：１～15
長野原町教育委員会　1996　向原遺跡、2000　坪井遺跡Ⅱ、2001　幕坪遺跡、2004　林宮原Ⅱ遺跡、2005　小林屋敷遺跡、2007



第6図　周辺遺跡図（国土地理院・2.5万分の1「草津」）

番号	遺跡名	町登録番号	番号	遺跡名	町登録番号	番号	遺跡名	町登録番号
1	二反沢	52	14	林宮原	48	27	横壁中村	24
2	立馬Ⅰ	37	15	中棚Ⅰ	49	28	山根Ⅰ	26
3	立馬Ⅱ	213	16	中棚Ⅱ	203	29	山根Ⅱ	29
4	東原Ⅰ	38	17	楡木Ⅰ	50	30	山根Ⅲ	30
5	東原Ⅱ	39	18	楡木Ⅱ	51	31	西久保Ⅰ	31
6	東原Ⅲ	40	19	楡木Ⅲ	202	32	西久保Ⅱ	32
7	上原Ⅰ	41	20	下原	204	33	西久保Ⅲ	33
8	上原Ⅱ	42	21	幸神	62	34	久々戸	200
9	上原Ⅲ	43	22	長野原一本松	63	35	滝沢観音岩陰	55
10	上原Ⅳ	44	23	尾坂	201	36	蜂ツ沢岩陰	56
11	林中原Ⅰ	45	24	上野Ⅰ	21	37	御嶽山岩陰	57
12	林中原Ⅱ	46	25	上野Ⅱ	22	38	丸岩城跡	34
13	下田	47	26	横壁勝沼	23	39	柳沢城跡	35

第1表　遺跡一覧

大字	町遺跡番号	遺跡名	YD番号	調査年度（●:発掘調査　◇:試掘調査）															遺構・遺物の時期	備考
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
川原畑	208	東宮遺跡	YD1-02		●		●									◇	●	●	近世	H7･9を群理文303集(八ッ場２集)で報告
川原畑	210	石畑遺跡	YD1-03	◇		◇	◇	●											縄文・弥生・近世	H8･9･10を群理文303集(八ッ場２集)で報告
川原畑	3	三平Ⅰ遺跡	YD1-04					◇						●	●				縄文・弥生・平安	H10を群理文303集(八ッ場２集)､H16･17を群理文401集(八ッ場13集)で報告
川原畑	11	二社平岩陰	YD1-05			◇		◇											近世	H8･10を群理文303集(八ッ場２集)で報告
川原畑	4	三平Ⅱ遺跡	YD1-06											●					縄文・平安・中世	H16を群理文401集(八ッ場13集)で報告
川原畑	5	上ノ平Ⅰ遺跡	YD1-07							◇						●	●		縄文・平安	
川原畑	1	温井Ⅰ遺跡																	縄文・平安	
川原畑	2	温井Ⅱ遺跡																	縄文	
川原畑	6	上ノ平Ⅱ遺跡																	不明	
川原畑	7	西宮遺跡	YD1-08												◇				縄文	
川原畑	8	滑沢岩陰																	縄文	
川原畑	9	石畑Ⅰ岩陰																	縄文	
川原畑	10	石畑Ⅱ岩陰																	不明	
川原畑	12	三ツ堂岩陰																	不明	
川原畑	13	西宮岩陰																	不明	
川原畑	209	二社平遺跡																	縄文・平安・近世	
川原湯	16	川原湯中原Ⅰ遺跡																	縄文	
川原湯	17	石川原遺跡																	縄文	
川原湯	18	川原湯中原Ⅱ遺跡																	平安	
川原湯	19	川原湯中原Ⅲ遺跡																	縄文・平安	
川原湯	20	北入遺跡																	縄文	
川原湯	206	川原湯勝沼遺跡	YD2-01				●						●	●					縄文・古墳・平安・近世	H9を群理文303集(八ッ場２集)､H15･16を群理文356集(八ッ場６集)で報告
川原湯	212	西ノ上遺跡	YD2-02									●							近世	H14を群理文349集(八ッ場４集)で報告
川原湯	207	金花山砦跡																	中世	H6･7を群理文303集(八ッ場２集)で報告
横壁	23	横壁勝沼遺跡	YD3-01	●	●														縄文・弥生・平安・中世・近世	H11･12を群理文303集(八ッ場２集)で報告
横壁	31	西久保Ⅰ遺跡	YD3-02	◇				●	●		◇				◇				縄文・弥生・平安・中世・近世	
横壁	24	横壁中村遺跡	YD3-03			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			縄文・弥生・平安・中世・近世	元明面を群理文319集(八ッ場３集)､縄文中期住居を群理文355･368･381･406集(八ッ場５･７･10･14集)で報告
横壁	29	山根Ⅲ遺跡	YD3-04					●			●				◇	●			縄文・弥生・平安・近世	H10を群理文303集(八ッ場２集)､H13･18を群理文429集(八ッ場17集)で報告
横壁	21	上野Ⅰ遺跡																	縄文・平安	
横壁	22	上野Ⅱ遺跡																	平安・近世	
横壁	26	山根Ⅰ遺跡								●					●	●			平安	
横壁	28	山根Ⅱ遺跡										◇	◇						平安・近世	
横壁	30	山根Ⅳ遺跡												◇					縄文・平安	
横壁	32	西久保Ⅱ遺跡																	平安	
横壁	33	西久保Ⅲ遺跡																	不明	
横壁	34	丸岩城跡																	中世	
横壁	35	柳沢城跡																	中世	
横壁	216	西久保Ⅳ遺跡								◇									近世	
林	47	下田遺跡	YD4-01	◇	●		◇												縄文・近世	H6･7･9を群理文303集(八ッ場２集)で報告

大字	町遺跡番号	遺跡名	YD番号	調査年度（●:発掘調査　◇:試掘調査）															遺構・遺物の時期	備考
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
林	41	上原Ⅰ遺跡	YD4-03				◇												縄文・平安・近世	H9を群埋文303集(八ッ場２集)で報告
林	205	花畑遺跡	YD4-05					●	●	●									縄文・平安	H10～12を群埋文303集(八ッ場２集)で報告
林	202	檜木Ⅲ遺跡	YD4-06					●											縄文・弥生・平安・中世	H10を群埋文303集(八ッ場２集)で報告
林	203	中郷Ⅱ遺跡	YD4-07						●	●	●		●						近世	H11～13を群埋文319集(八ッ場３集)、H15を群埋文349集(八ッ場４集)で報告
林	204	下原遺跡	YD4-08							●	●		●	●					古墳・平安・中世・近世	H12・13を群埋文319集(八ッ場３集)、H16・17を群埋文389集(八ッ場12集)で報告
林	51	檜木Ⅱ遺跡	YD4-09							●	●			●	●				縄文・平安・中世	本書で報告
林	52	二反沢遺跡	YD4-10							●									中世・近世	H12を群埋文379集(八ッ場９集)で報告
林	37	立馬Ⅰ遺跡	YD4-11								◇	●			●				縄文・弥生・平安・中世・近世	H14・17を群埋文388集(八ッ場11集)で報告
林	213	立馬Ⅱ遺跡	YD4-12									●							縄文・弥生・平安	H14を群埋文375集(八ッ場８集)で報告
林	44	上原Ⅳ遺跡	YD4-13										●						縄文	H15を群埋文429集(八ッ場17集)で報告
林	45	林中原Ⅰ遺跡	YD4-14											●			●	●	縄文・平安・中世	
林	46	林中原Ⅱ遺跡	YD4-15											●					縄文	
林	42	上原Ⅱ遺跡	YD4-16											●					平安	
林	59	林の御塚	YD4-17		◇			◇											縄文・近世	H7・10を群埋文303集(八ッ場２集)で報告
林		立馬Ⅲ遺跡	YD4-18														●	●	縄文・平安	
林	38	東原Ⅰ遺跡																	縄文・平安・近世	
林	39	東原Ⅱ遺跡	YD4-19																縄文	
林	40	東原Ⅲ遺跡	YD4-20																平安・近世	
林	43	上原Ⅲ遺跡													◇				平安	
林	48	林宮原遺跡																	縄文・古墳・平安	
林	49	中櫃Ⅰ遺跡																	縄文・近世	
林	50	檜木Ⅰ遺跡																	縄文・平安	
林	53	久森沢Ⅰ岩陰群																	不明	
林	54	久森沢Ⅱ岩陰																	不明	
林	55	滝沢鍛冶岩陰																	不明	
林	56	鋤ヶ沢岩陰																	縄文	
林	57	御嶽山岩陰																	不明	
長野原	63	長野原一本松遺跡	YD5-01	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	縄文・平安・中世・近世	H6～8を群埋文287集(八ッ場１集)、H9～11を群埋文408集(八ッ場15集)で報告
長野原	201	尾坂遺跡	YD5-02	◇	◇			●								●	●	●	近世	H6・7・10を群埋文303集(八ッ場２集)で報告
長野原	200	久々戸遺跡	YD5-03		●		●	●	●				●						縄文・近世	H7を群埋文240集、H9～11を群埋文319集(八ッ場３集)、H15を群埋文349集(八ッ場４集)で報告
長野原	62	幸神遺跡	YD5-04			●	●					●			●				縄文・平安・近世	H8・9・14・17を群埋文429集(八ッ場17集)で報告
三島	57	上郷B遺跡	YD6-01								●	●							縄文・古墳・平安・近世	H13・14を群埋文379集(八ッ場９集)で報告
三島	95	上郷岡原遺跡	YD6-02							◇	●	●	●	●	●	●	●	●	縄文・弥生・平安・中世・近世	H14・16を群埋文410集(八ッ場16集)で報告
三島	17	上郷A遺跡	YD6-03										●				●	●	縄文・古墳・平安	H15を群埋文349集(八ッ場４集)で報告
三島		上郷西遺跡	YD6-04														●	●	縄文・平安・近世	
三島	58	大沢遺跡	YD6			◇													縄文・平安・近世・近代	
大柏木	96	廣石A遺跡	YD7-01								●								中世・近世	H13を群埋文379集(八ッ場９集)で報告
大柏木		大柏木上ノ沢遺跡	YD7			◇														
松谷		松田前田遺跡	YD8			◇														

第４節　基本土層

本遺跡の基本土層は、基本的には長野原町の吾妻川左岸に位置する遺跡と同様であるが、同地区内、遺跡内でも場所によって若干の違いがある。特に、傾斜地特有の崩落堆積層が部分的に認められる。

榆木Ⅱ遺跡の基本土層

Ⅰ層　表土　畑の耕作土。

Ⅱ層　暗褐色土　細粒の黄色軽石を含む。平安時代以降。浅間Ｃ軽石（As-C）・Ｄ軽石（As-D）。

Ⅲ層　黒褐色土　比較的粗粒の黄色軽石を多く含む。縄文時代中期。浅間六合軽石（As-Kn）。上面が平安時代の確認面。

Ⅳ層　暗褐色土～黒褐色土　黄色軽石を多く含む。色調が特に暗い。縄文時代前期。

Ⅴ層　黄褐色土　ローム漸移層。縄文時代早期。浅間総社軽石（As-Sj）。上面が撚糸文検出面。

Ⅵ層　ソフトローム

Ⅶ層　浅間草津黄色軽石（As-YPk）層

【対比資料】三平Ⅰ遺跡及び三平Ⅱ遺跡の基本土層

Ⅰ層　暗褐色土（10YR3/3）。現在の耕作土及び表土。やや砂質で粘性に乏しい。榆木Ⅱ・Ⅰ層に対比。

Ⅱ層　褐色土（10YR4/4）。ローム質土の２次堆積層。砂質で粘性弱い。斜面上位方向（北方向）からの土砂崩落に伴う堆積層と考えられる。径５～10mmの亜角礫５～７％含む。

Ⅲ層　褐色土（10YR2/2）。粒子細かく、しまり・粘性ともに弱い。浅間粕川テフラ（As-Kk）の純堆積層が部分的に残存する。平安時代以降の遺構確認面及び遺物包含層に相当する。榆木Ⅱ・Ⅱ層に対比。

Ⅳ層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）。Ⅱ層に類似したローム質土の２次堆積層で土砂崩落に伴う堆積層と考えられる。榆木Ⅱ・Ⅲ層に対比。

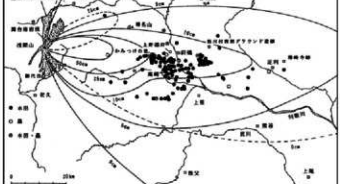
Ⅴ層　褐色土（10YR3/2）。粒子細かい。しまり粘性ともⅢ層より強い。白色あるいは黄色軽石粒を３～５％含む。縄文時代の遺構確認面及び遺物包含層に相当する。榆木Ⅱ・Ⅳ層に対比。

Ⅵ層　褐色土（10YR4/6）。Ⅶ層のローム層への漸位層。粒子細かく、しまり強い。榆木Ⅱ・Ⅴ層に対比。

Ⅶ層　黄褐色土（10YR5/6）。ローム層。粒子細かく、しまり強い。三平Ⅱ遺跡81区Ｍ－13並びにＯ－17グリッドの当層位において、黄灰色泥流堆積物が確認されている。榆木Ⅱ・Ⅵ層に対比。

Ⅷ層　層厚80～90cmの浅間草津黄色軽石（As-YPk）純堆積層。パミス粒径は最大20～30mm。最上層部及び最下層部には硬化したアッシュの純堆積。榆木Ⅱ・Ⅶ層に対比。

第Ⅰ層
第Ⅱ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第Ⅶ層
第Ⅷ層



第７図　基本土層図

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

本遺跡の発掘調査の対象地全域は、最上位河岸段丘面よりも上位の扇状地形である。ここには下位に応桑泥流が、上位には関東ローム層終末期からの堆積以後の土壌が堆積している。その中には年代の鍵層となる軽石や火山灰も堆積しているが、純層ではなく攪拌された状態であり、文化層の把握がやや難しい状態である。

今回の発掘調査による調査面は２面（一部３面）である。確認できた遺構は、古い順に縄文時代、平安時代、及び中近世に属するものである。種類としては居住機能としての竪穴住居跡が中心である。遺物は縄文時代、弥生時代、平安時代、及び中近世のものである。調査面積は単面で約18,000㎡であるが、部分的に複数の文化面を有する地域もあるので、それに対応して数値が増す事となる。

本章では時期の古い順にそれぞれ遺構の種類別に項目を設定し、個々の遺構について説明を加えた。そのため、遺構に付けられた番号順になっていない場合もある。次に、各時代毎の遺構・遺物にその特徴をみていく事とする。

まず、旧石器時代は試掘トレンチを設定し調査した。As-YPk（浅間草津黄色軽石）を確認したものの、遺構や遺物は検出されなかった。

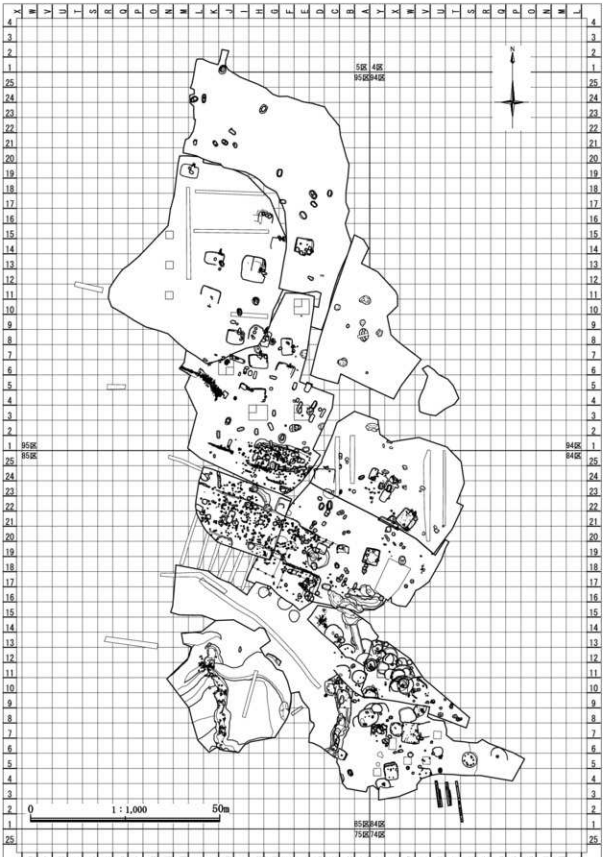
本書で報告する、縄文時代は基本土層のⅣ層からⅤ層にかけて、遺構として竪穴住居、竪穴遺構、集石などの遺構が多数検出されている。遺物としては草創期の表裏縄文、早期初頭の撚糸文や押型文、前期前半の黒浜式、後半の諸磯式、中期前半の五領ヶ台式、勝坂式、阿玉台式、後半の加曽利Ｅ式、さらには後期の加曽利Ｂ式の土器や、打製石鏃、打製石斧、スタンプ形石器などの石器が出土している。弥生時代は、遺構は確認されていないものの、後期の樽式土器が少量出土している。古墳時代については、遺構も遺物も確認されなかった。

次に、先に刊行した『檜木Ⅱ遺跡（１）（平安時代・中近世編）』に収録したのは平安時代と中近世に関する事で、特徴的な遺構と遺物については記述するが、詳細はそちらを参照していただきたい。

平安時代では、南側への傾斜する地形のために住居の南壁の残りが悪いものの、基本土層のⅡ層からⅢ層にかけて、38軒の竪穴住居や３軒の竪穴遺構などが検出されている。特徴としては、この地域の特徴でもある焼失家屋の数が多い事、「三家」や「□家」、「三」と書かれた５点の墨書土器の存在、須恵器の羽釜「吉井型」と「月夜野型」の共伴問題などがある。また、浅間Ｂテフラと呼ばれる1108（天仁元）年浅間山給源の軽石や火山灰は明確ではないものの、第Ⅲ層の中に混じり込んでいる。さらに、浅間－箱川軽石と呼ばれる1128（大治３）年に降り積もった火山灰が、埋没途中の陥し穴の堆積層中で検出されている事から、少なくとも平安時代の陥し穴が何基かは存在したと考えられる。

中世以降から近世にかけては、基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を掘り込んだ溝が13条検出され、さらに、傾斜地を３段ほどの雛壇状に造成して、そこに掘立柱建物が何棟も築造されていた。後述するが、この地に存在する民間信仰の対象物である『つぶらっこ』様に関連するものと考えられる。この他に多数の土坑、ピットなどが検出されているが、あるいはこの中に掘立柱建物群に関連するものも存在するのかも知れない。出土遺物は古いものでは僅かであるが中国からの貿易陶磁である青磁があり、他に擂鉢や碗などの陶磁器や内耳などの軟質陶器などの破片がいくつも出土しており、その大部分は16世紀以降のものである。

さらに新しい時期の遺構としては、扇状地形を利用して、現在の崖部分でAs-YPk（浅間草津黄色軽石）を露出させて、その部分を石組みした湧水遺構と、そこから吾妻川に向かって南に流れ下る沢が存在する。また、石垣を備えたテラスの上に残された焼土と、それにまつわる昭和初期までの麻作りに係わる遺構と考えられる焼土などが出土している。



第８図　遺跡全体図（1000分の１）

第２節　縄文時代

（1）遺構と出土遺物

この時期は、文化層の第４面に相当する。確認面・遺構検出面は主に第Ⅴ層下面から第Ⅳ層上面にかけてであり、基本土層の第Ⅴ層が包含層である。検出された遺構は主に竪穴住居であり、縄文時代早期から中期前半にかけての50軒、それに竪穴遺構が４基である。それ以外に土器が埋納されていた１号土坑と、それに縄文時代早期の頃の河道である１号溝、集石12基などが確認されている。

竪穴住居・竪穴遺構については、時期別に古い早期、前期、中期前半の順に記述する事とする。

1　竪穴住居

【早期初頭】

６号竪穴住居（第11～16図、ＰＬ２・24）

85区Ａ－７・８、Ｂ－７・８グリッドに位置する。重複関係は７号竪穴住居と14号竪穴住居である。７号竪穴住居との新旧関係ははっきりとはしないが、14号竪穴住居は６号竪穴住居の床下から検出されており、14号竪穴住居が古いと判断される。住居の規模は掘り方でやっと確認できたが、東側を７号竪穴住居に壊されているために、楕円形に近い形と推定されるが、規模は不明である。遺構確認面からの深さは約10㎝前後と浅く、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は石囲い炉で、構築材として石を何個も用いられており、残存状態は良い。扁平な大小の礫が長軸約1.5ｍ、短軸約0.9ｍのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。石にはやや焼けた痕跡や煤の付着が認められた。床下からピットが２基確認された。土坑や周溝は確認出来なかった。

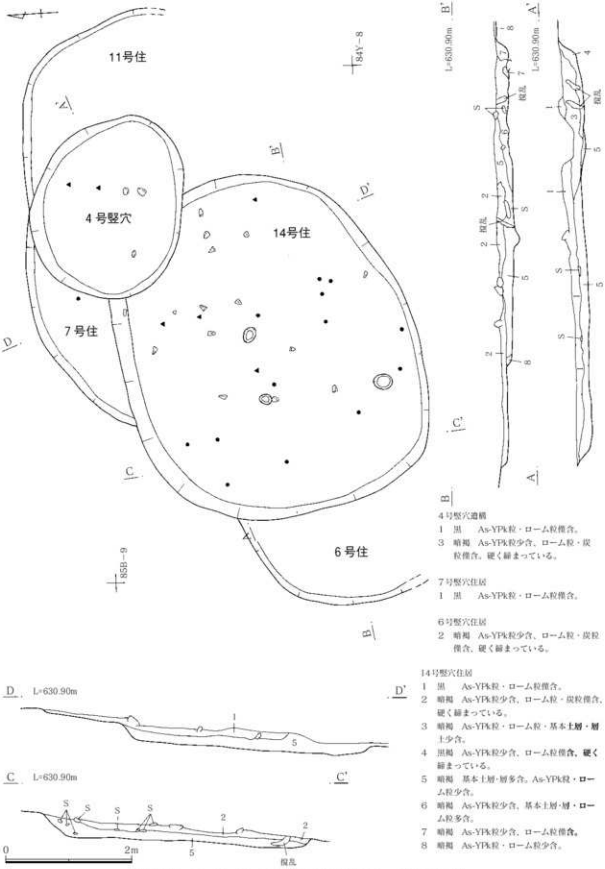
調査段階で６号・７号住居は明確に分離できなかったため、遺物は６・７号住居と表示している。土器は総数172点が出土しており、撚糸文系を主体に各類が認められる。そのうち、５・16は６号住居の炉内出土、２・８・27・28は７号住居の炉内出土である。石器は石鏃、スタンプ形石器、磨石が量的にもまとまって出土している。時期は、５類土器が出土していることから、稲荷台式期の新しい段階に比定しておきたい。

７号竪穴住居（第11～16図、ＰＬ２・24）

84区Ｙ－９、85区Ａ－８・９グリッドに位置する。重複関係は６号竪穴住居と11号竪穴住居と14号竪穴住居、それに４号竪穴遺構とである。新旧関係は、縄文時代前期の11号竪穴住居が最も新しく、次に４号竪穴遺構、７号竪穴住居で、７号竪穴住居の床下から検出された14号竪穴住居が最も古いと判断される。住居の規模は掘り方でやっと確認できたが、南側を14号竪穴住居と４号竪穴遺構に壊されているために、楕円形に近い形と推定されるが、規模は不明である。遺構確認面からの深さは約10㎝前後と浅く、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は石囲い炉で、ほぼ中心か、あるいはやや北側に位置する。扁平な大小の礫が長軸約1.2ｍ、短軸約0.7ｍのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。石にはやや焼けた痕跡や煤の付着が認められた。だが、新しい４号竪穴遺構に壊されているために、構築材の石の東側の残存状態はあまり良くない。床下土坑が５基検出されている。

14号竪穴住居（第11・12・17～20図、ＰＬ３・４・24・25）

84区Ｙ－７・８、85Ａ－７・８グリッドに位置する。重複関係は６号竪穴住居と７号竪穴住居と11号竪穴住居、それに４号竪穴遺構である。新旧関係は４号竪穴遺構が７号竪穴住居を壊していることから最も新しく、14号竪穴住居は６号竪穴住居と７号竪穴住居の床下から検出されており、14号竪穴住居が古いと判断される。住居の規模は掘り方



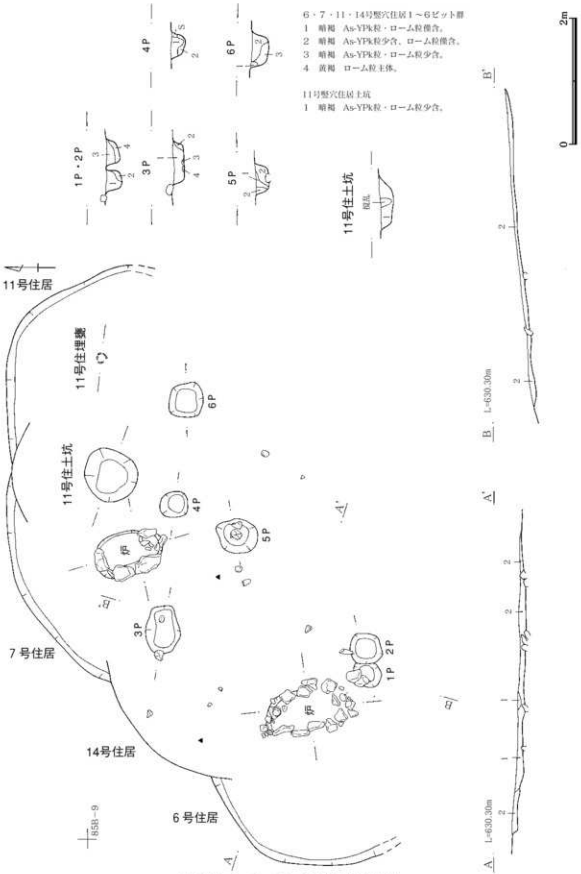
4号竪穴遺構
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
3　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。硬く締まっている。

7号竪穴住居
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。

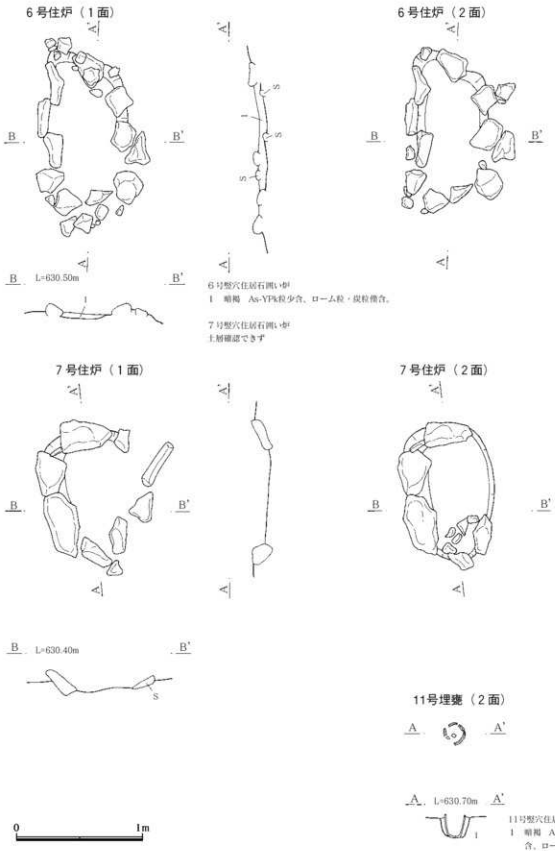
6号竪穴住居
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。硬く締まっている。

14号竪穴住居
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。硬く締まっている。
3　暗褐　As-YPk粒・ローム粒・基本上層・層上少含。
4　黒褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。硬く締まっている。
5　暗褐　基本上層・層多含。As-YPk粒・ローム粒少含。
6　暗褐　As-YPk粒少含、基本上層・層・ローム粒多含。
7　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。
8　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。

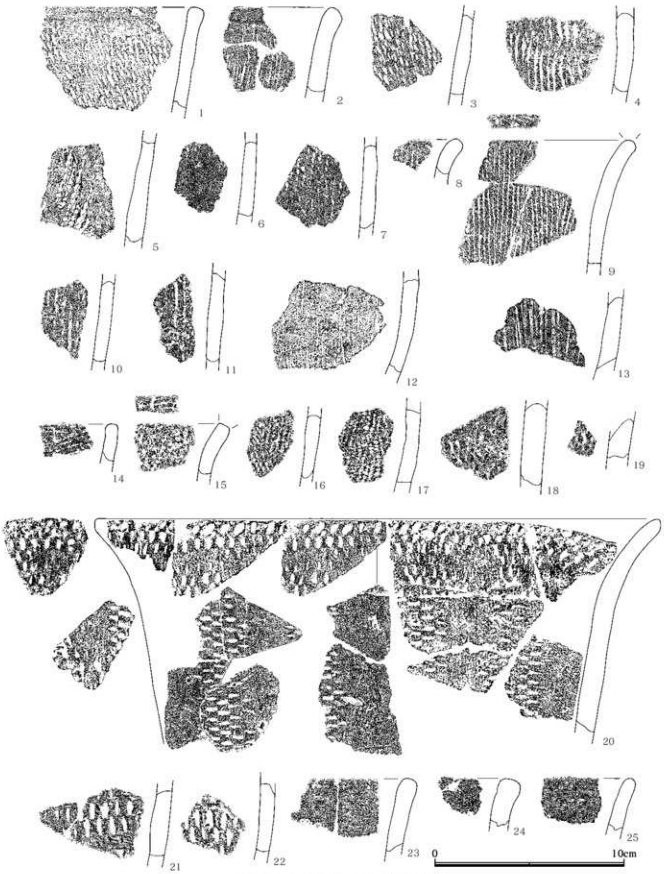
第11図　6・7・11・14号竪穴住居遺構（1）、4号竪穴遺構



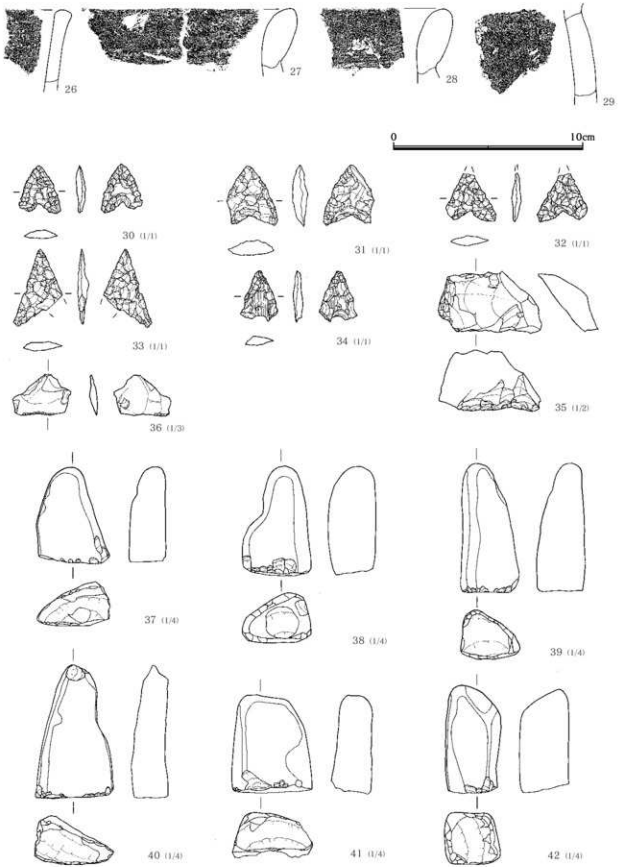
第12図　6・7・11・14号竪穴住居（2）



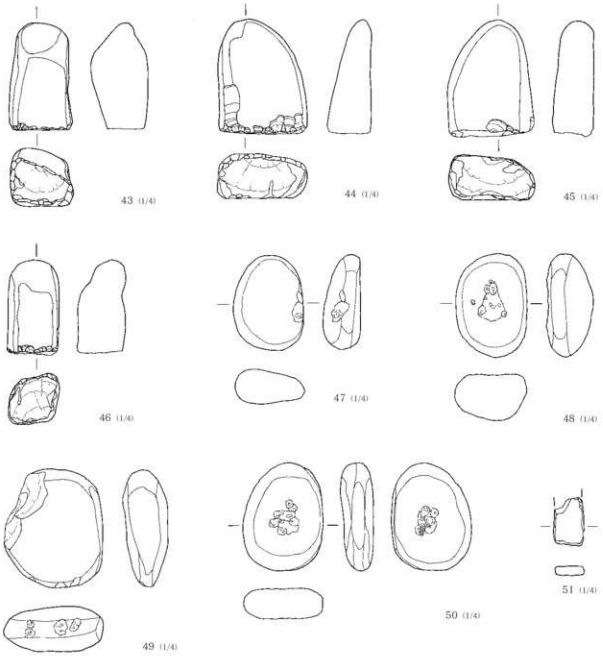
第13図　6・7号竪穴住居炉、11号竪穴住居埋甕



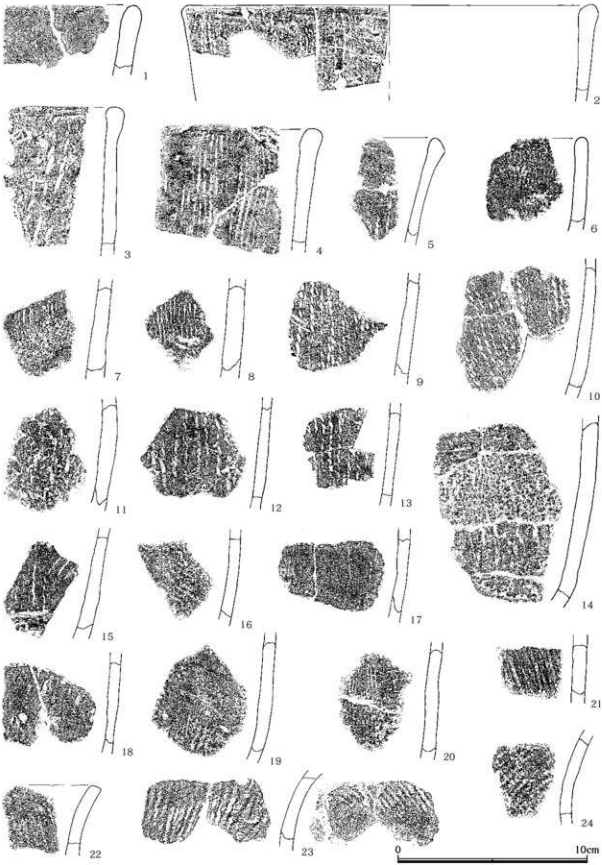
第14図　6・7号竪穴住居遺物（1）



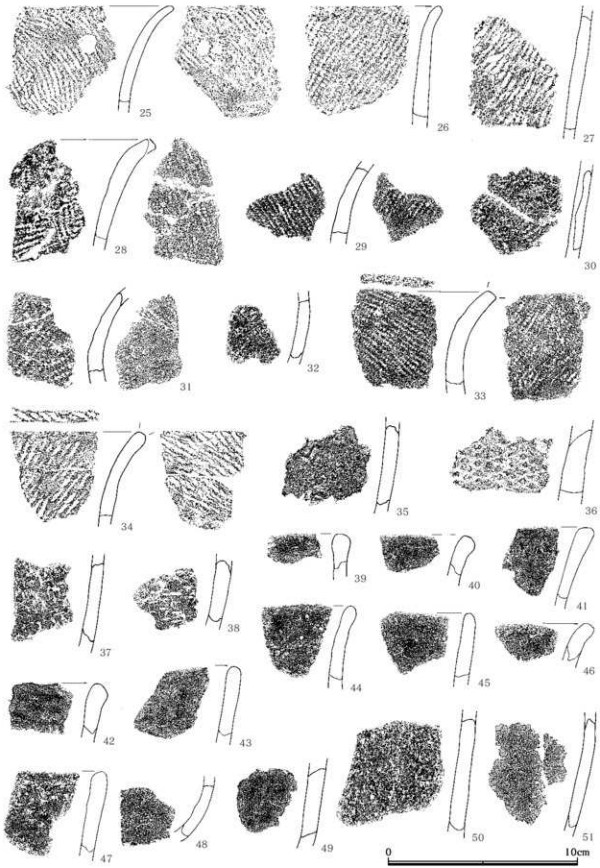
第15図　６・７号竪穴住居遺物（２）



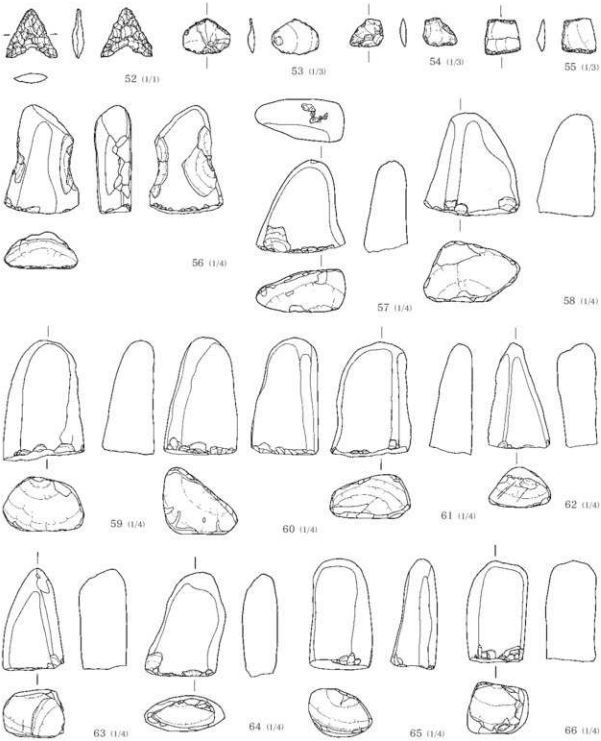
第16図　6・7号竪穴住居遺物（3）



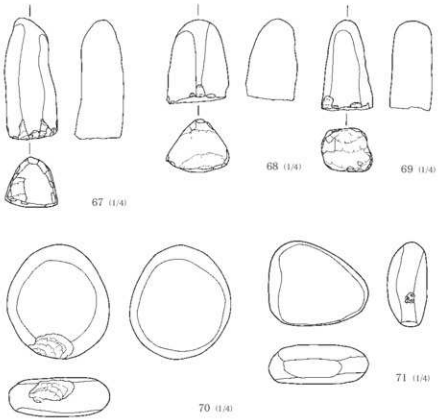
第17図　14号竪穴住居遺物（1）



第18図　14号竪穴住居遺物（2）



第19図　14号竪穴住居遺物（3）



第20図　14号竪穴住居遺物（4）

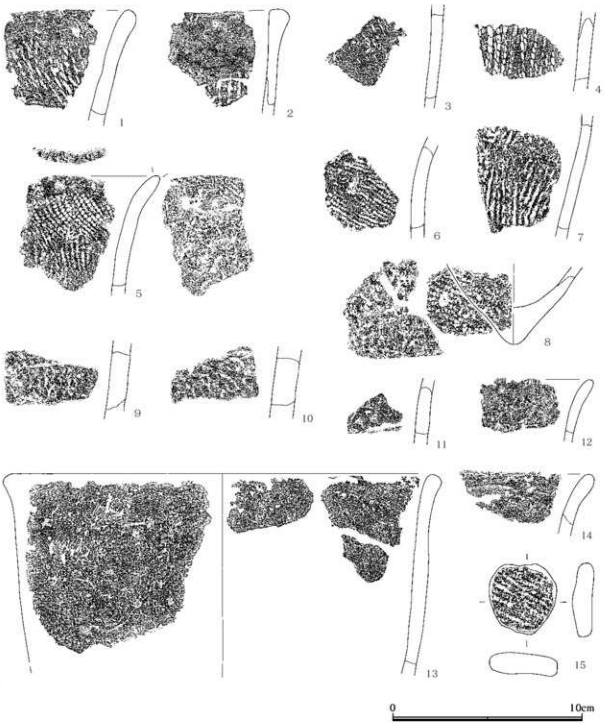
でやっと確認できたが、東隅の一部を４号竪穴遺構に壊されている。規模は長軸約5.4m、短軸約4.8mのやや楕円気味な形状である。面積は約20.4㎡である。遺構確認面からの深さは約10cm前後と浅く、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は不明であるが、ピットが２基確認された。土坑や周溝は確認出来なかった。

遺物は、土器が総計207点、石器はスタンプ形石器49点の他に磨石、石鏃などが出土している。なお、土器２は55号住居及び１号溝出土土器との接合資料である。時期は稲荷台式期に比定される。

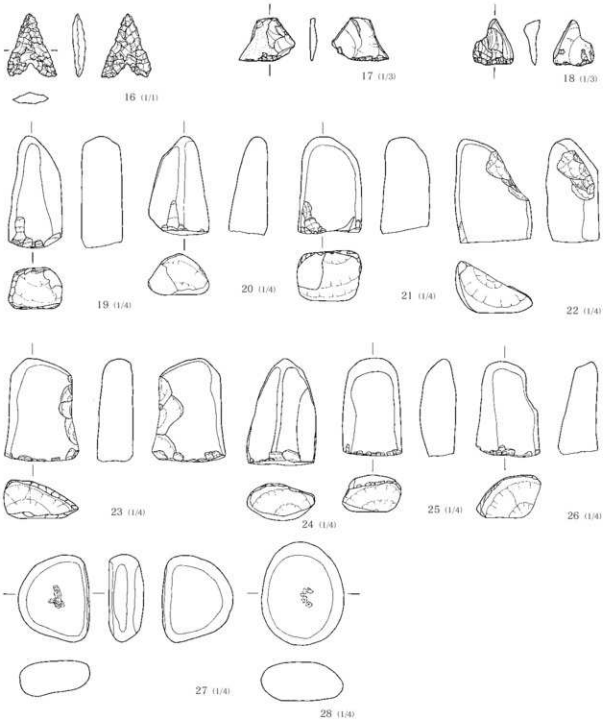
４号竪穴遺構（第11・21・22図、ＰＬ３・４・25）

84区Ｙ－８・９グリッドに位置する。重複関係は６号竪穴住居、７号竪穴住居、11号竪穴住居、14号竪穴住居である。新旧関係は縄文時代前期の11号竪穴住居が最も新しく、次が４号竪穴遺構で、７号竪穴住居、14号竪穴住居の順である。規模は、長軸約2.8m、短軸約2.6mの僅かに楕円形気味で、深さは25cmで床面はほぼ平らである。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

出土遺物の内容は、他の小型の住居とほとんど変わらない種類と数量が認められた。土器は総数158点、石器は石鏃、スタンプ形石器、くぼみ石などが出土している。なお、２類の縄文系土器を使用した土製円盤（15）が１点出土しており、注目される。時期は稲荷台式期に比定される。



第21図　４号竪穴遺物（１）



第22図　4号竪穴遺物（2）

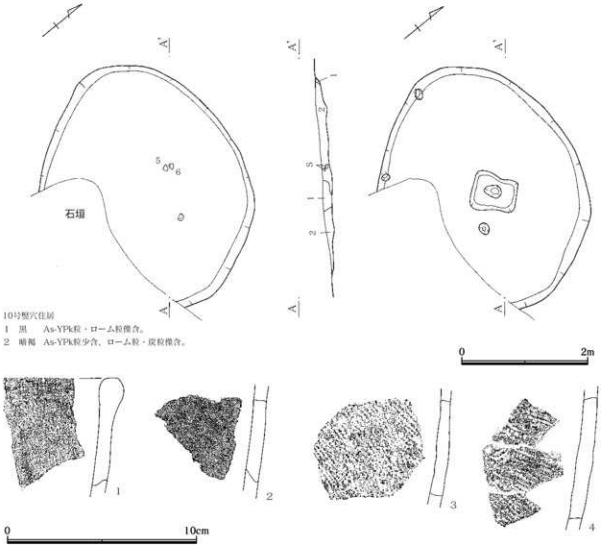
10号竪穴住居（第23・24図、ＰＬ２・25）

84区Ｘ－３・４、Ｙ－３・４グリッドに位置する。重複関係は近世の２号石垣に南側の壁の一部を壊されている。炉の残存状態は極めて悪く、調査段階では僅かに焼土が確認されたのみである。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

この時期では最も南側で確認された単独の住居であるが、出土遺物は少い。土器８点の他にスタンプ形石器や磨石などがある。時期は稲荷台式期に比定される。

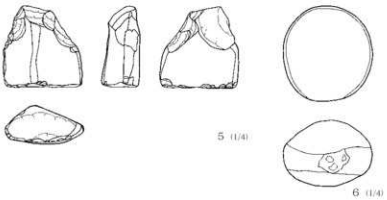
12号竪穴住居（第25～27図、ＰＬ２・３・26）

84区Ｖ－８・９、Ｗ－８グリッドに位置する。残存状態は悪く、北壁とその周辺だけであり、重複関係は18号竪穴住居であるが、新旧関係は不明である。住居の規模は南側がほとんど削り取られていることから不明瞭だが、おそらくは長軸約５ｍのやや楕円気味な形状であろう。遺構確認面からの深さは

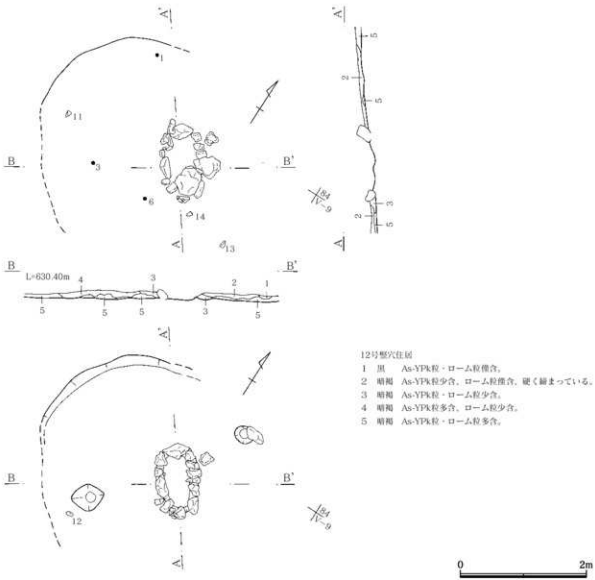


10号竪穴住居
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。

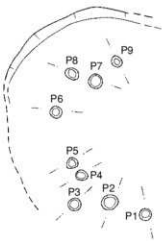
第23図　10号竪穴住居遺構・遺物（１）

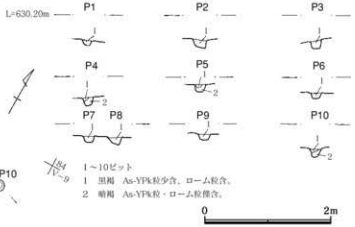


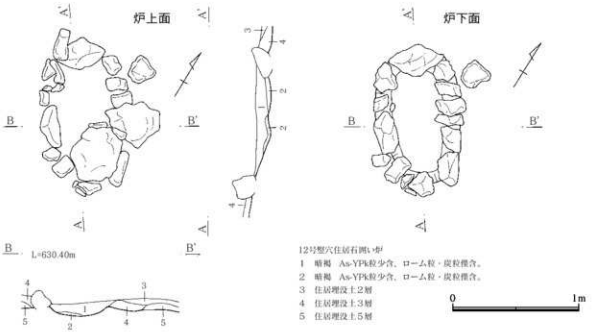
第24図　10号竪穴住居遺物（2）

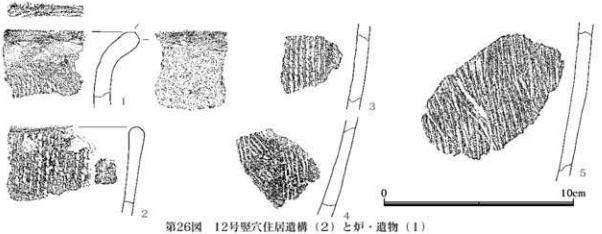


第25図　12号竪穴住居遺構（1）

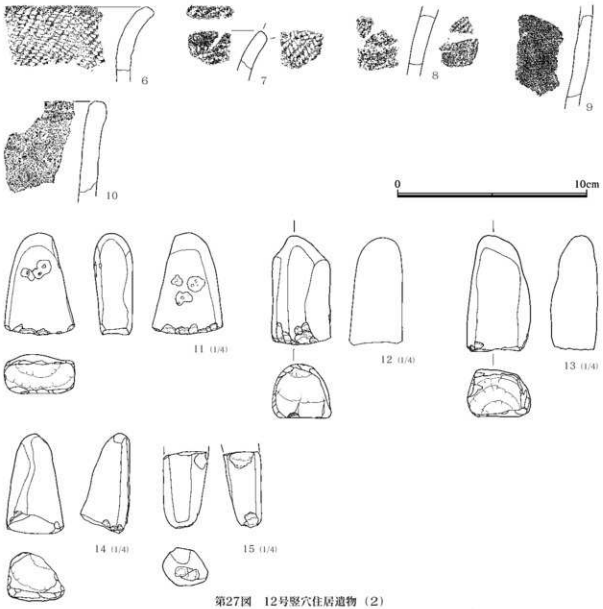








第26図　12号竪穴住居遺構（2）と炉・遺物（1）



第27図　12号竪穴住居遺物（2）

北側で約10cmと浅く、北壁のみが緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は石囲い炉で、ほぼ中心に位置すると推定される。残存状態は非常に良く、扁平な大小の礫が長軸約1.2m、短軸約0.9mのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。石にはやや焼けた痕跡や煤の付着が認められ、石囲い炉の中の土にも若干の焼土が認められた。床下ピットが２基検出されており、掘り方では柱穴とも考えられるピットが９基も検出されているが、周溝は確認出来なかった。

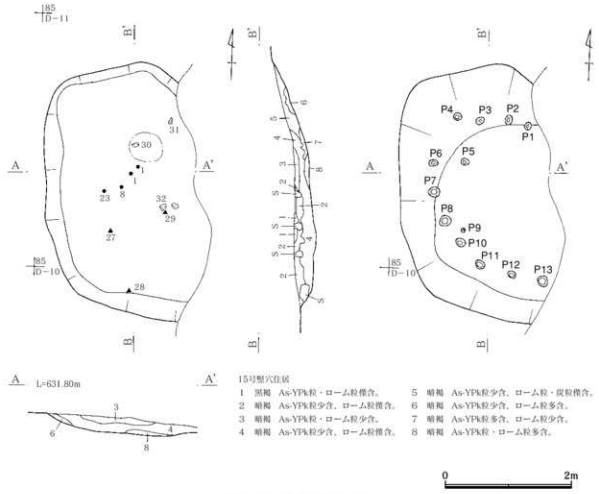
なお、この石囲い炉については、残りの良さから、新聞報道などで写真が掲載されるとともに、当事業団の保存処理室の関技師による切り取り保存を実施した。現在は、吾妻郡長野原町字林の八ッ場ダム調査事務所の１階展示室で常設展示しており、一般開放している。また、本報告書の巻頭カラー図版の２・３でも紹介している。

遺物は、土器が総数22点と少ないが、石器はスタンプ形石器16点のほかに、敲石などが出土している。時期は稲荷台式期に比定される。

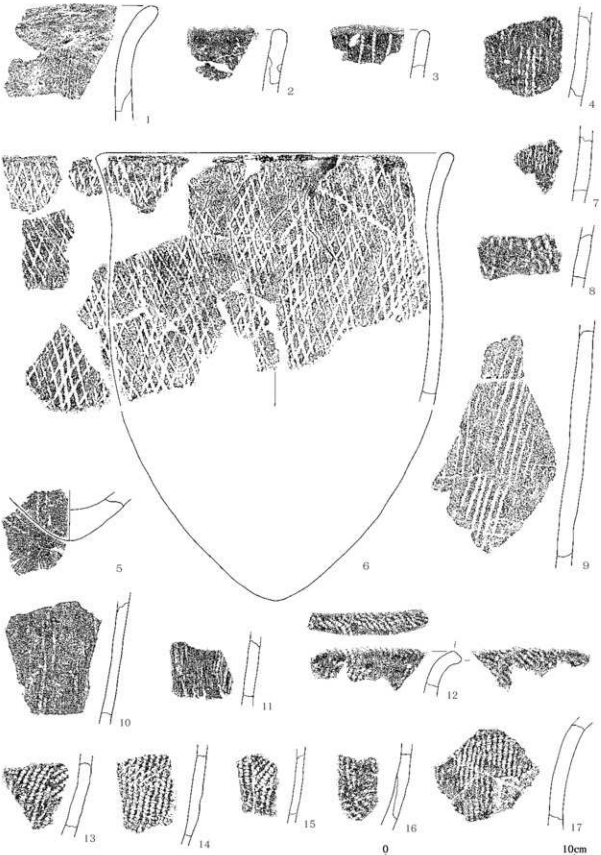
15号竪穴住居（第28～30図、ＰＬ４・26）

85区Ｃ－９・10グリッドに位置する。重複関係は東側の半分弱を1号溝に壊されていることから、１号溝よりも古い。住居の規模は長軸約4.2ｍで、短軸は約2.7ｍ以上で、やや楕円形に近い。遺構確認面からの深さはほぼ中央で約30㎝と深いが、壁は緩やかな擂鉢状に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅴ層から第Ⅳ層を中心としている。炉は、地床炉で残存状態が良く、中心からやや北側に位置する。掘り方で壁に沿ってほぼ環状に浅いピットが12基も検出されており、柱穴と推定される。土坑や周溝は確認出来なかった。

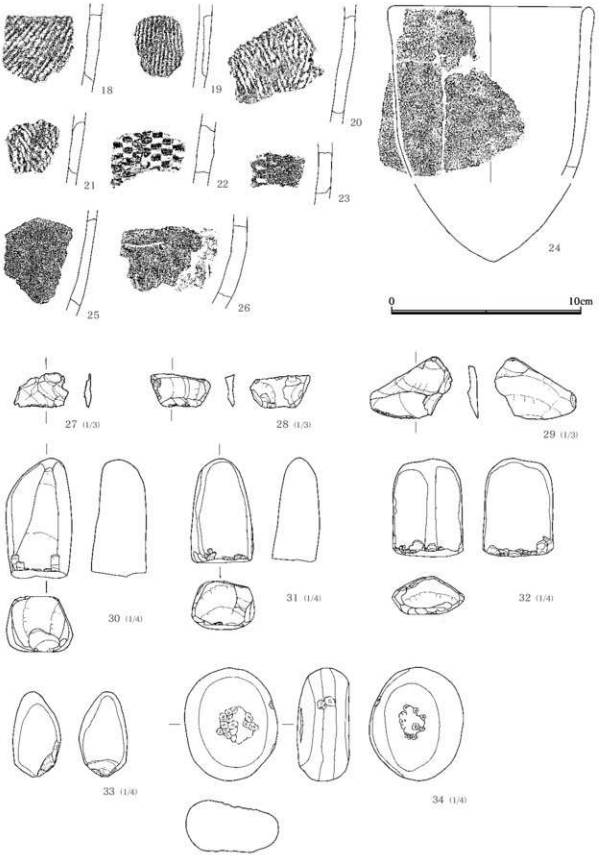
土器は総数97点が出土しており、撚糸文系、縄文系、無文系が量的に拮抗し、これに押型文が若干加わる。器形を復元した格子目撚糸文施文の６は、大半が本住居を切る１号溝からの出土であるが、一部が本住居から出土していることから、本住居の遺物と判断した。石器はスタンプ形石器11点、磨石



第28図　15号竪穴住居遺構



第29図　15号竪穴住居遺物（1）



第30図　15号竪穴住居遺物（2）

１点、くぼみ石１点、敲石１点の他に、削器類等が出土している。時期は福荷台式期に比定される。

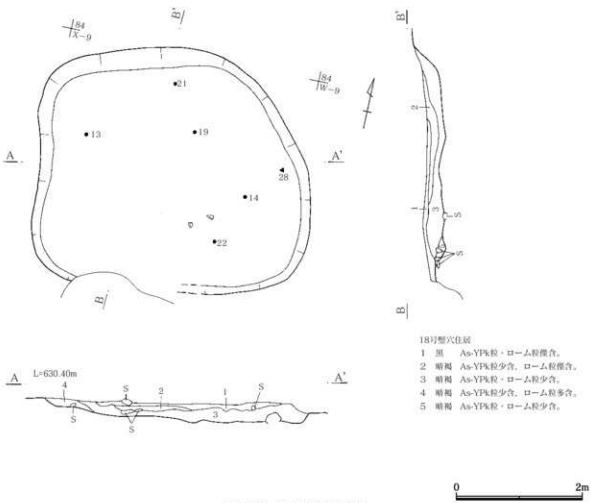
18号竪穴住居（第31～33図、ＰＬ４・26）

84区Ｖ－８、Ｗ－８グリッドに位置する。重複関係は平安時代の５号竪穴住居よりも古いが、12号竪穴住居との関係は不明である。住居の規模は長軸約4.4ｍ、短軸約3.9ｍのやや隅丸長方形気味で、面積は約16.2㎡である。遺構確認面からの深さは約15～30㎝で、壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できず、土坑やピットや周溝は確認出来なかった。土器は撚糸文系、無文系を主体に総数105点が出土しており、石器はスタンプ形石器９点の他に石鏃、敲石等が出土している。時期は福荷台式期に比定される。

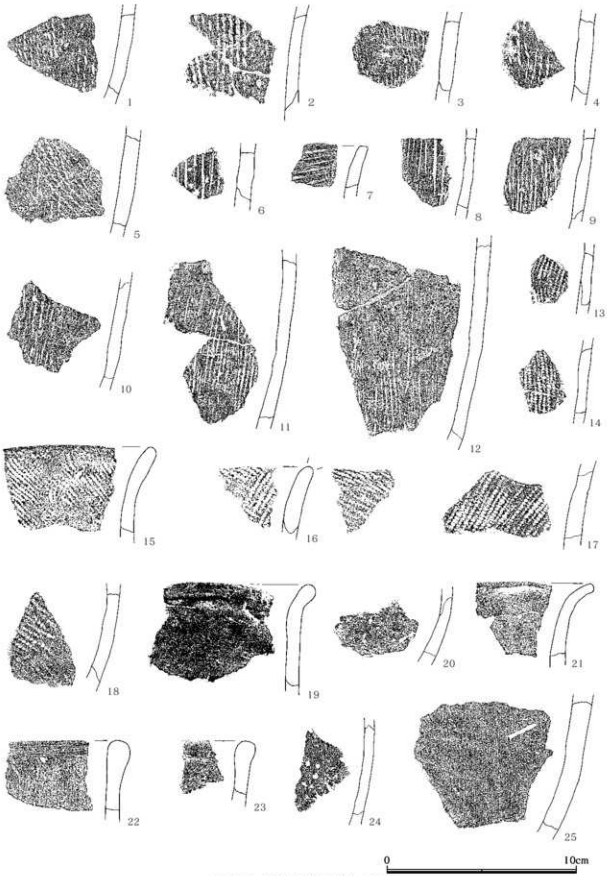
32号竪穴住居（第34～36図、ＰＬ４・５・26・27）

85区Ｂ－11グリッドに位置する。重複関係は無い。傾斜地に立地することから、西壁から南壁の残存状態が悪く、住居の規模は不明であるが、炉の存在からおそらくは楕円形で、規模も約５ｍ前後の直径があったと推定される。遺構確認面からの深さは約30㎝で、壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅴ層から第Ⅳ層を中心としている。石囲い炉はほぼ中心に位置するが、南側の残りが悪い。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

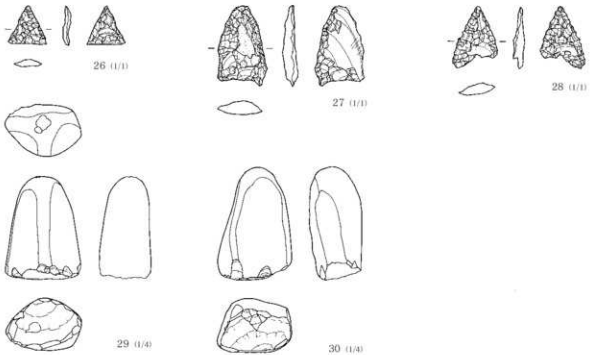
土器は撚糸文系を主体に総数67点が出土してお



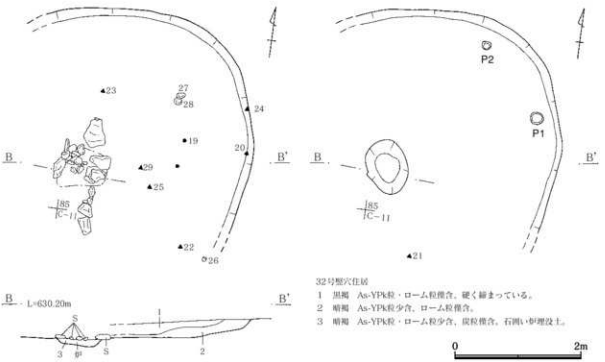
第31図　18号竪穴住居遺構



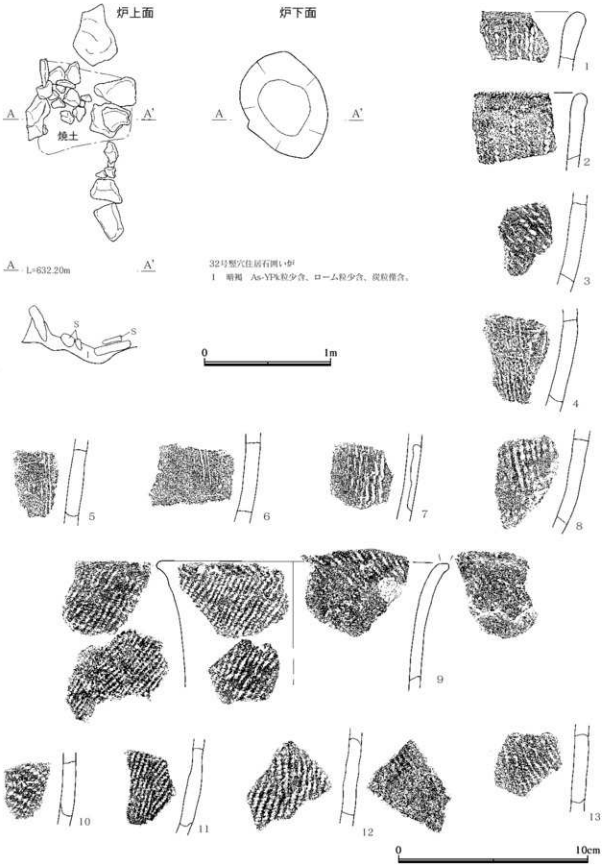
第32図　18号竪穴住居遺物（1）



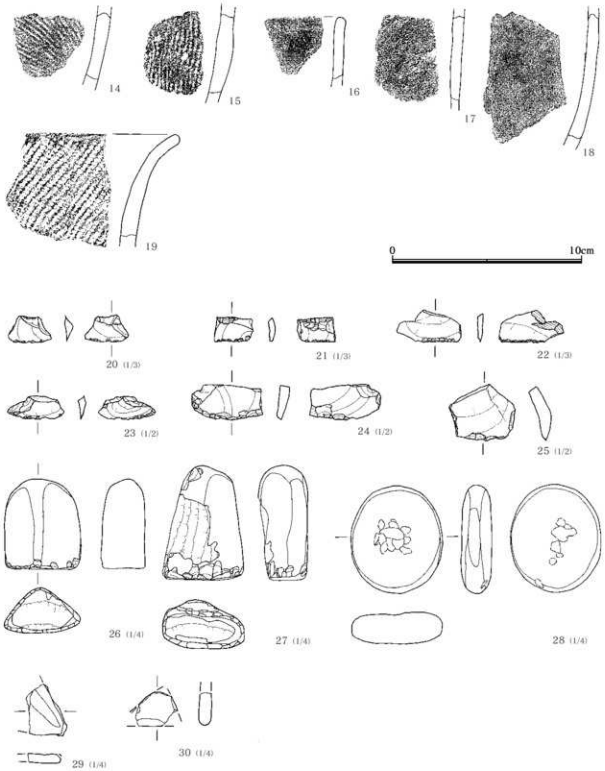
第33図　18号竪穴住居遺物（2）



第34図　32号竪穴住居遺構



第35図　32号竪穴住居遺構炉・遺物（1）



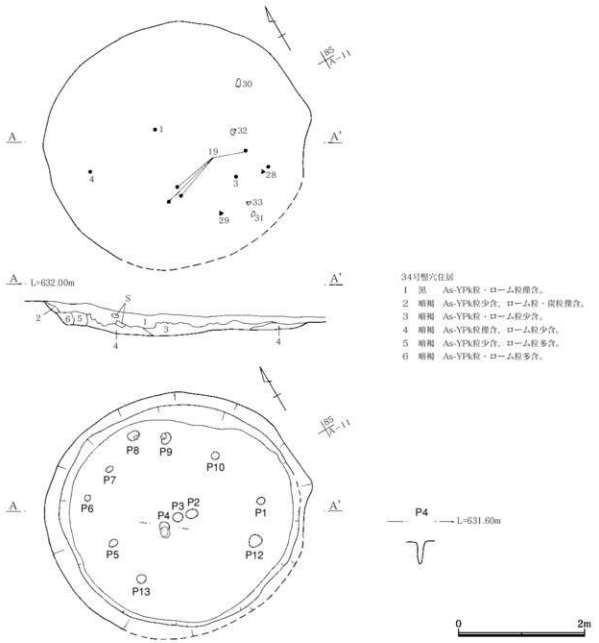
第36図　32号竪穴住居遺物（2）

り、石器はスタンプ形石器８点、くぼみ石１点、砥石２点のほかに削器が数多く出土している。時期は稲荷台式期に比定される。

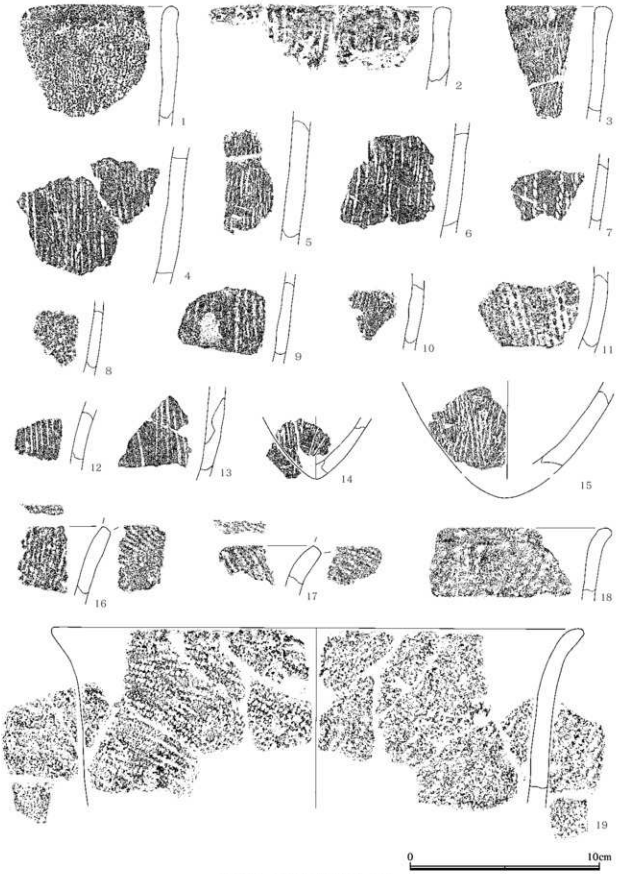
34号竪穴住居（第37～39図、ＰＬ５・27）

85区Ａ－10・11、Ｂ－10・11グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は南壁がはっきりしないが長軸約4.2m、短軸約3.9mと僅かに楕円形気味で、面積は約9.0㎡である。遺構確認面からの深さは約15～30㎝で、緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉の痕跡は無く、壁に沿って９基のピットとほぼ中央に３基のピットが確認されているが、土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

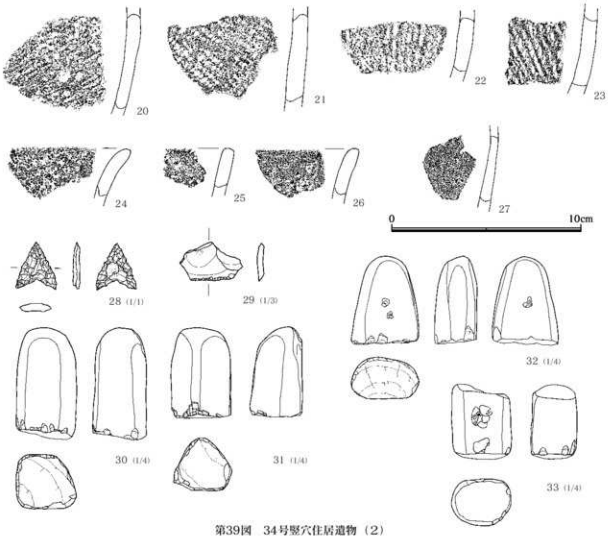
土器は撚糸文系を主体に総数128点が出土しており、石器はスタンプ形石器12点、砥石２点の他に、石鏃、削器などが出土している。時期は稲荷台式期に比定される。



第37図　34号竪穴住居遺構



第38図　34号竪穴住居遺物（1）

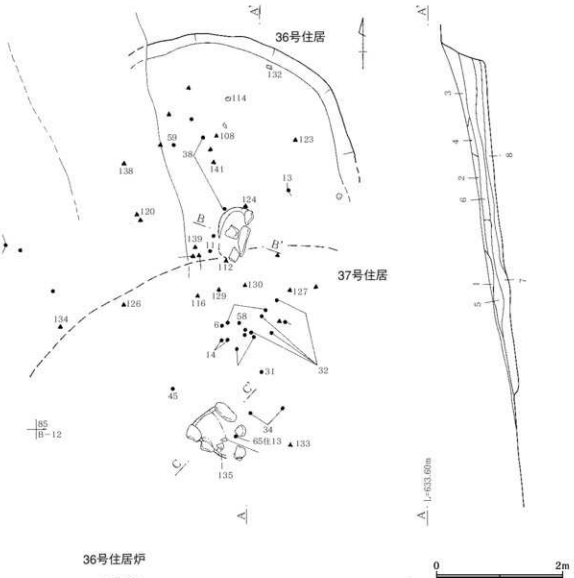


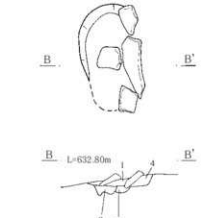
第39図　34号竪穴住居遺物（2）

36号竪穴住居（第40～50図、ＰＬ５・27～29）

84区Ｙ－13、85区Ａ－13グリッドに位置する。重複関係は37号竪穴住居と１号溝とであり、新旧関係では、１号溝に壊されているが、37号竪穴住居とは不明である。北側の壁付近がしっかりと残存しているだけなので、住居の規模ははっきりしないが、石囲い炉がほぼ中央に位置すると仮定すると、半径約６ｍの規模と推定される。遺構確認面からの深さは約20～60㎝で、壁は急角度に立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅴ層から第Ⅳ層を中心としている。石囲い炉は数が少ないものの扁平な大小の礫が長軸約0.85ｍ、短軸約0.5ｍのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

調査段階で37号住居と明確に分離できなかったため、遺物は36・37号住居と表示している。遺物量は土器・石器共に本遺跡の住居で最も多く出土している。土器は５類を除く総数514点出土しており、各類の出土割合は他の住居と共通している。そのうち、30と103は37号住居炉出土、帯状施文の撚糸文土器17は８号住居出土土器との接合資料である。なお、１類ｄの土器を利用した土製円盤（101）が１点出土している。石器はスタンプ形石器77点、





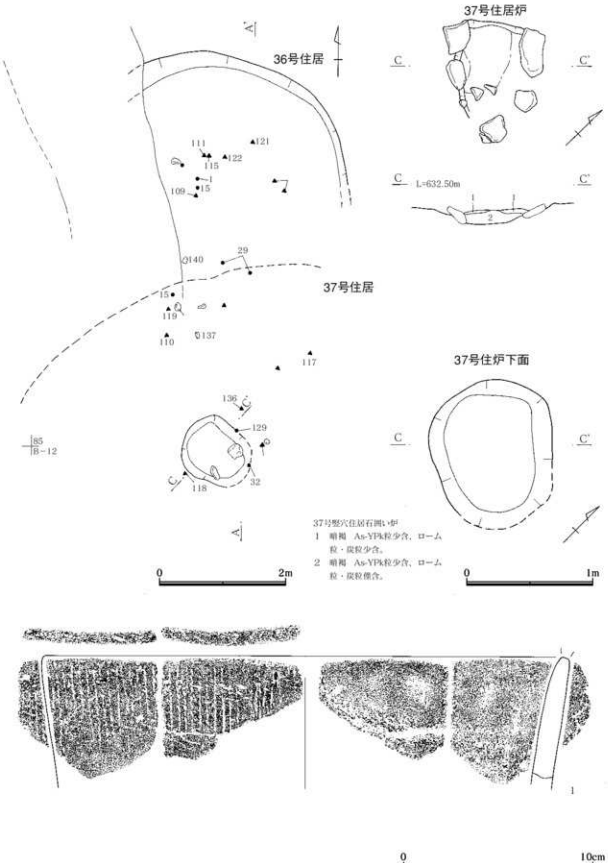
36・37号竪穴住居

1　黒褐　As-YPk粒含む、焼土粒・炭化物粒少含。
2　褐　As-YPk粒・ローム粒含む。
3　黒褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。
4　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
5　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
6　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。
7　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
8　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。

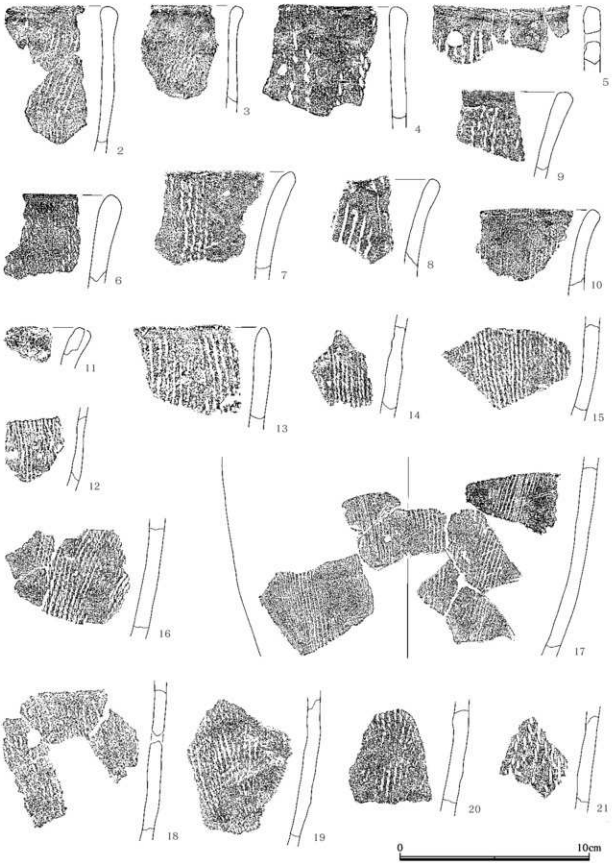
36号竪穴住居石囲い炉

1　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。
3　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。
4　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。

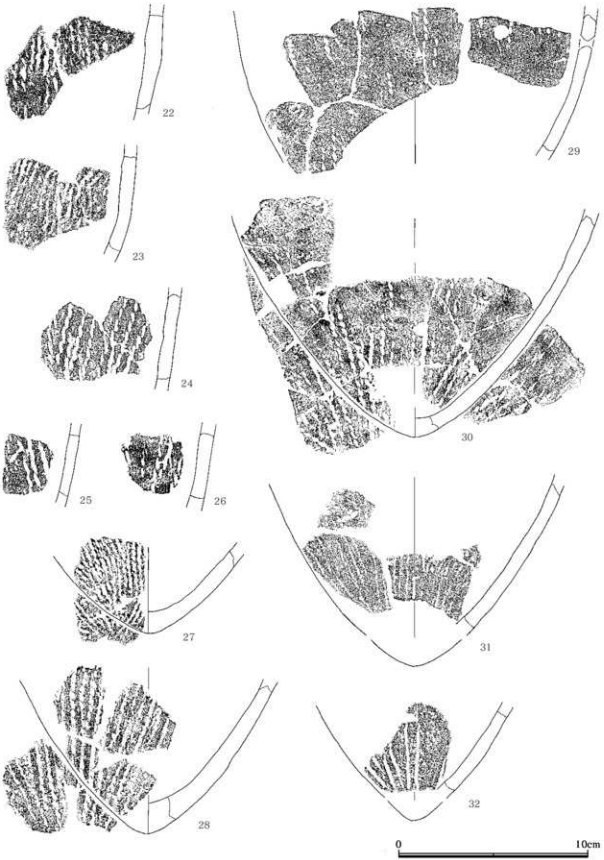
第40図　36・37号竪穴住居遺構（1）



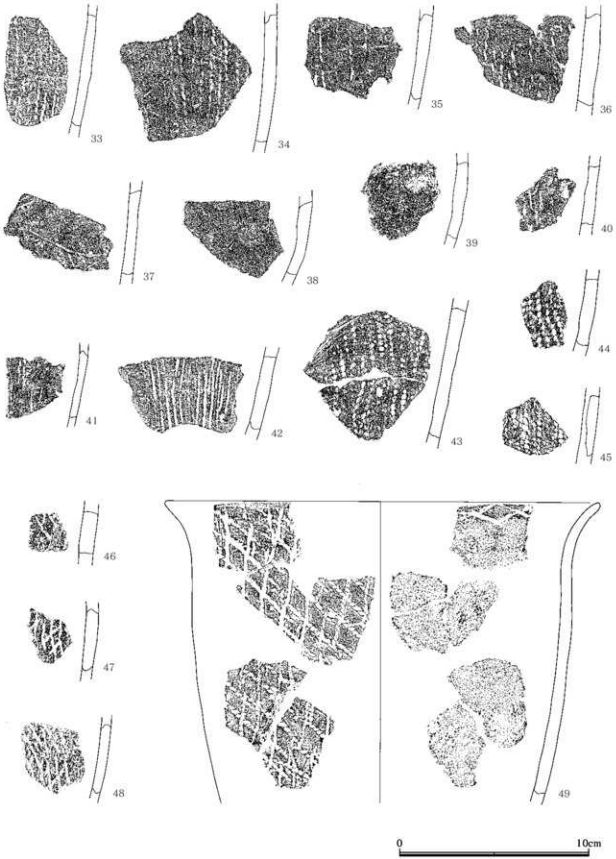
第41図　36・37号竪穴住居遺構（2）・遺物（1）



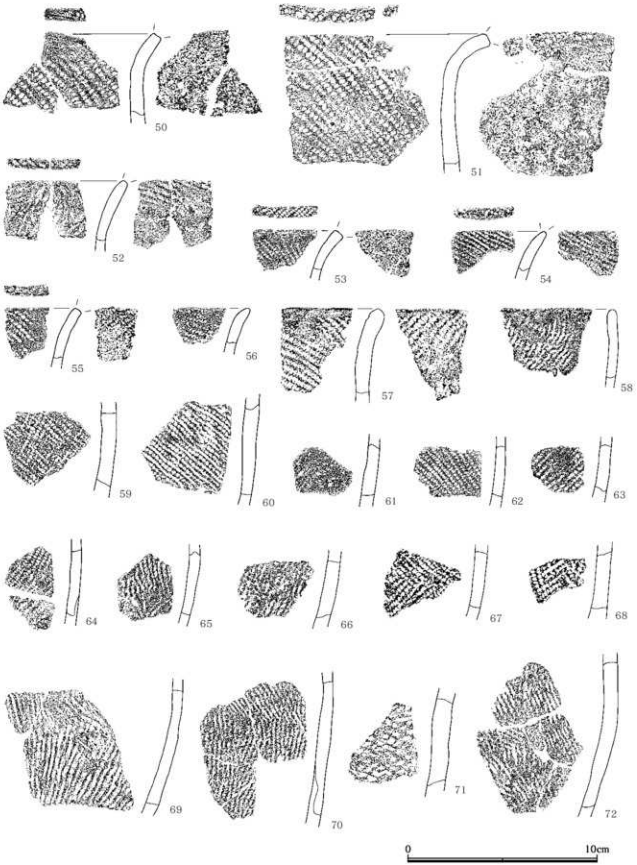
第42図　36・37号竪穴住居遺物（2）



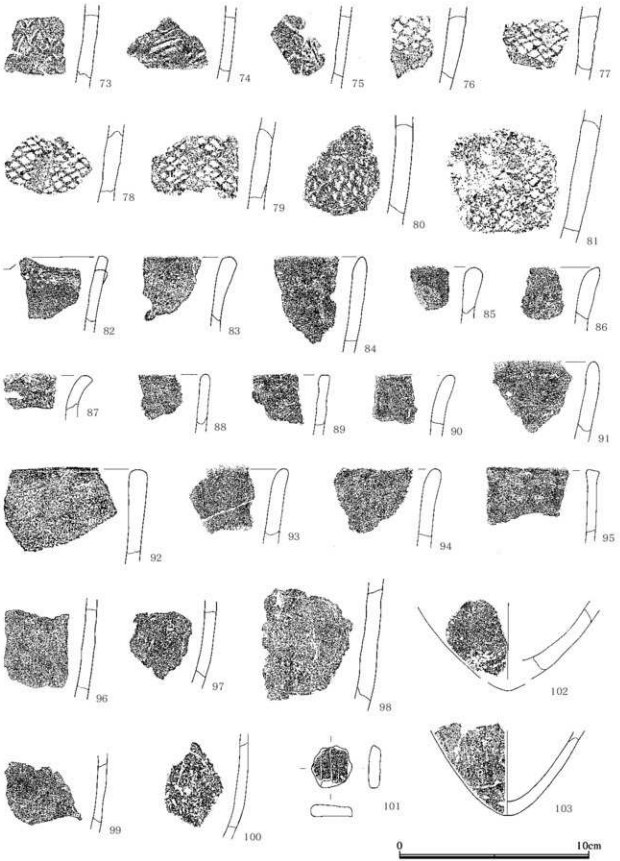
第43図　36・37号竪穴住居遺物（3）



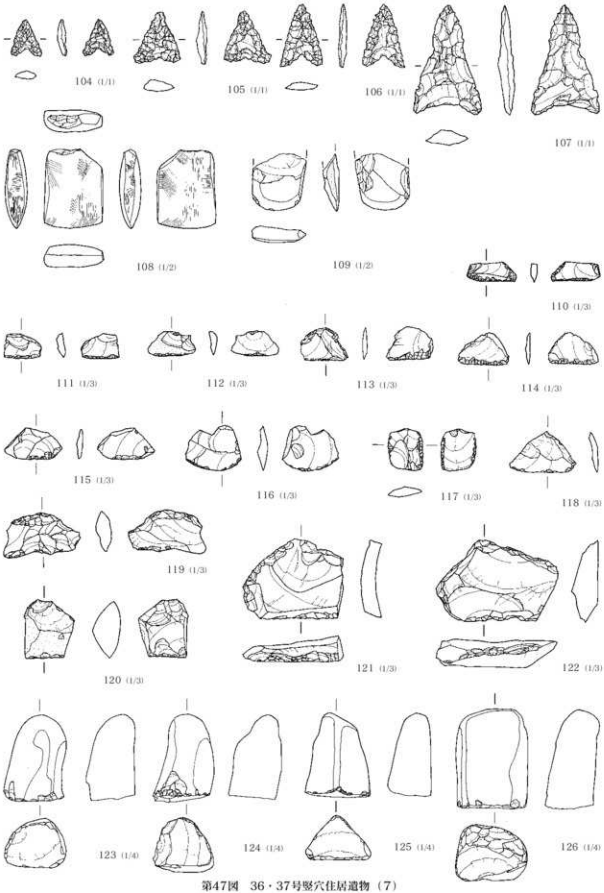
第44図　36・37号竪穴住居遺物（4）



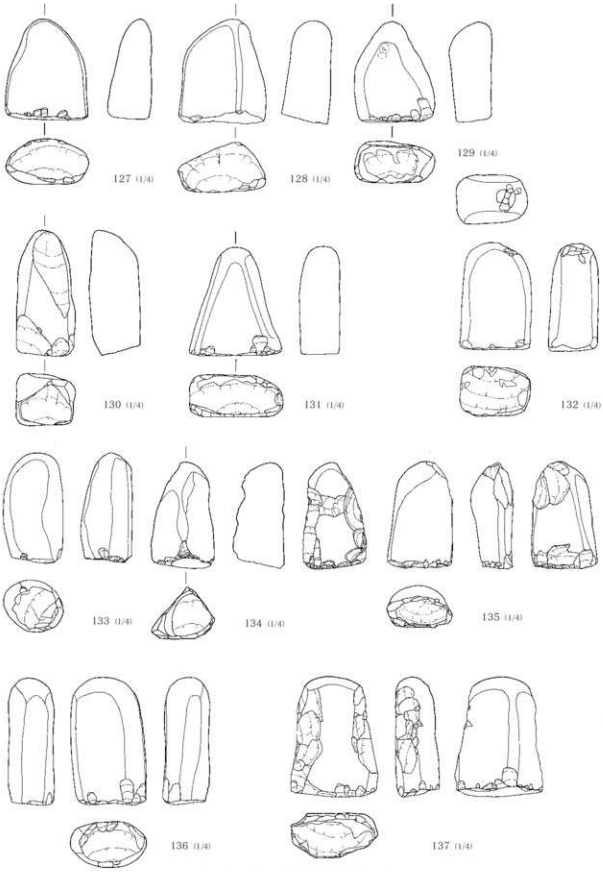
第45図　36・37号竪穴住居遺物（5）



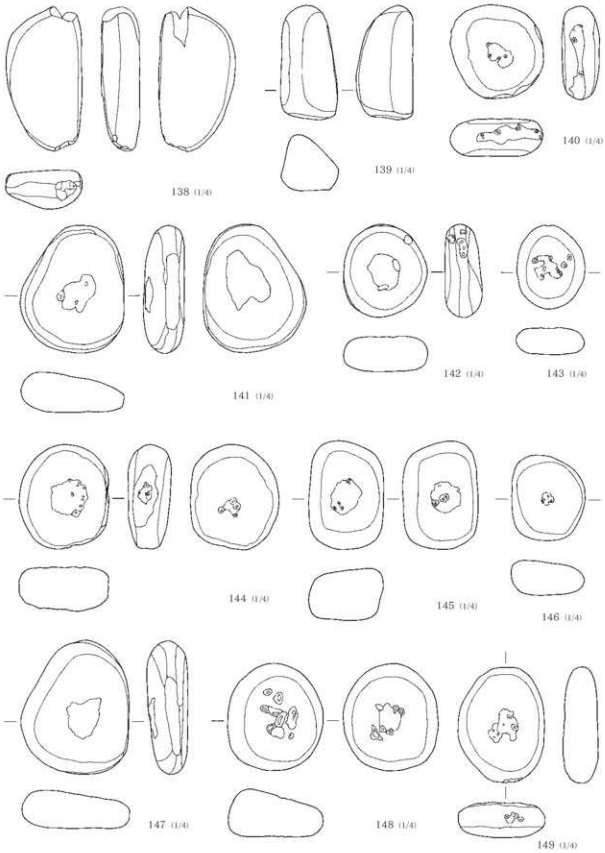
第46図　36・37号竪穴住居遺物（6）



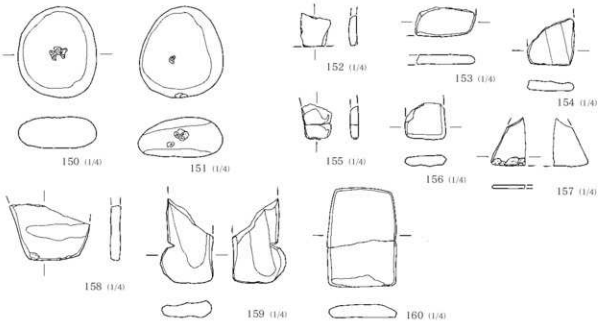
第47図　36・37号竪穴住居遺物（7）



第48図　36・37号竪穴住居遺物（8）



第49図　36・37号竪穴住居遺物（9）



第50図　36・37号竪穴住居遺物（10）

磨石１点、くぼみ石17点、敲石２点、砥石10点の他に、磨製石斧、石鏃、削器が数多く出土しており、本遺跡の特徴的な石器が出揃っている。時期は稲荷台式期に比定される。

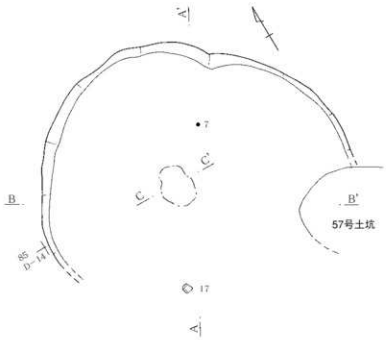
37号竪穴住居（第40～50図、ＰＬ５・６・27～29）

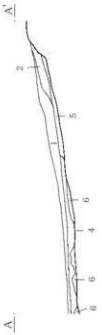
85区Ａ－12グリッドに位置する。重複関係は36号竪穴住居と１号溝、新旧関係では、１号溝に壊されているが、36号竪穴住居とは不明である。壁の痕跡が掘り方で僅かに確認できるだけで、住居の規模は不明である。遺構確認面からの深さは約10㎝以下である。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。石囲い炉は数が少ないものの扁平な大小の礫が長軸約0.9ｍ、短軸約0.75ｍのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。下位には長軸約1.2ｍ、短軸約1.0ｍ、深さ約10㎝のほぼ円形の掘り込みが検出された。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。撚糸文土器と石器などが出土している。

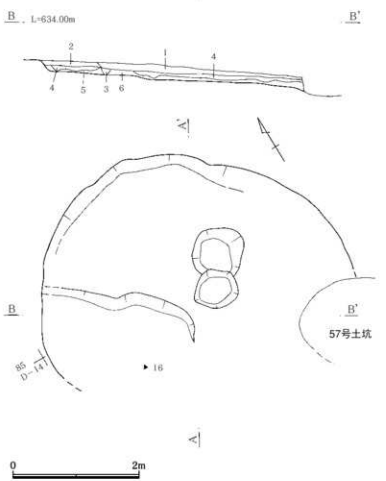
38号竪穴住居（第51・52図、ＰＬ６・29）

85区Ｂ－13・14、Ｃ－13・14グリッドに位置する。重複関係は平安時代の隘し穴である57号土坑が新しく、東壁の一部を壊している。南壁の残りが悪く、新旧関係が不明である。住居の規模は長軸約5.2ｍ、短軸約4.8ｍのやや楕円形である。面積は推定で約19.6㎡である。遺構確認面からの深さは約10～15㎝で、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は、ほぼ中心に焼土が確認されたことから、地床炉と推定され、規模は長軸約0.7ｍ、短軸約0.5ｍ、深さ約10㎝のほぼ楕円形の掘り込みが検出された。残存状態が悪く柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。

土器は撚糸文系を主体に総数47点が出土しており、石器はスタンプ形石器６点の他に敲石、削器などが出土している。時期は稲荷台式期に比定される。





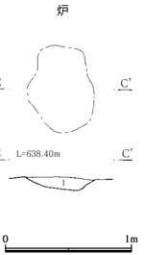


38号竪穴住居

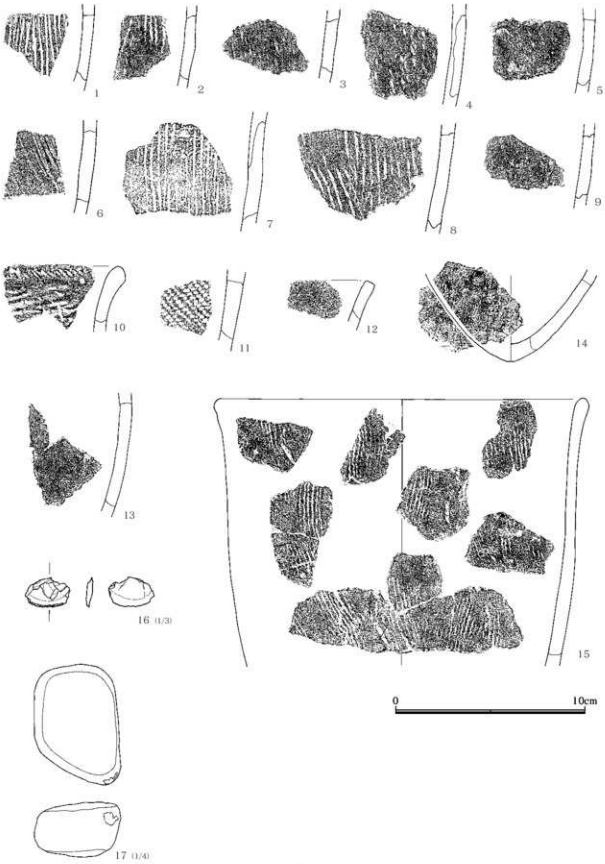
1　黒褐　As-YPk粒含む、焼土粒・炭化物粒少含。
2　褐　As-YPk粒・ローム粒含む。
3　黒褐　As-YPk粒少含、ローム粒僅含。
4　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
5　暗褐　As-YPk粒僅含、ローム粒少含。
6　暗褐　As-YPk粒・ローム粒多含。

38号竪穴住居炉

1　暗褐　As-YPk粒・焼土粒少含、ローム粒・炭粒僅含。



第51図　38号竪穴住居遺構



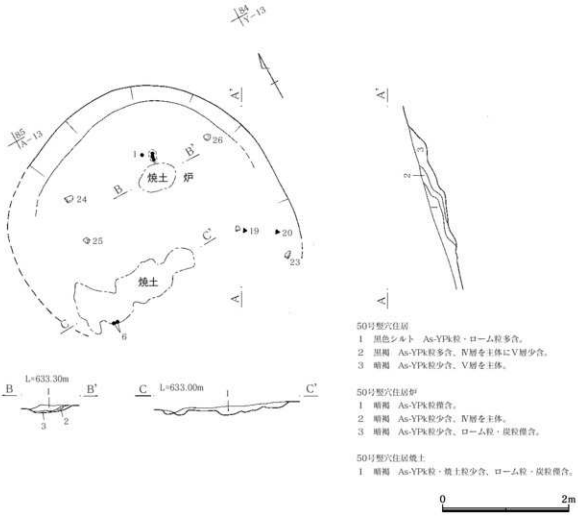
第52図　38号竪穴住居遺物

39号竪穴住居（第88図、ＰＬ11）

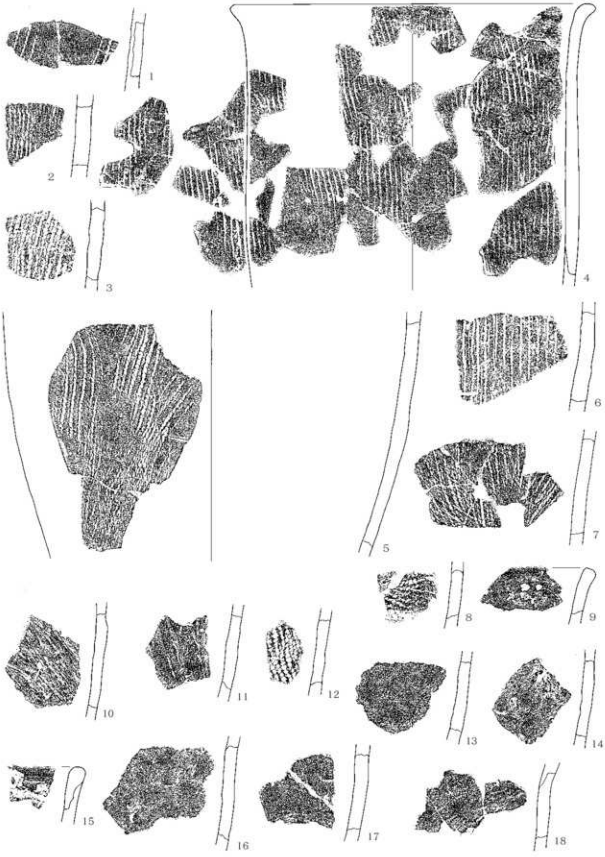
85区Ａ－12、Ｂ－12グリッドに位置する。住居の規模ははっきりしないが、炉はおそらくは１号石囲い炉が相当すると考えられる。

50号竪穴住居（第53～55図、ＰＬ６・29）

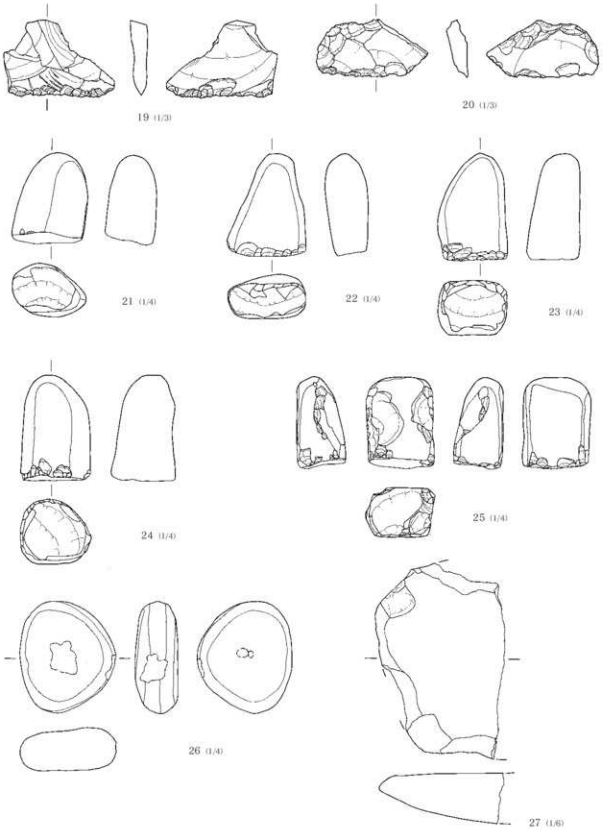
84区Ｘ－12・Ｙ－12グリッドに位置する。重複関係は無い。北東部分の壁が残存するだけで、他は残りが悪い。住居の規模は長軸約4.8ｍ、短軸約4.2ｍのやや楕円形と推定される。遺構確認面からの深さは約10㎝で、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は、やや北寄りの部分に長軸約0.6ｍ、短軸約0.4ｍ、深さ約10㎝の楕円形で検出された。また、南側半分は薄く焼土が広がるだけで残存状態もあまり良くない。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。



第53図　50号竪穴住居遺構



第54図　50号竪穴住居遺物（1）



第55図　50号竪穴住居遺物（2）

土器は無文系を中心に総数68点が出土しており、そのうち撚糸文系土器４は53号住居出土土器との接合資料である。石器はスタンプ形石器９点をはじめ、磨石、台石、削器などが出土している。時期は稲荷台式期に比定される。

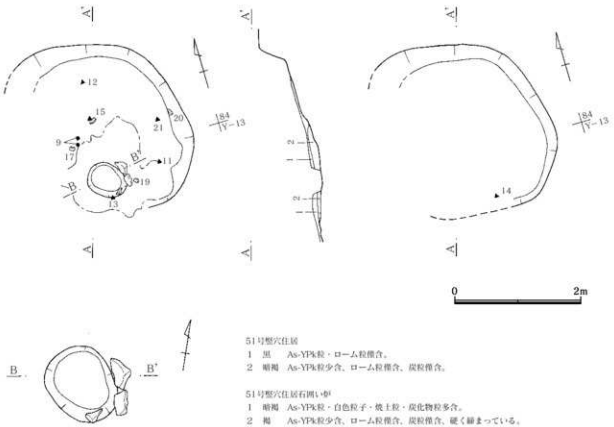
51号竪穴住居（第56・57図、ＰＬ６・７・22・30）

84区Ｙ－13グリッドに位置する。重複関係は無い。東壁を中心に東側の残存状態は良いものの、西側は不明瞭である。住居の規模は推定で長軸約3.0ｍ、短軸約2.9ｍのやや楕円形気味である。面積は約4.6㎡である。遺構確認面からの深さは北壁で約60㎝で、壁はやや直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は石囲い炉で、数が３点と少ないものの扁平な礫が南側に残り、長軸約0.6ｍ、短軸約0.5ｍ、深さ約10㎝のやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。周囲には薄く焼土が分布している。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

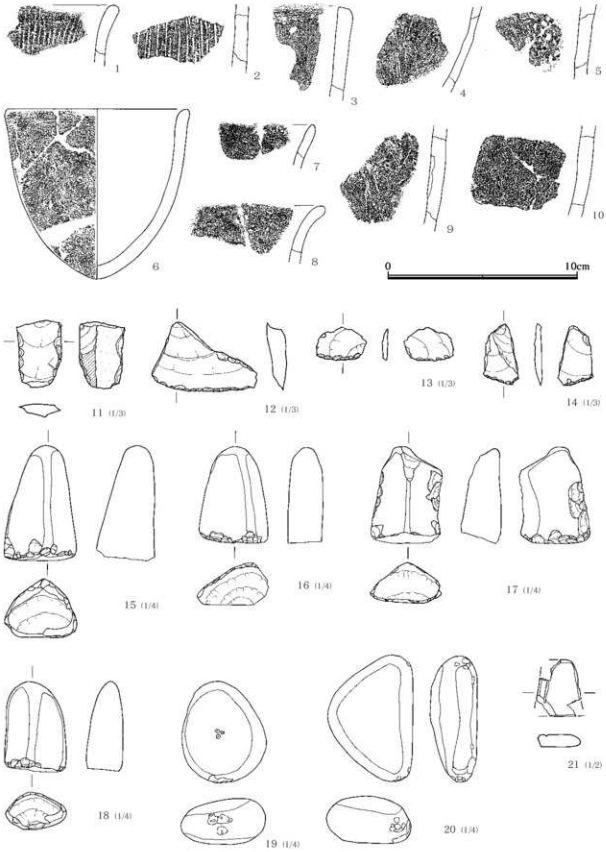
土器は総数30点と少ないが、撚糸文系、縄文系、無文系が出土しており、無文系では復元可能な小型土器６が資料化できた。石器はスタンプ形石器12点、磨石３点、敲石１点、砥石１点の他に、削器類が出土している。時期は稲荷台式期に比定される。

53号竪穴住居（第58～60図、ＰＬ７・30）

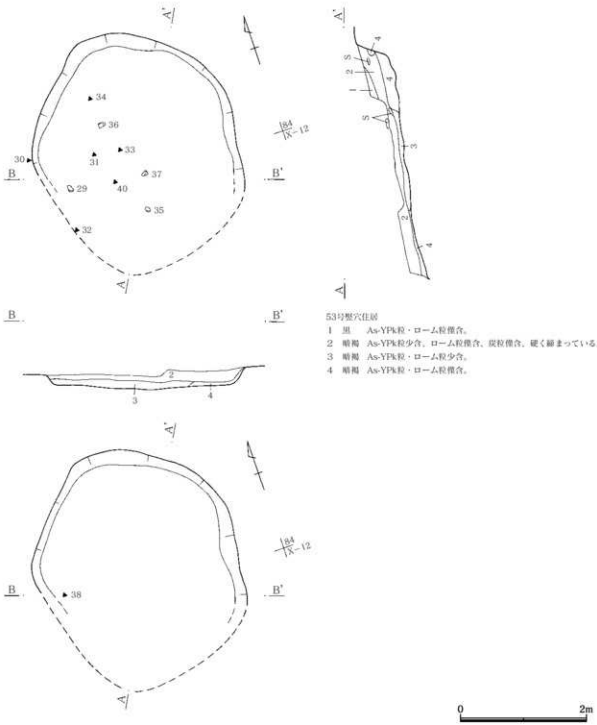
84区Ｘ－12・13グリッドに位置する。重複関係は63号竪穴住居とあり、新旧関係では63号竪穴住



第56図　51号竪穴住居遺構



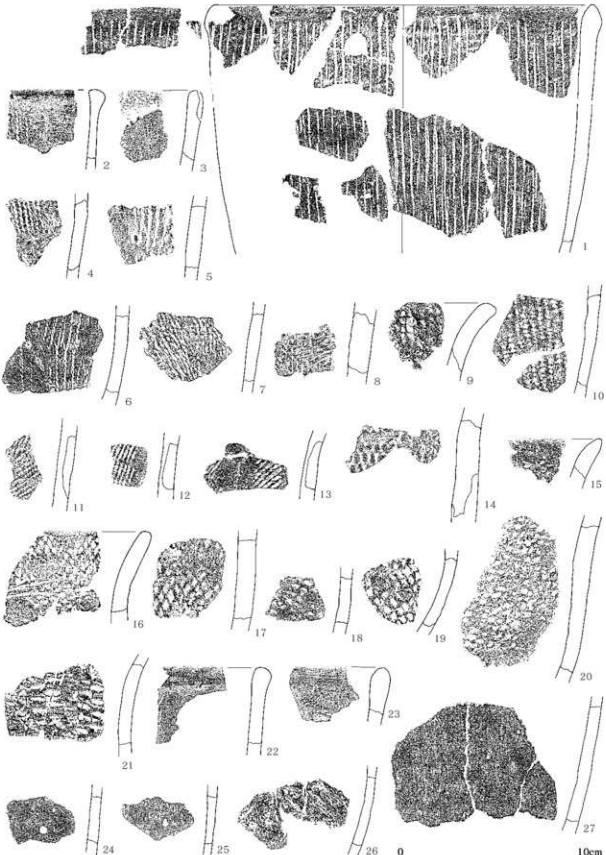
第57図　51号竪穴住居遺物



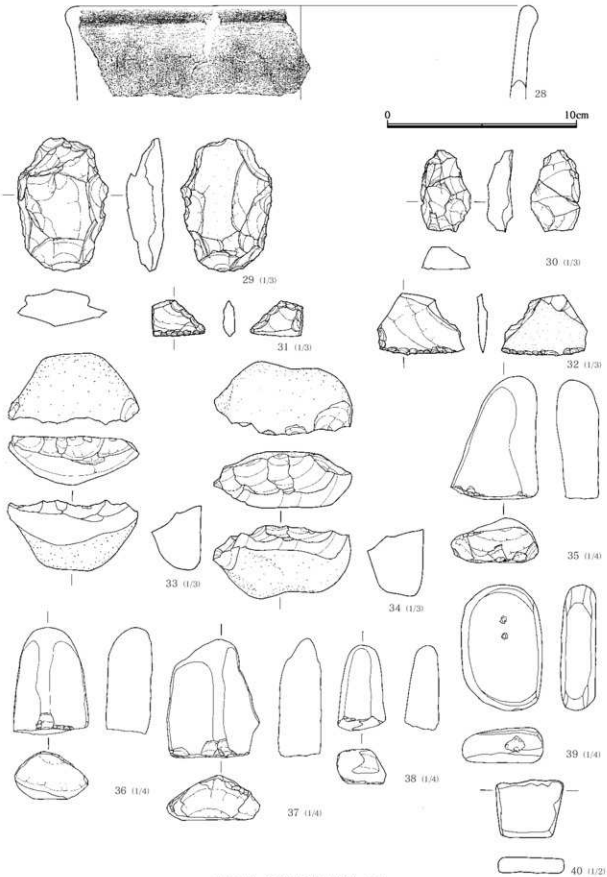
53号竪穴住居

1　黒　　As-YPk粒・ローム粒僅含。
2　順褐　As-YPk粒少含、ローム粒僅含、炭粒僅含。硬く締まっている。
3　順褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
4　順褐　As-YPk粒・ローム粒僅含。

第58図　53号竪穴住居遺構



第59図　53号竪穴住居遺物（1）



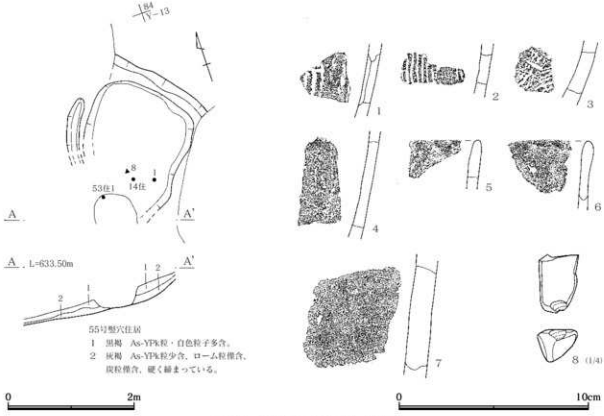
第60図　53号竪穴住居遺物（2）

居が新しく、南壁部分を壊している。西壁から東壁にかけて、残存状態は良い。住居の規模は長軸約3.8m、短軸約3.3mのやや楕円形であり、面積は約5.6㎡である。遺構確認面からの深さは約20～40㎝で、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。

土器は撚糸文系、無文系を主体に総数82点が出土しており、そのうち撚糸文土器１は、重複する50号・55号住居、および59号・60号・64号住居出土土器との接合資料である。石器はスタンプ形石器９点、敲石１点、砥石１点の他に、削器類が出土している。時期は稲荷台式期に比定される。

55号竪穴住居（第61図、ＰＬ７・30）

84区Ｙ－12グリッドに位置する。重複関係は63号竪穴住居と68号竪穴住居、それに平安時代の73号土坑であり、新旧関係は63号竪穴住居と68号竪穴住居とは不明である。北壁の一部が残存するだけで、住居の規模は不明瞭である。遺構確認面からの深さは約20㎝である。床面は南にやや傾斜するものの、平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉も不明である。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。



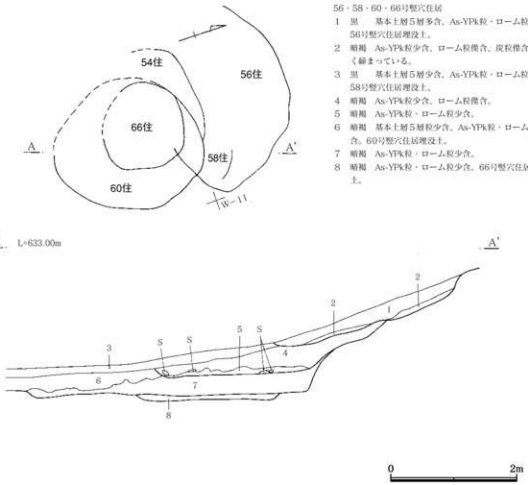
第61図　55号竪穴住居遺構・遺物

56号竪穴住居（第62・63図、ＰＬ７・８・30）

84区Ｗ・Ｘ－11グリッドに位置する。重複関係は58号竪穴住居と60号竪穴住居と66号竪穴住居とであるが、新旧関係は、66号竪穴住居が最も古く、60号竪穴住居、58号竪穴住居の順で、56号竪穴住居が最も新しい。残存状態はやや悪く、北壁から東壁にかけてのみであり、遺構確認面からの深さは約20cm以下で、壁はやや直立気味に立ち上がる。住居の規模は推定で長軸約6.0m、短軸約4.2mのやや大形の楕円形である。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。

57号竪穴住居（第64・65図、ＰＬ８・30）

84区Ｗ－11グリッドに位置する。重複関係は54号竪穴住居と58号竪穴住居とであるが、新旧関係は57号竪穴住居が最も古く、58号竪穴住居と前期の54号竪穴住居が最も新しい。ほぼ北側半分が残存するだけであるが、掘り方の形状から住居の規模は長軸約2.4m、短軸約2.1mの楕円形である。遺構確認面からの深さは北壁で約50cmとやや深く、壁はほぼ直立である。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。



56・58・60・66号竪穴住居
1　黒　基本土層5層多含、As-YPk粒・ローム粒微含。56号竪穴住居埋没土。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含、炭粒微含、硬く締まっている。
3　黒　基本土層5層少含、As-YPk粒・ローム粒少含。58号竪穴住居埋没土。
4　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。
5　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
6　暗褐　基本土層5層粒少含、As-YPk粒・ローム粒少含。60号竪穴住居埋没土。
7　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
8　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。66号竪穴住居埋没土。

第62図　56・58・60・66号竪穴住居遺構（1）

56・58号住居

56住

54住

66住

58住

60住

3

5

84
W－11

60号竪穴住居

15

27

10

23

25

0　　2m

56号竪穴住居出土遺物

1

2

3

58号竪穴住居出土遺物

1

2

3

0　　10cm

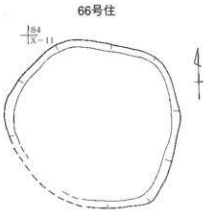
4 (1/4)

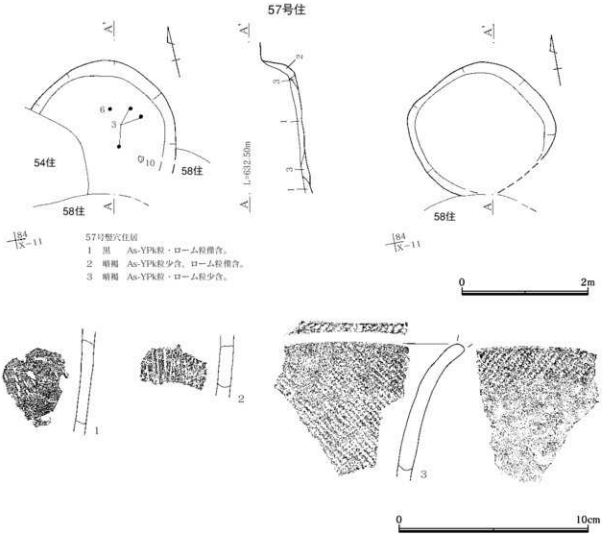
5 (1/4)

第63図　56・58・60・66号竪穴住居遺構（2）・遺物

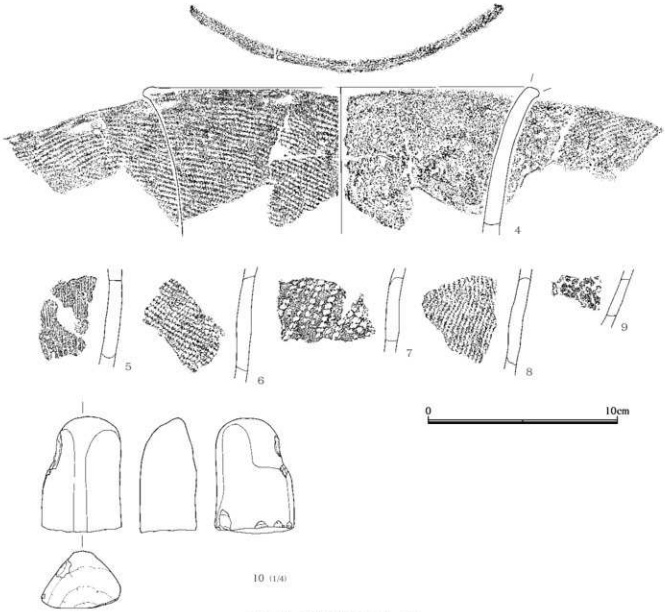
66号竪穴住居（第82～84図、ＰＬ10）

84区Ｗ・Ｘ－10グリッドに位置する。重複関係は66号竪穴住居が最も古く、60号竪穴住居、58号竪穴住居、56号竪穴住居の順で、前期の54号竪穴住居が最も新しい。住居の規模は長軸約2.7ｍ、短軸約2.5ｍの小型のやや楕円形で、面積は5.3㎡である。遺構確認面からの深さは約10cmと非常に浅いが、上部を60号竪穴住居に壊されていることから、本来はもっと深かったものと推定される。壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物はほとんど無い。





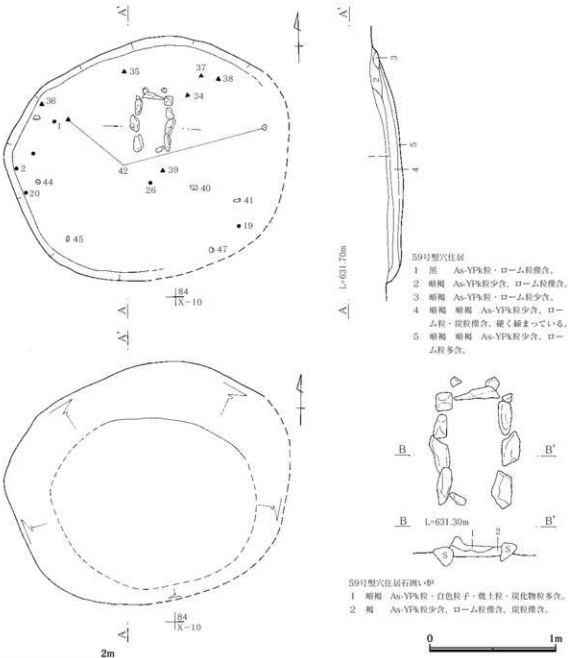
第64図　57・66号竪穴住居遺構・遺物（1）



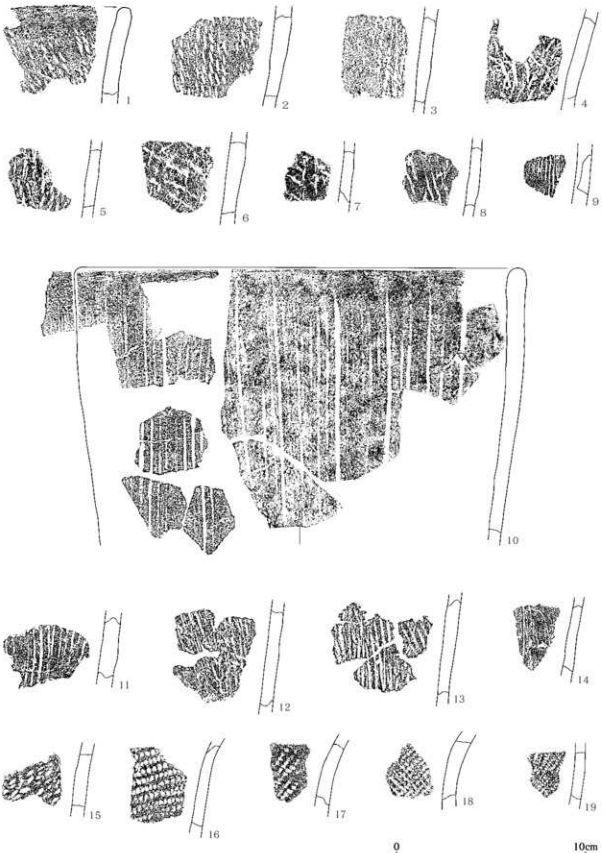
第65図　57号竪穴住居遺物（2）

58号竪穴住居（第62・63図、ＰＬ８・30）

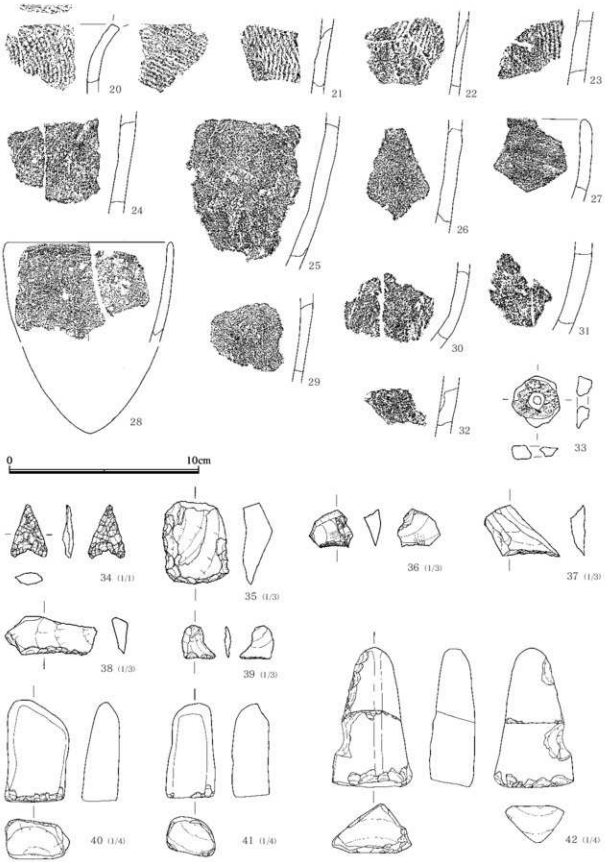
84区Ｗ－11グリッドに位置する。重複関係は54号竪穴住居と56号竪穴住居、57号竪穴住居と60号竪穴住居、66号竪穴住居とであるが、新旧関係では、66号竪穴住居が最も古く、60号竪穴住居、58号竪穴住居、56号竪穴住居の順で、前期の54号竪穴住居とは不明である。北壁付近だけの残存であり、住居の規模も形態も不明である。遺構確認面からの深さは約70cmと深いが、上部を56号竪穴住居に壊されていることから、さらに深かったものと推定される。壁は緩やかに立ち上がる。埋設土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。



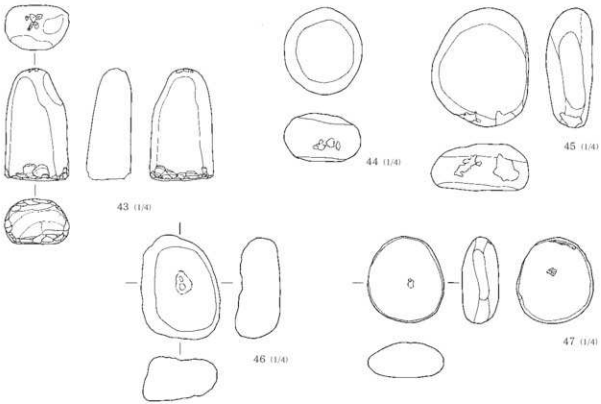
第66図　59号竪穴住居遺構



第67図　59号竪穴住居遺物（1）



第68図　59号竪穴住居遺物（2）



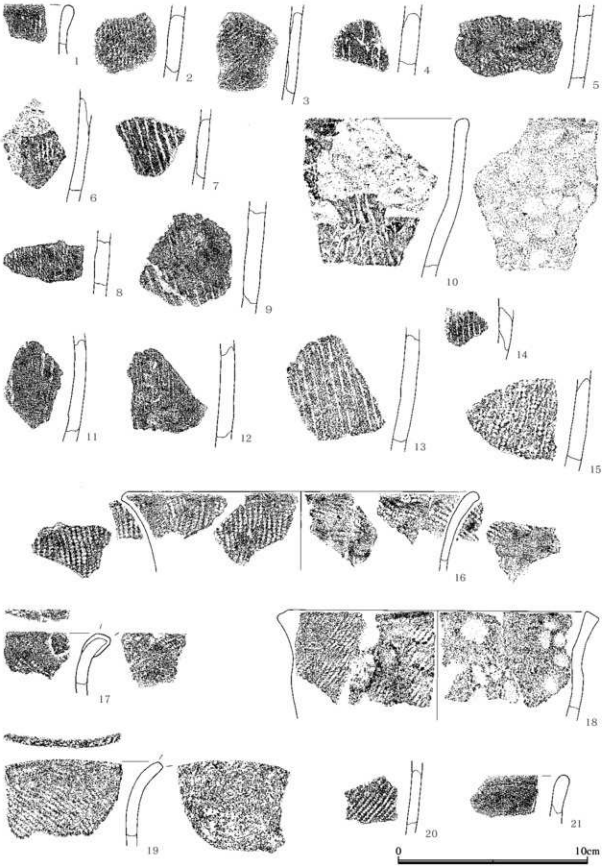
第69図　59号竪穴住居遺物（3）

59号竪穴住居（第66～69図、ＰＬ８・31）

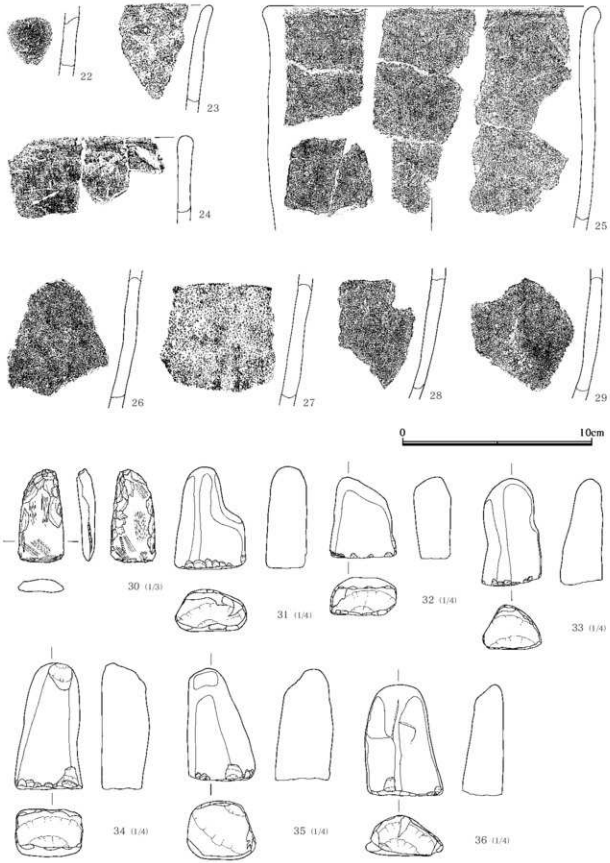
84区Ｗ・Ｘ－10グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約4.5ｍ、短軸約3.0ｍの隅丸長方形で、面積は約12.8㎡である。遺構確認面からの深さは約10～20㎝で、壁はやや直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は石囲い炉で、中央よりやや北側に位置する。扁平な大小の礫が長軸約0.9ｍ、短軸約0.6ｍの「ロ」の字状の長方形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。掘り方は緩やかな浅いすり鉢状であるが、土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。

60号竪穴住居（第62・63・70～72図、ＰＬ９・31）

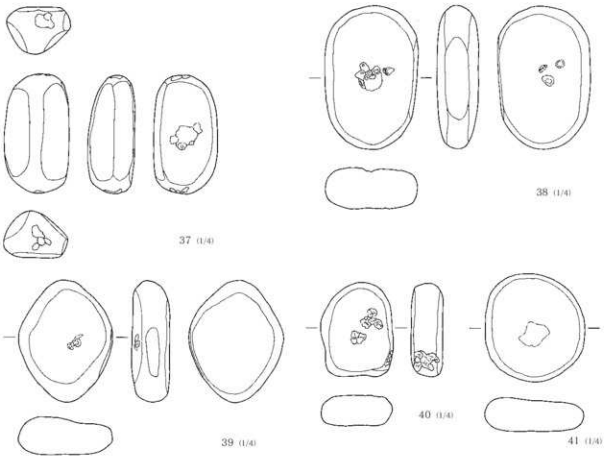
84区Ｗ・Ｘ－10グリッドに位置する。重複関係は66号竪穴住居が最も古く、60号竪穴住居、58号竪穴住居の順で、56号竪穴住居が最も新しい。54号竪穴住居とは不明である。住居の規模は長軸約4.6ｍ、短軸約4.2ｍの大形のやや楕円形であり、面積は約15.0㎡である。遺構確認面からの深さは約50㎝で、上部を56号竪穴住居に壊されていることから、さらに深かったものと推定される。壁はほぼ直立である。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。



第70図　60号竪穴住居遺物（1）



第71図　60号竪穴住居遺物（2）



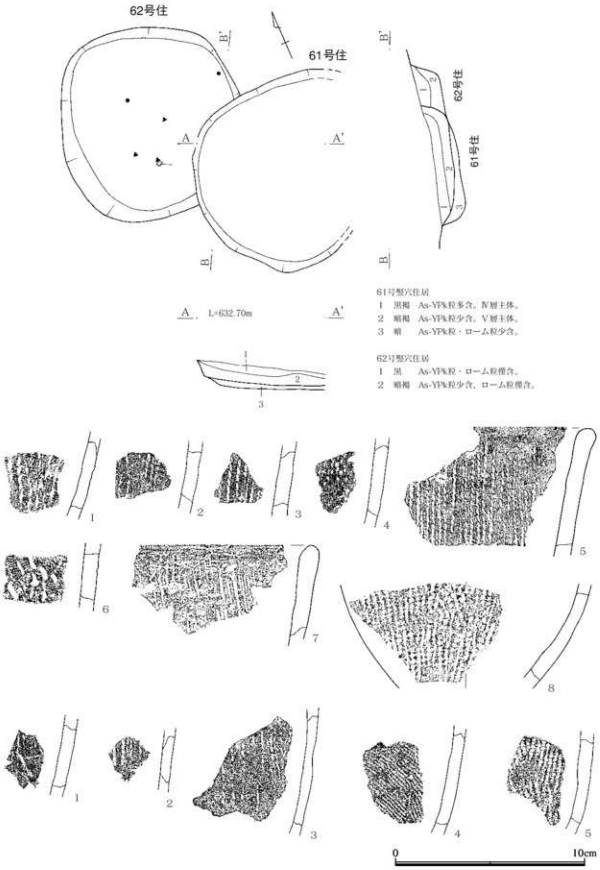
第72図　60号竪穴住居遺物（3）

61号竪穴住居（第73・74図、ＰＬ９・31）

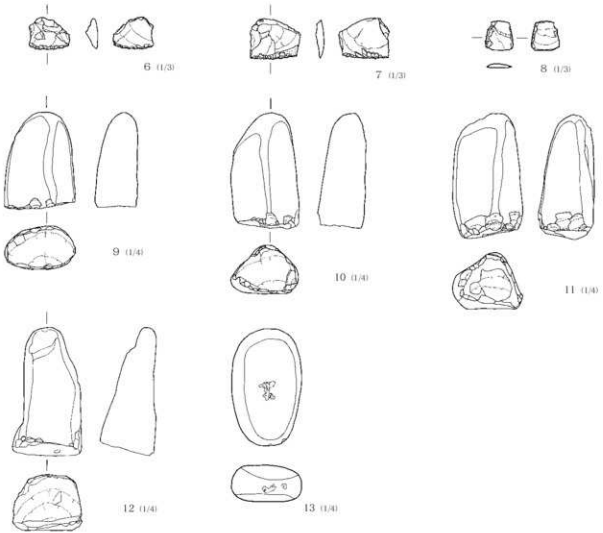
84区Ｘ－10・11グリッドに位置する。重複関係は62号竪穴住居とであり、新旧関係は61号竪穴住居が新しく、62号竪穴住居が古い。東壁がはっきりしないが、住居の規模は直径約3.0ｍほぼ円形状で、面積は約7.0㎡である。遺構確認面からの深さは約40㎝で、壁はやや直立に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は僅かに撚糸文土器が出土している。

62号竪穴住居（第73・74図、ＰＬ９・32）

84区Ｘ・Ｙ－11グリッドに位置する。重複関係は62号竪穴住居とであり、新旧関係は61号竪穴住居が新しく、62号竪穴住居が古い。住居の規模は直径約3.0ｍのほぼ円形で、面積は約6.9㎡である。残存状態は良いが、南東部の壁が61号竪穴住居に壊されている。遺構確認面からの深さは約30㎝で、壁はやや直立気味で立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は僅かに撚糸文土器と石器が出土している。



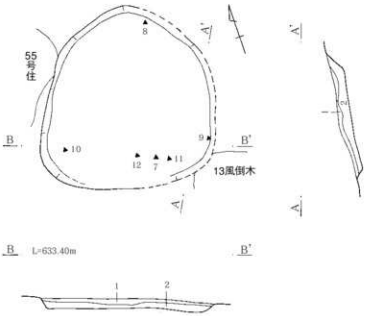
第73図　61・62号竪穴住居遺構・遺物（1）



第74図　62号竪穴住居遺物（2）

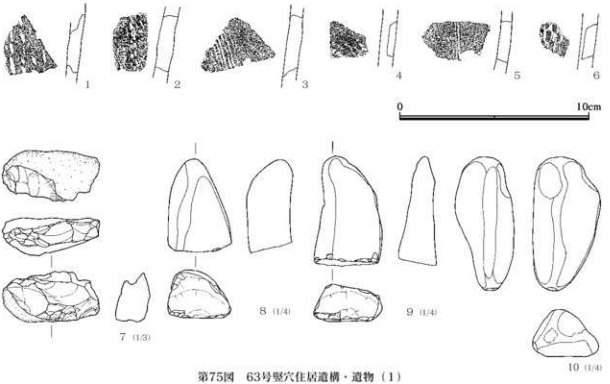
63号竪穴住居（第75・76図、ＰＬ９・32）

84区Ｗ・Ｘ－12グリッドに位置する。重複関係は僅かに55号竪穴住居とであるが、新旧関係は不明である。住居の規模は長軸約3.0ｍ、短軸約2.8ｍのやや楕円形状で、面積は約6.6㎡である。東壁から南壁にかけての残存状態は悪く、北壁からに東壁にかけてがしっかりしている。遺構確認面からの深さは約10㎝と浅く、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は僅かに撚糸文土器と石器が出土している。

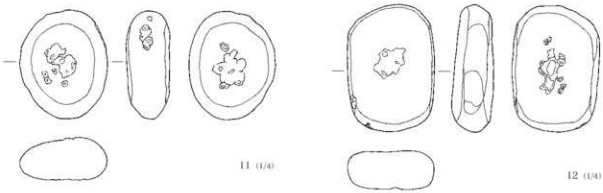


63号竪穴住居
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含、炭粒微含、硬く締まっている。

0　2m



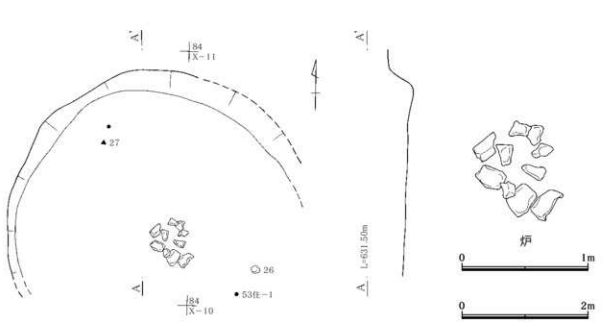
第75図　63号竪穴住居遺構・遺物（１）



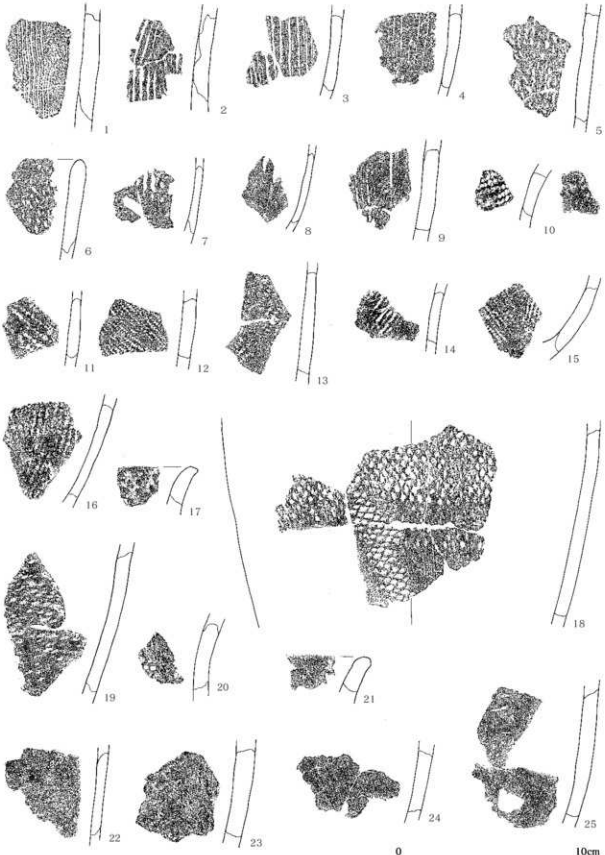
第76図　63号竪穴住居遺物（2）

64号竪穴住居（第77～79図、ＰＬ10・32）

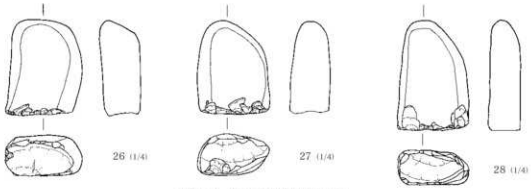
84区Ｗ－９・10、Ｘ－９・10グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約６ｍ、短軸約5.5ｍのやや楕円形状で、面積は約9.1㎡である。残存状態は悪く、北壁から西壁にかけてはっきりしているが、東壁と南壁は不明瞭である。遺構確認面からの深さは約30㎝で、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は石囲い炉で、石囲い炉は数が少ないものの扁平な大小の礫が長軸約0.9ｍ、短軸約0.75ｍのやや楕円形で、散漫ながら外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。



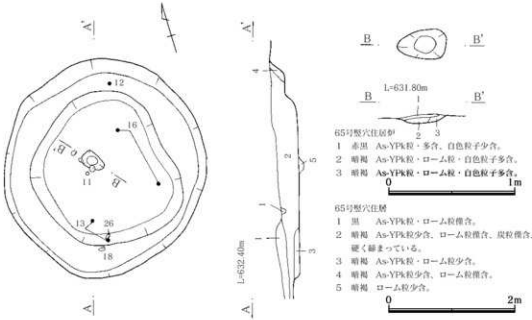
第77図　64号竪穴住居遺構



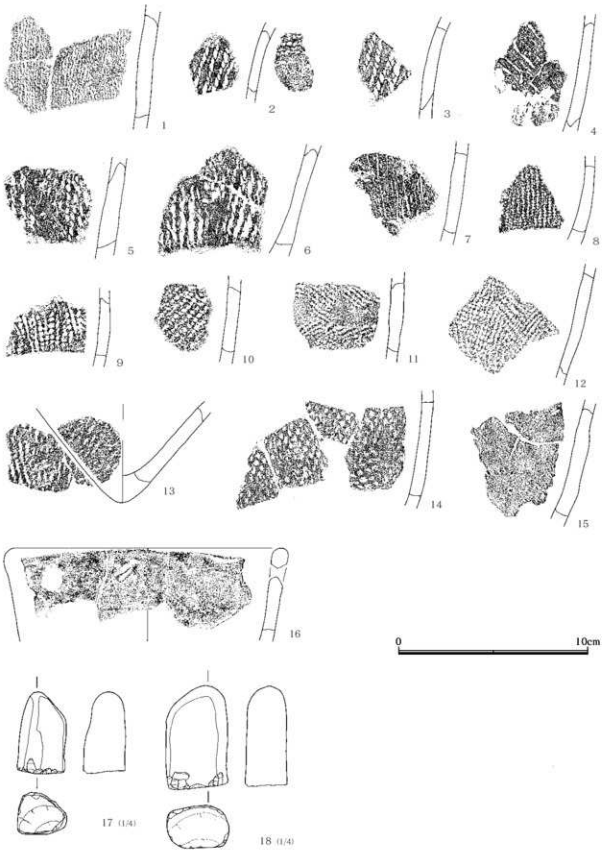
第78図　64号竪穴住居遺物（1）



第79図　64号竪穴住居遺物（2）



第80図　65号竪穴住居遺構



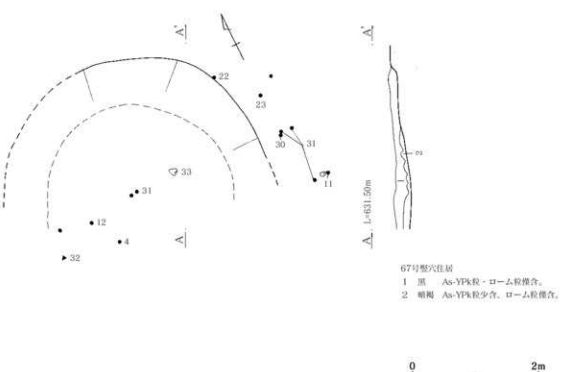
第81図　65号竪穴住居遺物

65号竪穴住居（第80・81図、ＰＬ10・32）

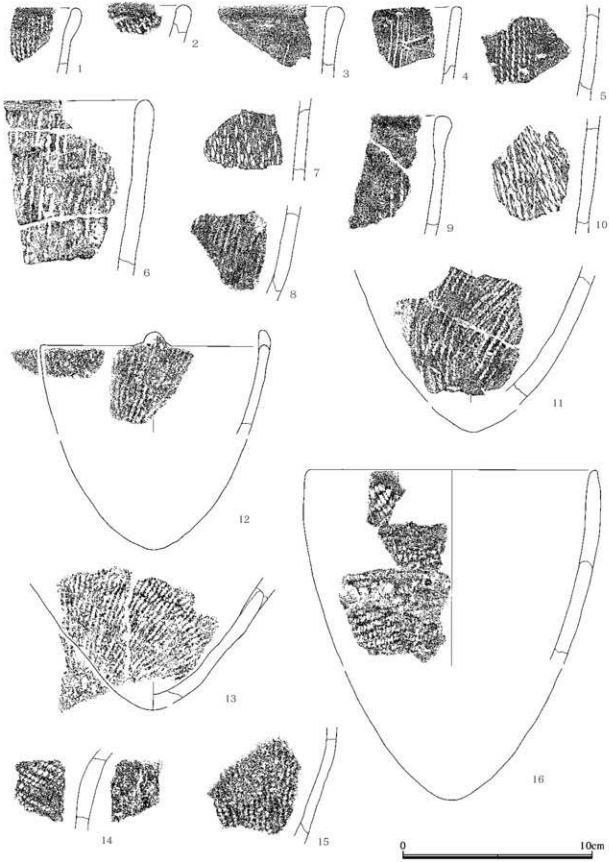
84区Ｙ－11・12、85区Ａ－11・12グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は直径約3.3ｍのやや楕円形状で、面積は約8.5㎡である。残存状態は北壁から東壁にかけてはっきりしているが、南壁はやや不明瞭である。遺構確認面からの深さは約40㎝で、壁はやや斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は地床炉で、中央よりやや西寄りに長軸約0.4ｍ、短軸約0.2ｍの楕円形気味で検出された。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。

67号竪穴住居（第82～84図、ＰＬ10・32）

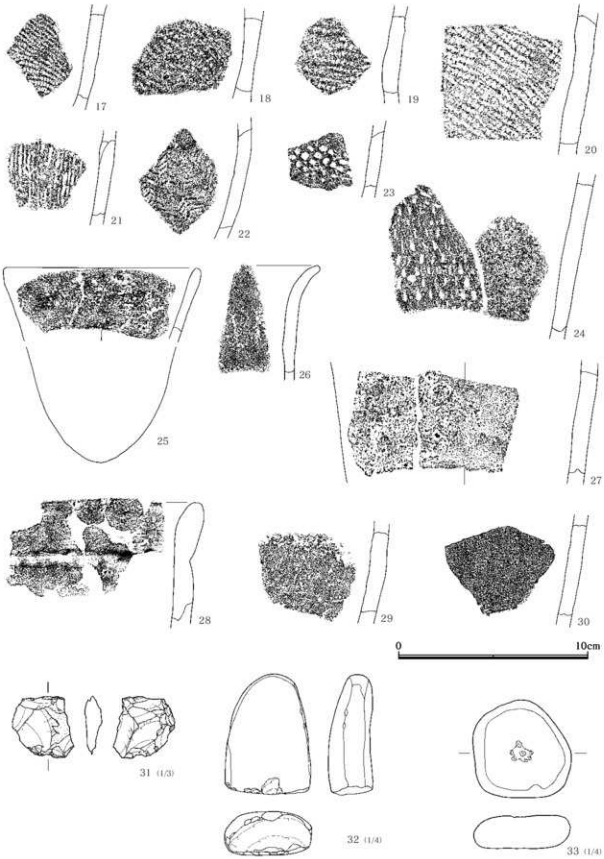
84区Ｙ－９・10、85区Ａ－９・10グリッドに位置する。重複関係では無い。残存状態は悪く、北壁から東壁にかけてはっきりしているが、西壁と南壁は不明瞭である。住居の規模は不明瞭である、直径約4.2ｍのやや円形、あるいは楕円形と推定される。遺構確認面からの深さは約30㎝で、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器などが出土している。



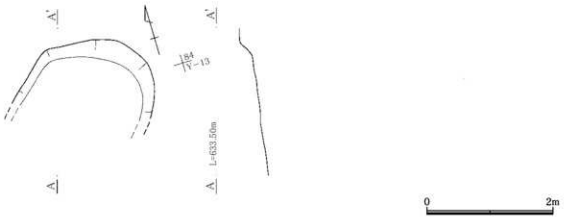
第82図　67号竪穴住居遺構



第83図　67号竪穴住居遺物（1）



第84図　67号竪穴住居遺物（2）



第85図　68号竪穴住居遺構

68号竪穴住居（第85図）

84区Ｙ－12・13グリッドに位置する。重複関係は無い。壁は北壁だけがはっきりしており、床面の残存も北半分だけである。そのため住居の規模は不明確である。遺構確認面からの深さは約10㎝と浅く、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物はほとんど無い。

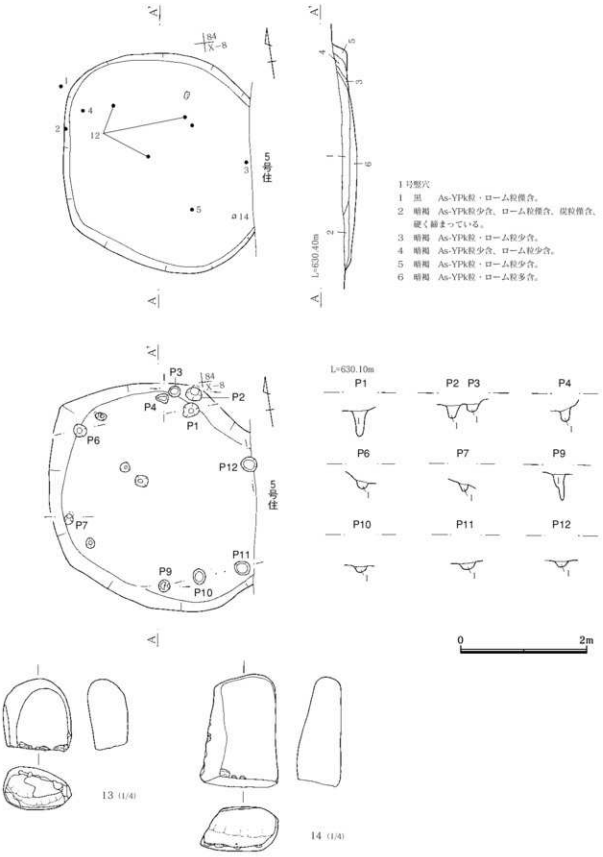
2　竪穴遺構

これ以外に、発掘調査時に遺物の多さと、焼土粒や炭化物の多さ、それに北から南に向かう緩やかな傾斜の中でも、壁状の段差が３ヶ所確認できた事から、それぞれを北壁とする竪穴遺構を４基設定したものの、埋没土も北壁付近に僅かに浅く残っているだけで、それ以外の場所の壁がはっきりしておらず、炉などの痕跡も分からない。そこで、調査時は竪穴遺構と区別したが、報告段階では竪穴住居と同様と判断し、重複関係のある遺構については、それぞれの時期の竪穴住居の説明部分に加えることとした。

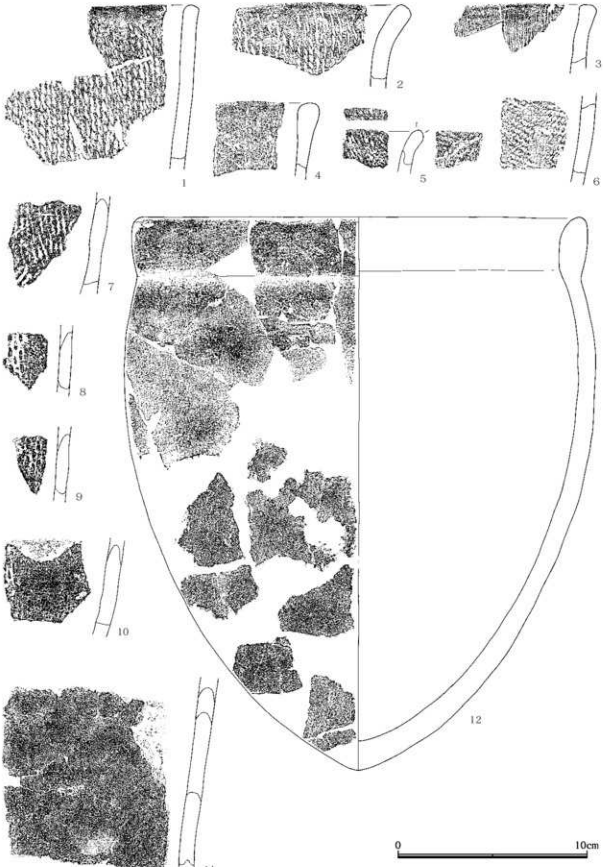
なお、４号竪穴遺構については、遺構同士の重複関係から、竪穴住居の部分で既に報告している。

１号竪穴遺構（第86・87図、ＰＬ11・23・33）

84区Ｗ－７、Ｘ－７グリッドに位置する。重複関係では平安時代の５号竪穴住居に東壁の一部を壊されている。規模は、直径約3.6ｍのほぼ円形である。最大の深さは25㎝で床面はやや浅めの擂鉢状である。残存状態は良好であるが、床面も硬くなく平らでもない。検出された10基のピットの大半が壁に沿う形で、環状に位置しており、柱穴と考えられる。土坑や周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器と石器が出土している。



第86図　１号竪穴遺構・遺物（１）



第87図　１号竪穴遺物（2）

3　石囲い炉

1号石囲い炉（第88図、ＰＬ11）

85区Ｃ－13グリッドに位置する。西側の石の列が残存するだけであるが、焼土も一部に残存している。推定の規模は一辺約0.7ｍの正方形と推定している。掘り込みも僅かに約５㎝である。39号竪穴住居の炉と推定される。遺物はほとんど出土していない。

2号石囲い炉（第88図、ＰＬ11）

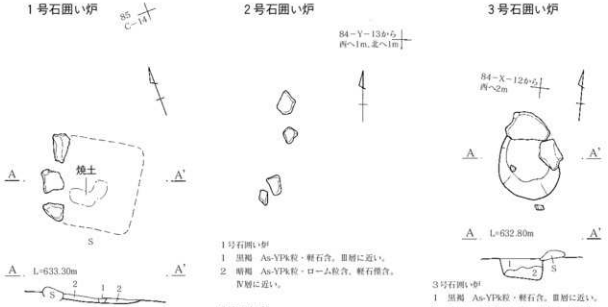
84区Ｙ－12グリッドに位置する。一部の石が僅かに並ぶような形で残存しているだけである。あるいは石囲い炉ではない可能性も考えられる。遺物はほとんど出土していない。

3号石囲い炉（第88図、ＰＬ11）

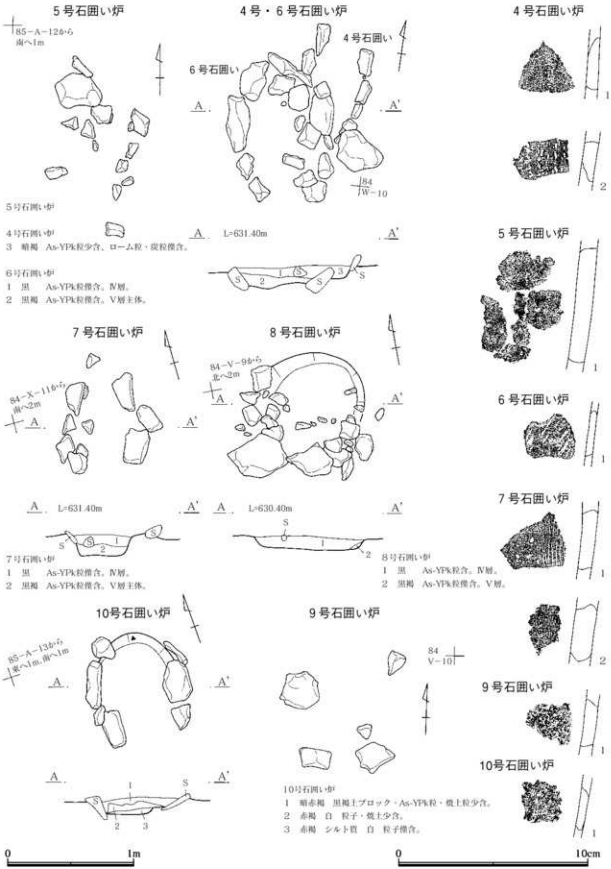
84区Ｘ－11グリッドに位置する。大形の扁平な礫が北側に外開き気味にやや傾斜して立っているだけであるが、下位には長軸約0.7ｍ、短軸約0.5ｍ、深さ約15㎝のほぼ長方形の掘り込みが検出された。遺物はほとんど出土していない。

4号石囲い炉（第89図、ＰＬ12）

84区Ｗ－10グリッドに位置する。扁平な礫が長軸約1.0ｍ、短軸約0.6ｍの長方形で、外開き気味にやや傾斜して立ち並んでいる。6号石囲い炉と重複関係があり、南側の石列の一部が壊されていることから6号石囲い炉の方が新しいと判断した。石囲い炉同士の新旧関係が分かる資料であるが、一方でその集中する形が、竪穴住居との共存関係の問題に大きく関わる感もある。



第88図　１～３号石囲い炉遺構



第89図　４・５・６・７・８・９・10号石囲い炉遺構・遺物

５号石囲いが（第89図、ＰＬ12）

84区Ｙ－11グリッドに位置する。大小の扁平な礫が長軸約1.5m、短軸約0.9mの楕円形の範囲で、外開き気味にやや傾斜する形で立っている。

６号石囲いが（第89図、ＰＬ12）

84区Ｗ－10グリッドに位置する。扁平な大小の礫が長軸約1.2m、短軸約0.9mのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。６号石囲いが と重複関係があり、６号石囲いが の方が新しい。

７号石囲いが（第89図、ＰＬ12）

84区Ｗ－10グリッドに位置する。北側と南側に石が少ないものの、東西の扁平な礫がそれぞれ列をなし、長軸約0.9m以上、短軸約0.9mのやや楕円形で、外開き気味にやや傾斜する形で並んでいる。

８号石囲いが（第89図、ＰＬ12）

84区Ｕ－９グリッドに位置する。西側から南側にかけて大小の礫が長軸約1.2m、短軸約1.1mの楕円形の広い範囲にやや集中して分布している。下位には直径約0.9m、深さ約10cmのほぼ円形の掘り込みが検出された。

９号石囲いが（第89図、ＰＬ13）

84区Ｖ－９グリッドに位置する。５個の扁平な大小の礫が長軸約１2m、短軸約0.9mの楕円形の範囲で散漫に分布している。

10号石囲いが（第89図、ＰＬ13）

84区Ｙ－12グリッドに位置する。大小の礫が長軸約2.4m、短軸約1.1mの楕円形の広い範囲にやや散漫に分布している。

４　遺物集中箇所

１号遺物集中箇所（第90・91図、ＰＬ33）

84区Ｖ－８グリッドに位置する。撚糸文土器を中心に、石器も多量に出土している。明確な遺構は検出されていないため、斜面部の傾斜による上位からの流れ出しによる堆積・包含層と考えられる。多量の撚糸文土器を主体とするが、石器類も多く出土している。だだ、ローム層への掘り込みなどが認められないことから、竪穴住居などの遺構の存在は考えられないと想定している。

この他にも、縄文時代前期の遺物がやや集中する傾向の認められる部分があったが、図化による取り上げはしたものの、今回は掲載しなかった。

５　溝

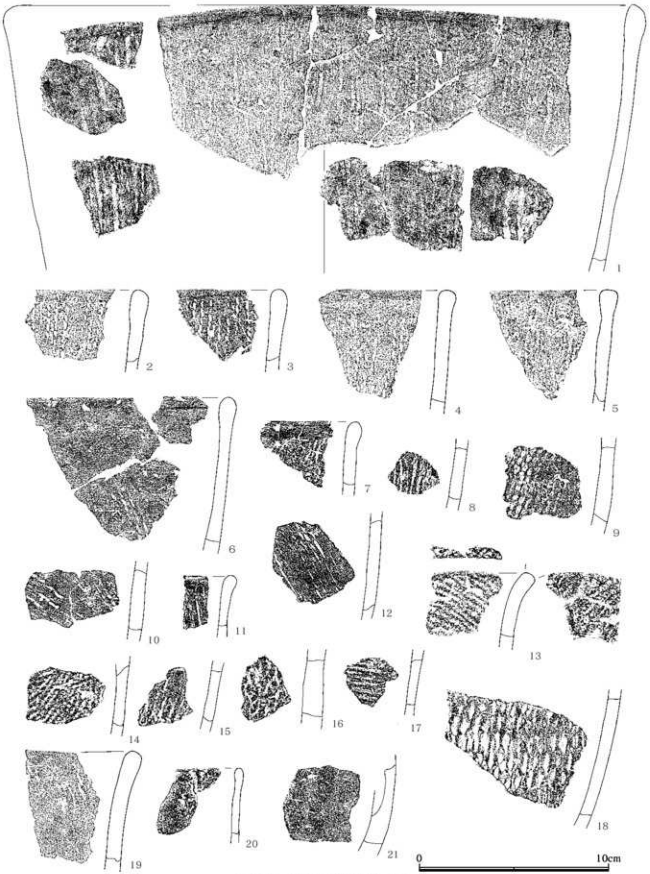
１号溝（第92～99図、ＰＬ19・20・23・33～35）

85区Ａ－12～Ａ－14グリッドに位置する。重複関係では、平安時代の３号竪穴住居に壊されており、縄文時代早期の15・36・37・39号竪穴住居を壊している。

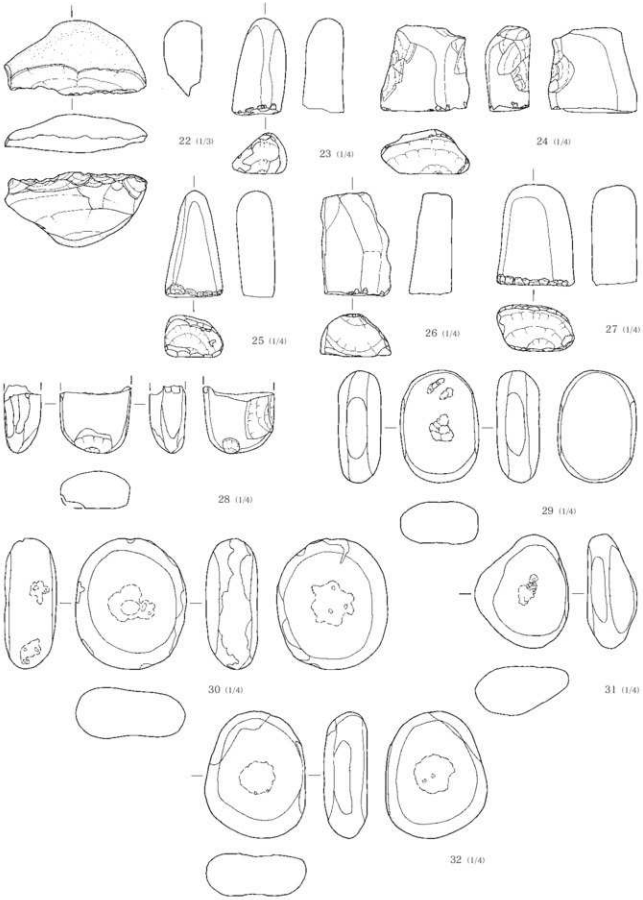
調査の過程で、迂回路の建設などの日程上で、年度をまたいで北側と南側の２回に分けて調査したために、中間部の一部で遺構がはっきりしていない部分もある。また、南側での削り込みが激しく、堆積が厚いために調査期間そのものも長引いてしまった。

調査開始当初は、南北方向のやや広い幅の溝と考えていたが、途中で土壌の堆積の様子から扇状地形を作り出している過程の旧河道と考えるようになった。その源も85区Ｂ－16グリッド付近に存在する地山に深く食い込んでいる大形の礫よりも上位の段には溝の跡が無いことから、この岩の部分からの湧き出しであるのかも知れない。

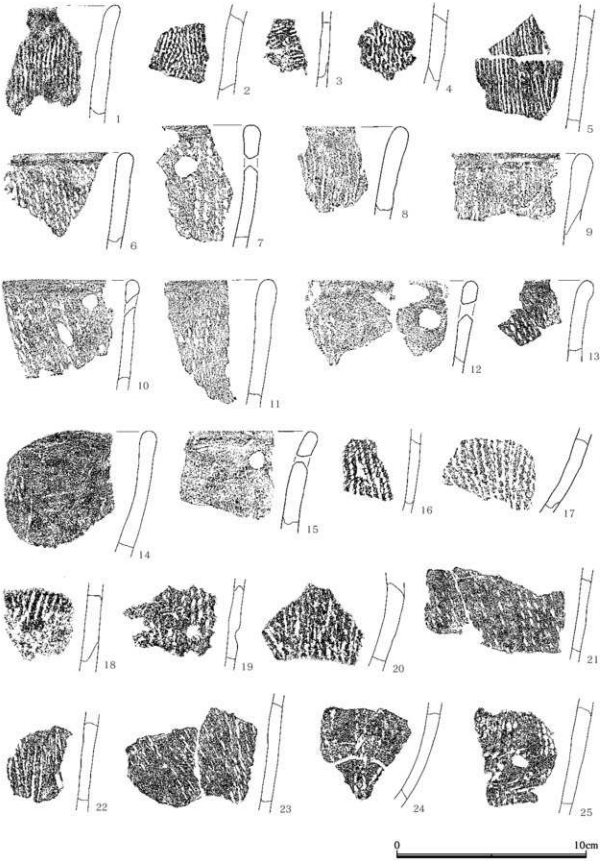
調査では、黒色土を取り除いた最終段階の浅い段階から、埋没状態や多量の遺物や礫の存在から、３度にわたる遺物と掘り上げを経て、最終段階では部分的に深く抉りこんだ状態を掘り上げて終了とした。周囲の遺構から多量に流れ込んでいる遺物のほとんどが縄文時代早期初頭の撚糸文土器やそれに伴うスタンプ形石器などであることから、この溝は人為的ではなく、扇状地形を流れる小河川と考えられ、その時期も撚糸文土器の時期直後か、それともあまり時代が下がらない時期と考えられる。



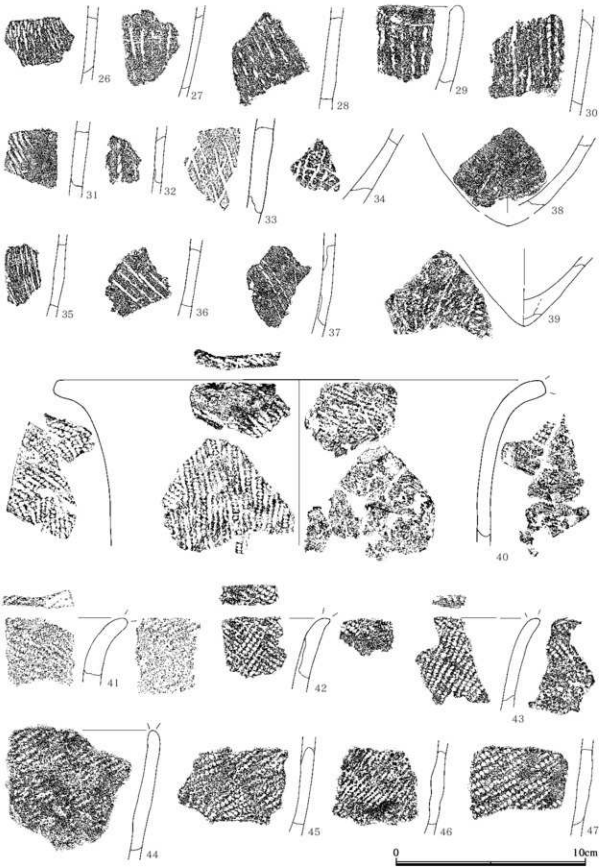
第90図　１号遺物集中遺物（１）



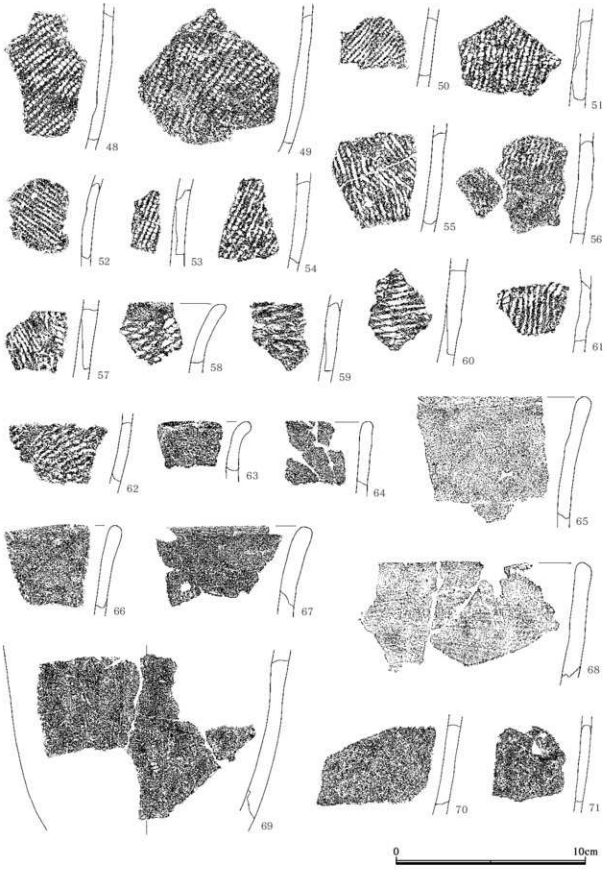
第91図　1号遺物集中遺物（2）



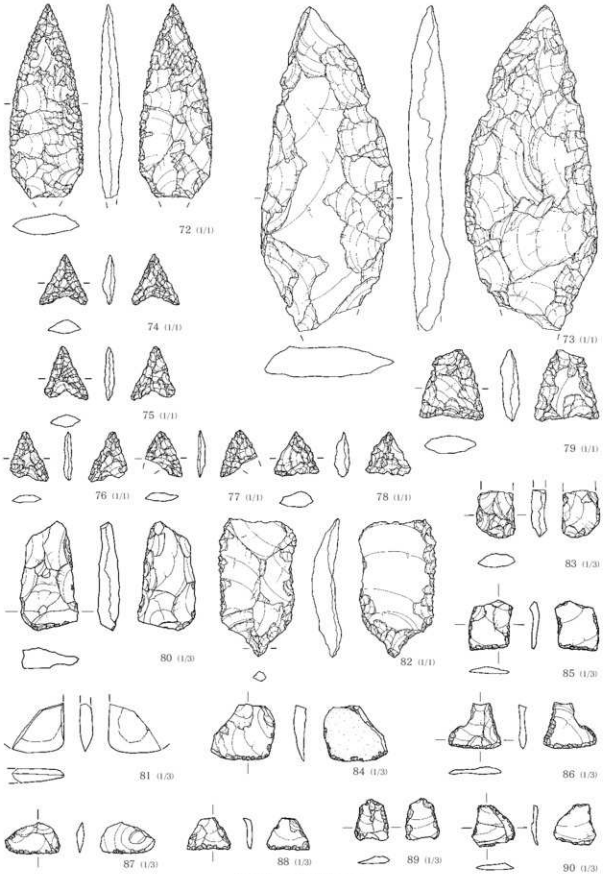
第93図　１号溝遺物（１）



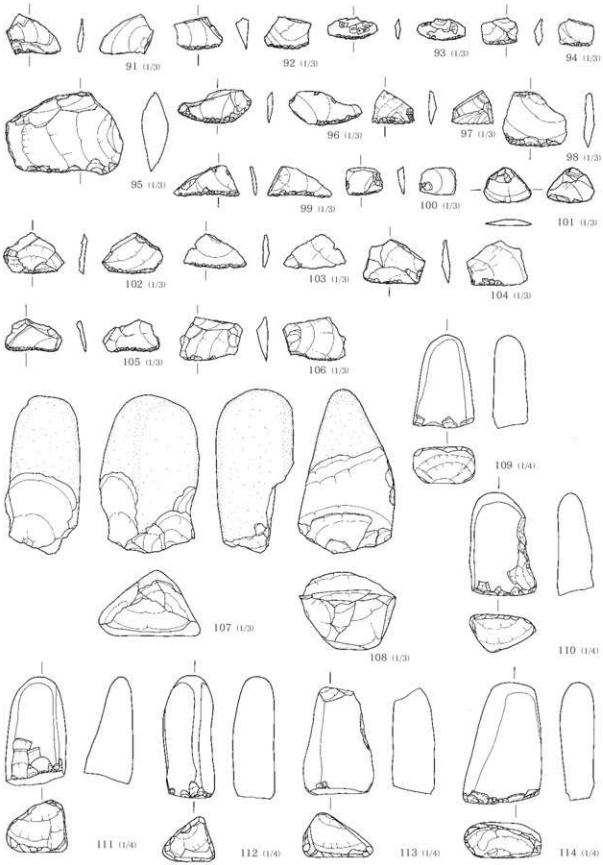
第94図　1号溝遺物（2）


48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
0
10cm

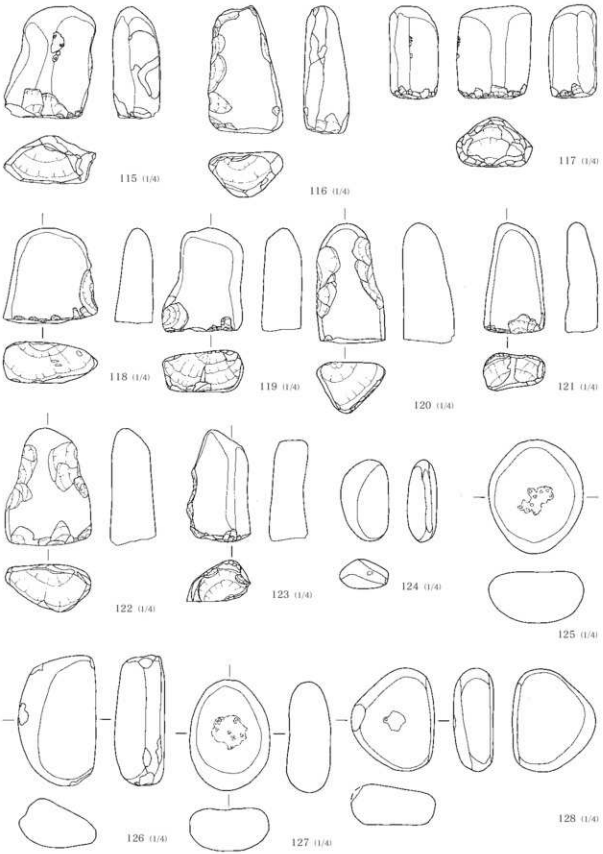
第95図　１号溝遺物（３）


72 (1/1)
73 (1/1)
74 (1/1)
75 (1/1)
76 (1/1)
77 (1/1)
78 (1/1)
79 (1/1)
80 (1/3)
81 (1/3)
82 (1/1)
83 (1/3)
84 (1/3)
85 (1/3)
86 (1/3)
87 (1/3)
88 (1/3)
89 (1/3)
90 (1/3)

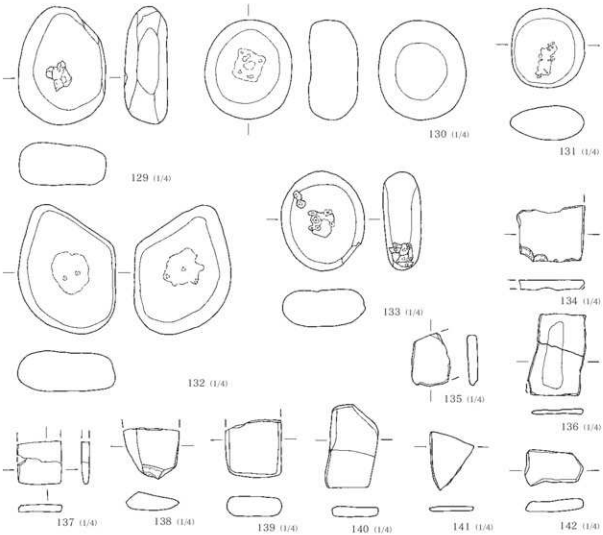
第96図　1号溝遺物（4）


91 (1/3)
92 (1/3)
93 (1/3)
94 (1/3)
95 (1/3)
96 (1/3)
97 (1/3)
98 (1/3)
99 (1/3)
100 (1/3)
101 (1/3)
102 (1/3)
103 (1/3)
104 (1/3)
105 (1/3)
106 (1/3)
107 (1/3)
108 (1/3)
109 (1/4)
110 (1/4)
111 (1/4)
112 (1/4)
113 (1/4)
114 (1/4)

第97図　1号溝遺物（5）


115 (1/4)
116 (1/4)
117 (1/4)
118 (1/4)
119 (1/4)
120 (1/4)
121 (1/4)
122 (1/4)
123 (1/4)
124 (1/4)
125 (1/4)
126 (1/4)
127 (1/4)
128 (1/4)

第98図　1号溝遺物（6）


129 (1/4)
130 (1/4)
131 (1/4)
132 (1/4)
133 (1/4)
134 (1/4)
135 (1/4)
136 (1/4)
137 (1/4)
138 (1/4)
139 (1/4)
140 (1/4)
141 (1/4)
142 (1/4)

第99図　１号溝遺物（７）

【前期前半】

１号竪穴住居（第100・101図、ＰＬ13・35）

84区Ｘ－４・５グリッドに位置する。重複関係は２号竪穴住居とであるが、２号竪穴住居が古く、１号竪穴住居が新しい。住居の規模は長軸約4.0m、短軸約3.6mのやや隅丸の長方形に近い。面積は約14.2㎡である。南西隅付近が掘り方でもはっきりとしない。遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほぼ直立する。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋設土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は、ほぼ中心から北寄りに位置し、地床炉である。掘り方調査で４本の柱穴が検出され、東壁、北壁、西壁に沿って周溝が掘り込まれており、その中に支柱と考えられるピットが7基検出されている。遺物は縄文時代前期中頃の土器や石器が出土している。

２号竪穴住居（第100・101図、ＰＬ13・35）

84区Ｘ－５グリッドに位置する。重複関係は１号竪穴住居とであるが、２号竪穴住居が古く、１号竪穴住居が新しい。そのために北壁側の一部しか残存せず、住居の規模は短軸約２mの他は不明である。おそらくは竪穴住居の拡張建て替えの可能性も有ることから、隅丸の長方形に近いと想定される。遺構確認面からの深さは約40cmで、壁はほぼ直立する。床は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋設土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できないが、おそらくは南に位置する１号竪穴住居に壊されたものと考えられる。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は僅かに出土している。

８号竪穴住居（第102・103図、ＰＬ14・35）

84区Ｘ－８グリッドに位置する。大小の礫が密集した炉だけが検出されており、重複関係は無い。炉は長軸約1.01m、短軸約0.85m、深さ約35cmの楕円形である。周辺に土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は撚糸文土器や石器などが出土している。

９号竪穴住居（第104・105図、ＰＬ14・35）

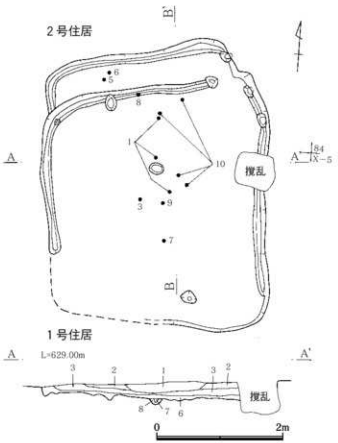
84区Ｕ－７、Ｖ－７グリッドに位置する。重複関係は無い。北西隅を中心に北壁と西壁の一部しか検出されていないが、掘り方ではほぼ西半分が検出され、隅丸の長方形と推定される。住居の規模は長軸は約3.6m以上だが、短軸約3.8mである。遺構確認面からの深さは約10cm以下で、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋設土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。北壁際に１基のピットが検出された。土坑や柱穴、周溝は確認出来なかった。遺物は縄文時代前期の土器が僅かに出土している。

11号竪穴住居（第11～13図、ＰＬ14・15・24）

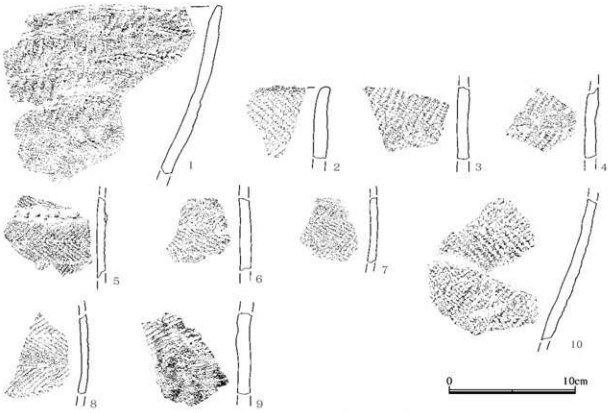
84区Ｘ－８・９、Ｙ－８・９グリッドに位置する。重複関係は７号竪穴住居と14号竪穴住居、それに４号竪穴遺構とであり、新旧関係は、縄文時代前期の11号竪穴住居が最も新しく、次に４号竪穴遺構、７号竪穴住居で、７号竪穴住居の床下から検出された14号竪穴住居が最も古いと判断される。さらに傾斜がある部分に位置するため、確認時に北壁から東壁にかけての部分しか検出されなかったために、住居の規模や形状は不明である。遺構確認面からの深さは約10cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋設土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は中央かあるいはそれよりやや北東寄りの位置に、埋甕が検出されたために、埋甕炉である。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は縄文時代前期の土器や石器が出土している。

31号竪穴住居（第106図、ＰＬ15）

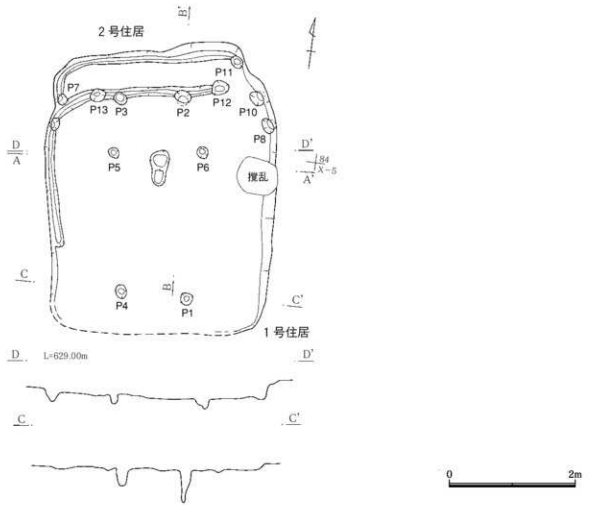
85区Ｂ－11グリッドに位置する。大小の礫が密集した炉だけが検出されており、重複関係は無い。炉は長軸約0.9m、短軸約0.5m、深さ15cmの楕円



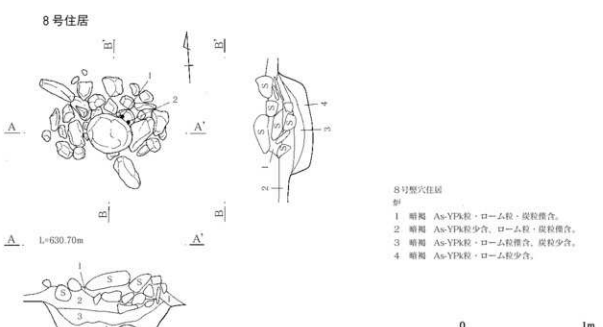
1号竪穴住居・2号竪穴住居
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含、炭粒微含、硬く締まっている。
3　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
4　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。
5　黒褐　As-YPk粒少含、ローム粒多含。
6　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒多含。
7　黒褐　As-YPk粒少含。
8　暗褐　ローム粒含む。



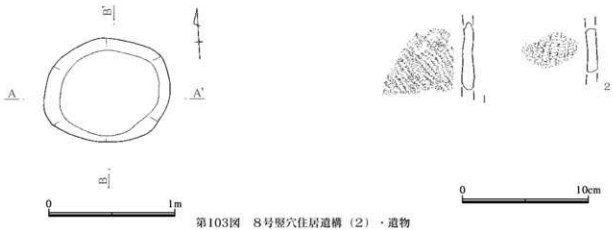
第100図　1・2号竪穴住居遺構（1）・遺物



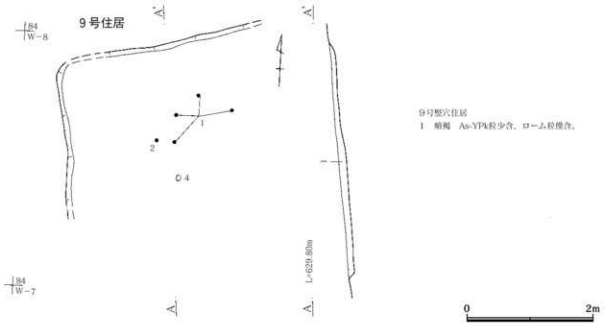
第101図　1・2号竪穴住居遺構（2）



第102図　8号竪穴住居遺構（1）



第103図　８号竪穴住居遺構（２）・遺物



第104図　９号竪穴住居遺構・遺物（１）

形である。周辺に土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物はほとんど出土しなかった。

35号竪穴住居（第107・108図、ＰＬ15・23・35）

85区Ｂ－12・13グリッドに位置する。傾斜がある部分に位置するため、確認時に北壁と東・西壁の北側半分しか残存しなかった。重複関係は無い。住居の規模は長軸が約4.2ｍ以上だが、短軸は不明のやや楕円形と推定される。遺構確認面からの深さは約20㎝で、壁はやや直立気味である。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。４基のピットが検出されたが、土坑や周溝は確認出来なかった。遺物は縄文時代前期末の土器や石器が出土している。

47号竪穴住居（第109図）

84区Ｔ－８グリッドに位置する。傾斜がある部分に位置するため、確認時に大小の礫が密集した炉だけが残存していた。

調査当初は平安時代の竪穴住居の北カマドかと考えられていたが、周辺の遺物の様子から、縄文時代前期後半と考えられる。竪穴住居の掘り込みなどは一切確認出来なかった。重複関係は無い。住居の規模は不明である。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物はほとんど出土しなかった。

48号竪穴住居（第110～112図）

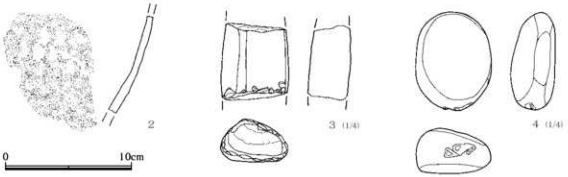
84区Ｙ－９・10グリッドに位置する。平成12年度と平成13年度の調査範囲の境目に位置したために、平成12年度の発掘調査では確認できずに、平成13年度の発掘調査で北壁側の一部だけを検出した。重複関係は無い。住居の規模は確認した北壁と東・西壁の北側半分からは隅丸の長方形と推定される。遺構確認面からの深さは約55㎝と深く、壁はやや直立気味である。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかったが、おそらくは南側に位置していたものと考えられる。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は縄文時代前期末の土器や石器が出土している。

52号竪穴住居（第113・114図、ＰＬ15・16）

84区Ｗ－12、Ｘ－12グリッドに位置する。傾斜がある部分に位置するため、確認時に北壁と東・西壁の北側半分しか残存しなかったうえに、重複関係では56号竪穴住居が南側に存在し、新旧関係は56号竪穴住居が古く、52号竪穴住居が新しい。住居の規模はおそらくは直径約3.0ｍのほぼ円形と推定される。遺構確認面からの深さは約25㎝で、やや直立である。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は掘り込み地床炉で、大小の礫を含むやや楕円形と推定され、長軸約1.0ｍ、短軸約0.9ｍ、深さ約10㎝で、ほぼ中心に位置する。土坑やピットや周溝は確認出来なかった。遺物は焼糸文土器や石器などが出土している。

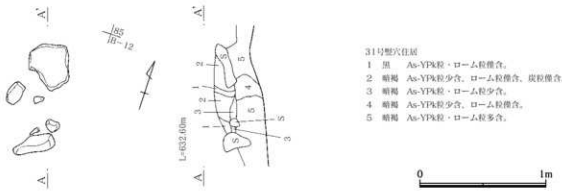
54号竪穴住居（第115図、ＰＬ16～17）

84区Ｘ－10・11グリッドに位置する。重複関係は57号竪穴住居と58号竪穴住居であり、57号竪穴住居が最も古く、58号竪穴住居と54号竪穴住居の順である。住居の規模は長軸約3.9ｍ、短軸約3.1ｍの楕円形である。面積は約9.6㎡である。遺構確認面からの深さは約60㎝と深く、壁はやや直立気味に立ち上がる。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は、南壁際に焼土が確認されたことから、地床炉と推定される。また、床面のあちらこちらに炭化材が検出された。北壁際だけに周溝が確認された。壁に沿ってほぼ全周する形でピットが22基検出され、支柱と考えられる。また、柱穴と考えられるピットが９基検出されている。遺物は縄文時代前期後半の土器や石器が出土している。

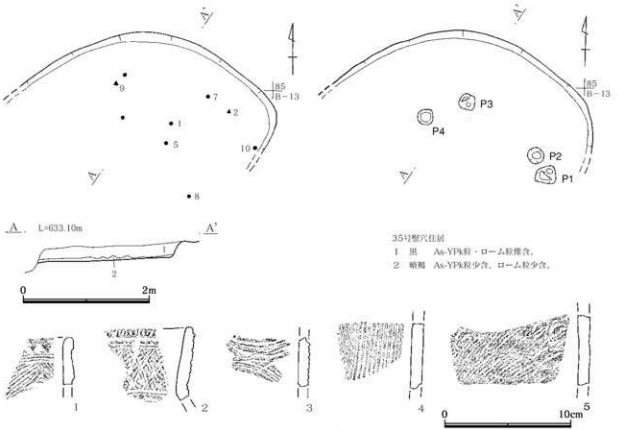


第105図　９号竪穴住居遺物（2）

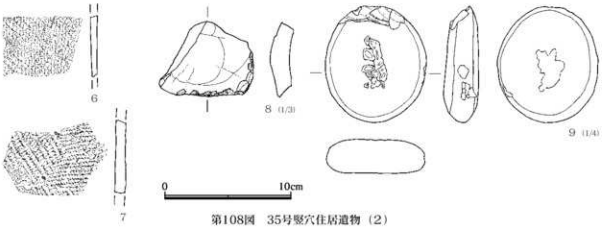
31号住居



第106図　31号竪穴住居遺構

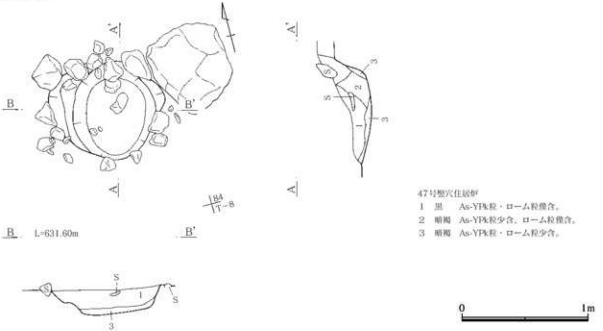


第107図　35号竪穴住居遺構・遺物（1）



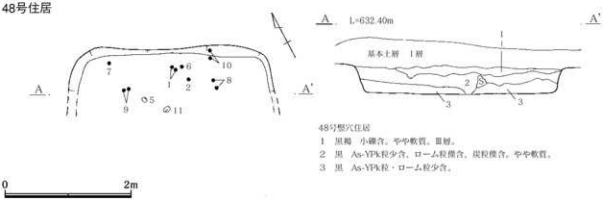
第108図　35号竪穴住居遺物（2）

47号住居

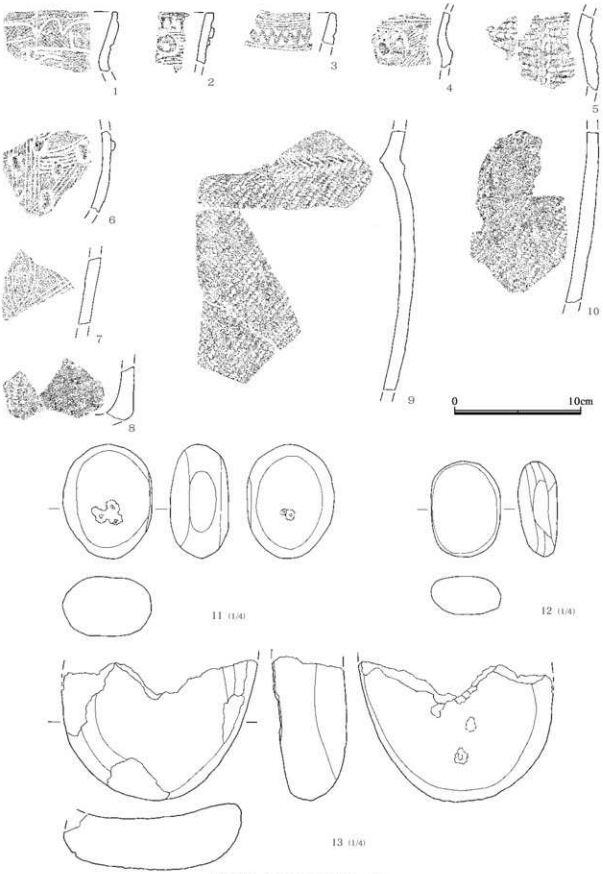


第109図　47号竪穴住居遺構

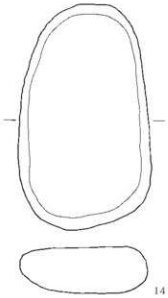
48号住居



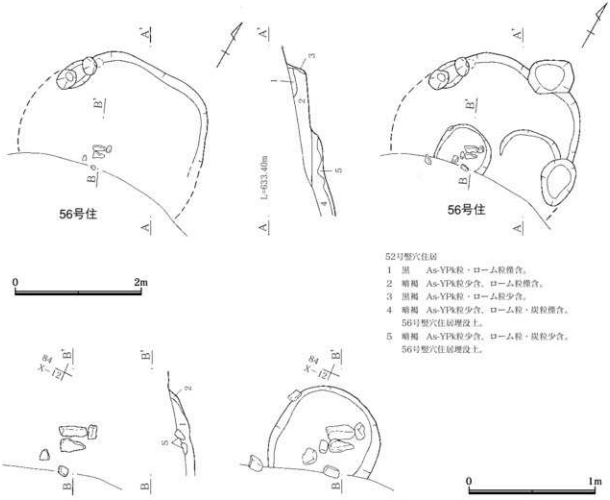
第110図　48号竪穴住居遺構



第111図　48号竪穴住居遺物（1）

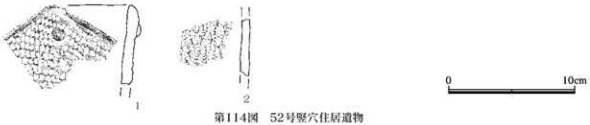


第112図　48号竪穴住居遺物（2）

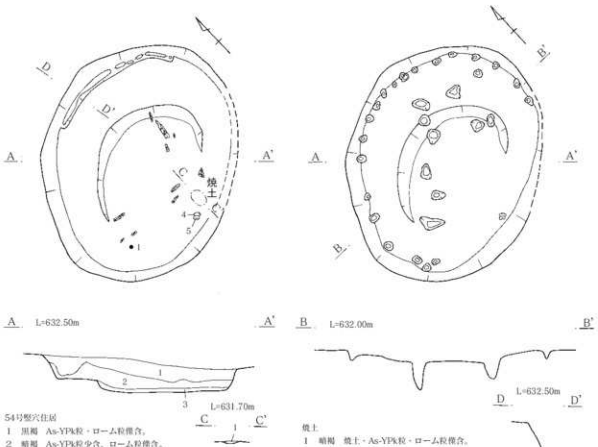


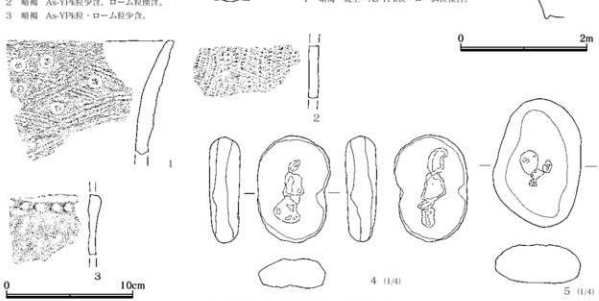
52号竪穴住居
1　黒　　As-YPk粒・ローム粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。
3　黒褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
4　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒微含。
　　56号竪穴住居埋没土。
5　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒・炭粒少含。
　　56号竪穴住居埋没土。

第113図　52号竪穴住居遺構

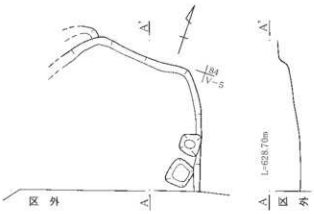


第114図　52号竪穴住居遺物





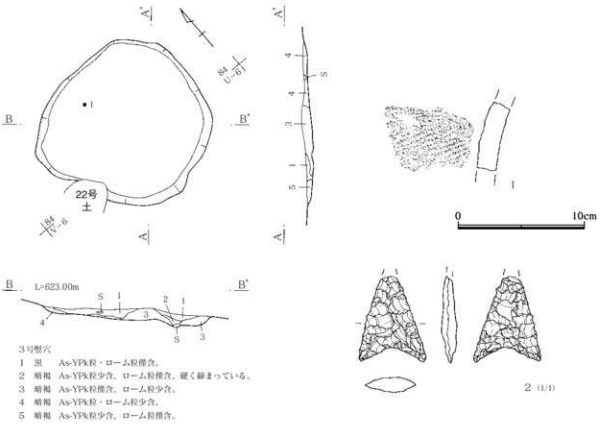
第115図　54号竪穴住居遺構・遺物



２号竪穴遺構（第116図、ＰＬ13・35）

84区Ｕ－４、Ｖ－４グリッドに位置する。重複関係は無い。北壁から東壁にかけての北半分だけが検出され、南側半分は調査区域外に延びる。そのため規模や形状は不明である。床面は硬くなく平らでもない。東壁に沿って２基の土坑が検出されたが、性格は不明である。遺物はほとんど出土していない。

第116図　２号竪穴遺構



３号竪穴
1　黒　As-YPk粒・ローム粒微含。
2　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。硬く締まっている。
3　暗褐　As-YPk粒微含、ローム粒少含。
4　暗褐　As-YPk粒・ローム粒少含。
5　暗褐　As-YPk粒少含、ローム粒微含。

第117図　３号竪穴遺構・遺物

３号竪穴遺構（第117図）

84区Ｕ－５・６グリッドに位置する。重複関係は無い。規模は、長軸約2.7ｍ、短軸約2.5ｍのやや不正形な楕円状である。確認面からの深さは約10㎝で床面はやや凹凸がある。遺物は縄文時代前期の土器と石器が出土している。

【中期前半】

13号竪穴住居（第118・119図、ＰＬ17・36・37）

84区Ｒ－５、Ｓ－５グリッドに位置する。重複関係は無い。傾斜地である事から住居の規模は北から東にかけて長軸約4.8ｍ、短軸約4.2ｍのやや楕円形と推定される。面積は15.8㎡である。遺構確認面からの深さは北壁で約30㎝、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は、中心から北壁寄りに位置し、炉の周辺から13基のピットが検出されたが、いずれかが柱穴と考えられる。土坑や周溝は検出されなかった。遺物は、縄文時代中期初頭の土器と石器が出土している。

17号竪穴住居（第120・121図、ＰＬ17・18）

84区Ｑ－５・６、Ｒ－５・６グリッドに位置する。傾斜がある部分に位置するため、確認時に北壁と東・西壁の北側半分しか残存しなかった。重複関係は無い。住居の規模は直径約4.2ｍのほぼ円形に近いと推定される。面積は約13.8㎡である。遺構確認面からの深さは約10～15㎝で、壁はやや直立する。床面は多少の凹凸を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心としている。炉は確認できなかった。ほぼ中央に直径0.65約ｍ、深さ約10㎝の円形の土坑が検出されたが、炉との確証は得られなかった。ピットや周溝は確認出来なかった。遺物は中期初頭の土器や石器などが出土している。

49号竪穴住居（第122図、ＰＬ18）

84区Ｔ－８・９グリッドに位置する。47号竪穴住居と同様に、しっかりとした石囲い炉だけが検出されている。調査当初は平安時代の竪穴住居の北カマドかと考えられていたが、周辺の遺物の様子から、縄文時代中期前半と考えられた。炉の規模は、長軸1.4ｍ、短軸約0.95ｍ、深さ約30cmの楕円形である。

６　土坑

１号土坑（第123図、ＰＬ19・37）

84区Ｗ－４・５グリッドに位置する。規模は一辺約0.9ｍの隅丸正方形である。時期判定が難しい遺構のひとつである土坑の中で、この１号土坑が唯一縄文時代と認定された。それは土坑の底部付近に土器が集中していたからである。だが、性格は不明である。時期は縄文時代前期末である。

７　集石

集石も時期判定が難しい遺構のひとつで、遺構一覧表にも明記したように、縄文時代ではないものも含まれているようである。だが、以前の「平安時代・中近世編」の編集段階では、時期が明確ではなかったために、一切収録しなかったことから、今回の報告にすべて記載することとする。

１号集石（第126図、ＰＬ20）

84区Ｙ－５グリッドに位置する。大小の礫が長軸約1.2ｍ、短軸約0.9ｍの楕円形の範囲にやや集中して分布している。

２号集石（第126図、ＰＬ20）

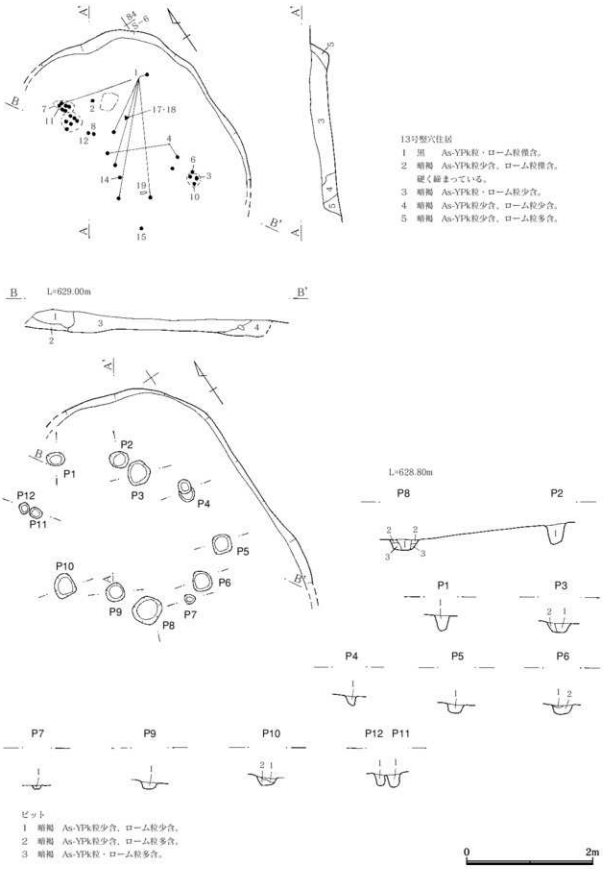
84区Ｙ－５・６グリッドに位置する。大小の礫が長軸約1.8ｍ、短軸約1.2ｍの楕円形の範囲でやや集中する形で分布している。南北にそれぞれ集中することから、あるいは二つの集石に分離が可能かも知れない。

３号集石（第127図、ＰＬ20・38）

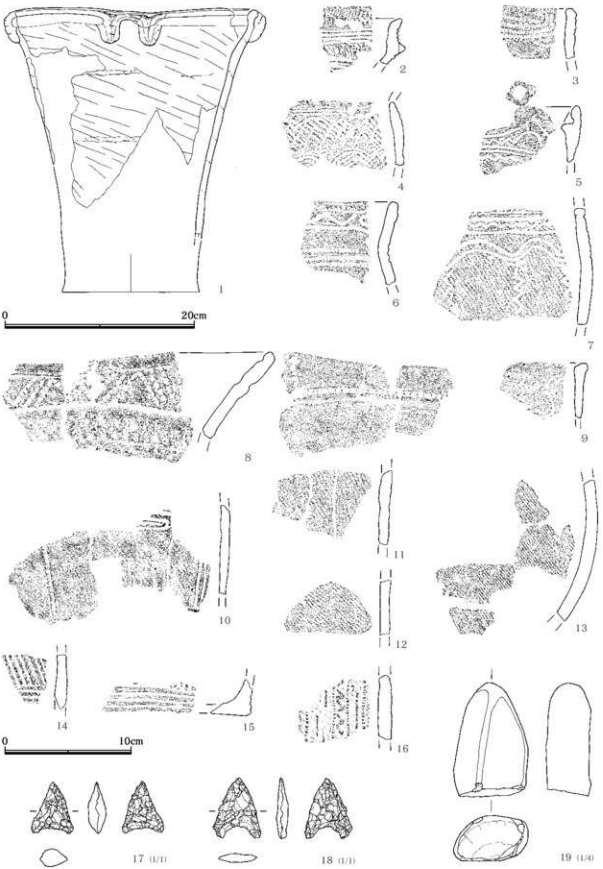
84区Ｗ－４グリッドに位置する。大小の礫が長軸約0.7ｍ、短軸約0.5ｍの楕円形の範囲に密集する形で分布している。下位には長軸約0.7ｍ、短軸約0.6ｍ、深さ約0.1ｍのほぼ楕円形の掘り込みが検出された。スタンプ形石器が１点出土している。

４号集石（第127図、ＰＬ20）

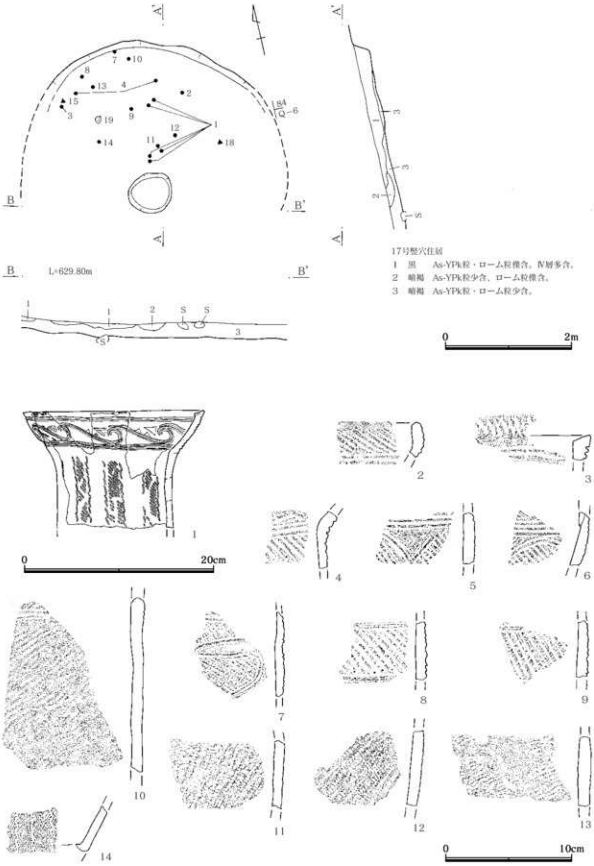
84区Ｕ－４・５グリッドに位置する。北側に大形



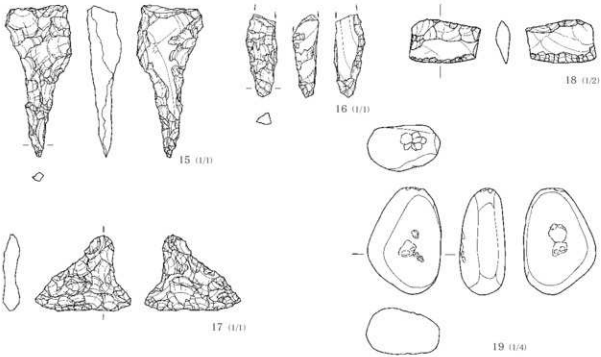
第118図　13号竪穴住居遺構



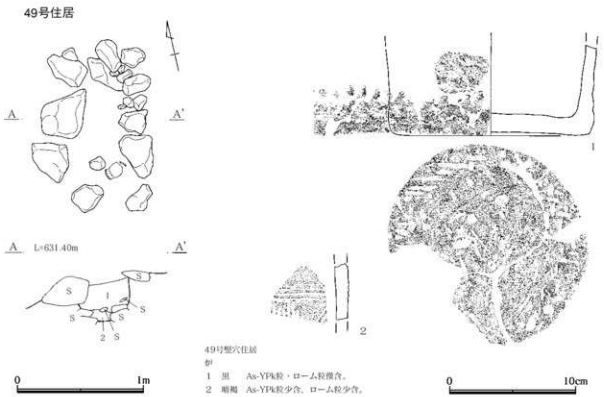
第119図　13号竪穴住居遺物



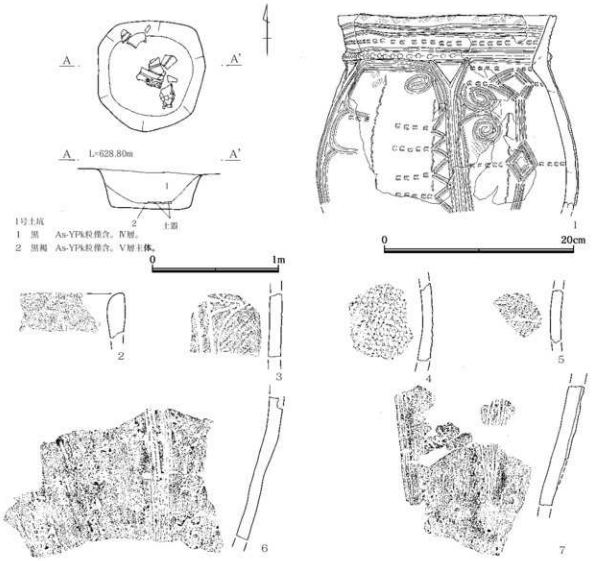
第120図　17号竪穴住居遺構・遺物（1）



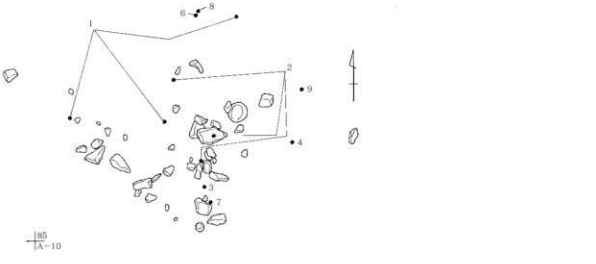
第121図　17号竪穴住居遺物（2）



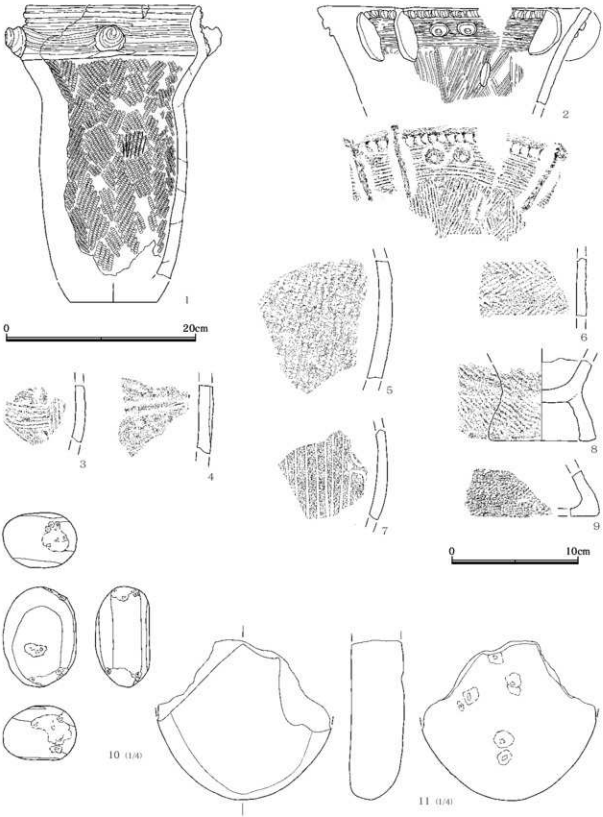
第122図　49号竪穴住居遺構・遺物



第123図　1号土坑遺構・遺物



第124図　10号集石遺構



第125図　10号集石遺物

の礫を持ち、大小の礫が長軸約1.0m、短軸約0.6mの楕円形の範囲に密集する形で分布している。下位には長軸約1.3m、短軸約1.0m、深さ約0.3mのほぼ長方形の掘り込みが検出された。

５号集石（第127図、ＰＬ21）

84区Ｔ５グリッドに位置する。長軸約1.1m、短軸約0.4mの範囲で、大形の礫を中心にほぼ東西の列で並ぶように分布している。

６号集石（第127図、ＰＬ21）

85区Ｇ・Ｈ－19グリッドに位置する。大小の礫が長軸約1.4m、短軸約0.9mの楕円形の範囲に密集する形で分布している。

８号集石（第127図、ＰＬ21）

85区Ｃ・Ｄ－14・15グリッドに位置する。大小の礫が長軸約4.8m、短軸約3.6mの楕円形の広い範囲にやや集中する形で分布している。南北にそれぞれ集中することから、あるいは二つの集石に分離が可能かも知れない。

９号集石（第128図、ＰＬ21）

84区Ｗ－９グリッドに位置する。大小の礫が長軸約0.9m、短軸約0.6mの楕円形の範囲に密集する形で分布している。

10号集石（第124・125図、ＰＬ21・38）

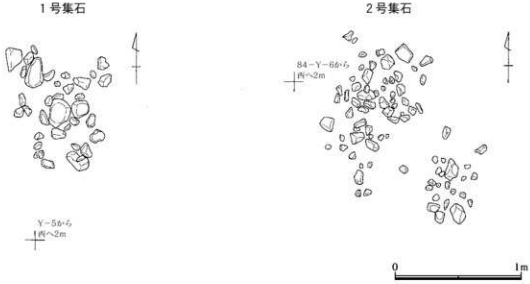
84区Ｙ－10グリッドに位置する。大小の礫が長軸約0.9m、短軸約0.6mの楕円形の広い範囲にやや散漫に分布している。遺物は縄文時代中期初頭の土器と敲石の機能を併せ持つ磨石と石皿が出土している。

11号集石（第128図、ＰＬ21・22）

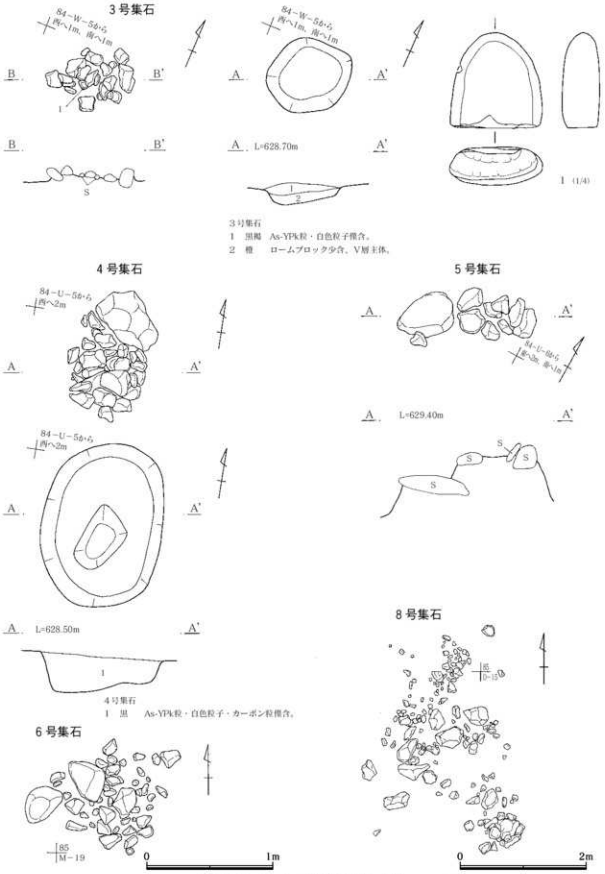
84区Ｘ－10グリッドに位置する。大形の礫を主体に、長軸約1.0m、短軸約0.6mの楕円形の範囲にやや集中する形で分布している。

13号集石（第129図、ＰＬ22）

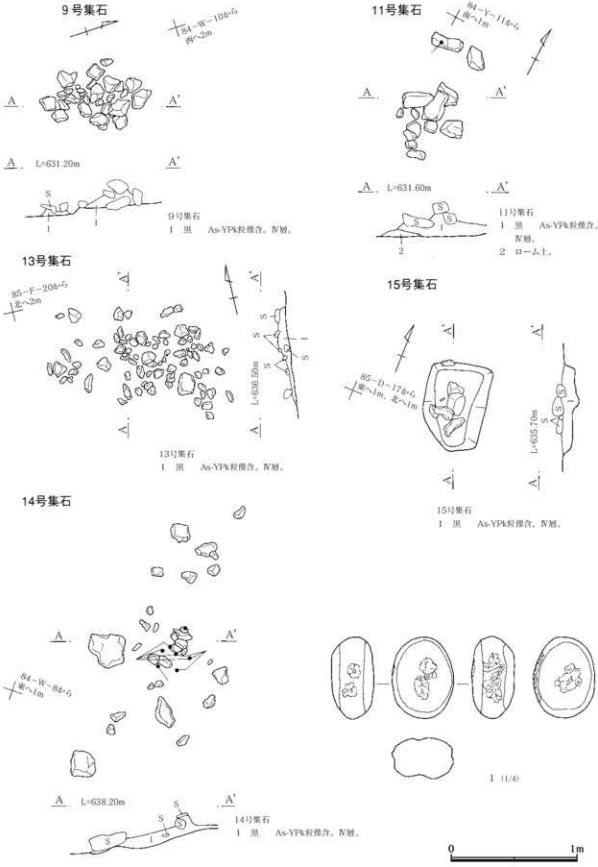
85区Ｅ－20グリッドに位置する。大小の礫が長軸約1.5m、短軸約0.9mの楕円形のやや広い範囲にやや集中して分布している。



第126図　１・２号集石遺構



第127図　３～６・８号集石遺構・遺物



第128図　9・11・13・14・15号集石遺構・遺物

14号集石（第128図、ＰＬ22・38）

84区Ｖ－17・18グリッドに位置する。大小の礫が長軸約2.4ｍ、短軸約1.1ｍの楕円形の広い範囲にやや散漫に分布している。遺物は数点の土器と１点のくぼみ石が出土している。

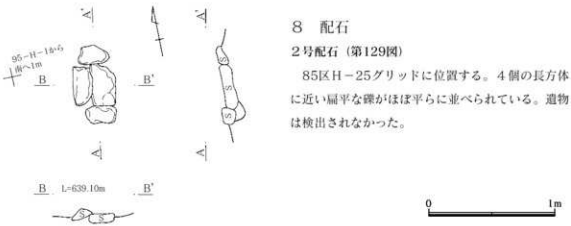
15号集石（第129図、ＰＬ22）

85区Ｃ－17グリッドに位置する。数個の礫がかたまっており、下位には長軸約0.7ｍ、短軸約0.5ｍ、深さ15cmのほぼ長方形の掘り込みが検出された。

８　配石

２号配石（第129図）

85区Ｈ－25グリッドに位置する。４個の長方体に近い扁平な礫がほぼ平らに並べられている。遺物は検出されなかった。



第129図　２号配石遺構

９　埋甕

２号埋甕（第130図、ＰＬ18）

85区Ａ－23グリッドに位置する。検出時点で既に底部部分のみの残存であった。掘り込みも僅かに検出されただけである。

第130図　２号埋甕

（2）遺構外出土遺物

楡木Ⅱ遺跡が占地する台地は、王城山南麓端に形成された南向きの狭小な平坦地で、その範囲は間口約100m、奥行きは200mほどしかない。周囲の丘陵部との比高は40mほどで、南側は崖状に落ちて吾妻川左岸の低位段丘に至る。

この平坦地では現在も豊富な湧水があり、おそらくその湧水が誘発した円弧すべりによって形成された平坦地であろう。遺跡では、確認可能な最下層で浅間草津黄色軽石層（As-YPk）の堆積までは確認されており、平坦地の形成は少なくともそれ以前に遡る。なお、この豊富な湧水こそが、古くからこの地を人々が繰り返し専有した理由ともなっていると考えられる。

1　遺物の出土状況

調査面積約18,000㎡のうち、縄文時代の遺構と遺物包含層はその南半部の東側寄りに集中した状態で確認された。遺跡のある平坦地は、南北方向に細長く伸びる傾斜地で、北から南側に向かってかなりの傾斜があり、降雨等による流水や土砂はこの傾斜に沿って南側へ落ちる。住居をはじめとする遺構の多くは、あたかもこれを避けるように、東側の丘陵端部に偏る傾向が認められた。遺物包含層からは、早期から中期前半の土器を中心に、若干の草創期後半、中期後半と後期の土器が出土しており、その分布状況は概ね遺構と同様の傾向が認められる。

縄文時代の遺物は、Ⅲ層の黒褐色土とⅣ層の暗褐色土、およびⅤ層の黄褐色土上面に包含されるが、概ね前期～中期の遺物はⅢ層下半からⅣ層上半に、草創期～早期の遺物はⅣ層下半からⅤ層上面にかけて包含される傾向が認められた。出土遺物の分布域は概ね遺構の分布範囲とその周囲に集中するが、一部は西側及び北側にも及んでいる。

なお、遺構の分布範囲と重なるものは遺構内出土土器との接合事例も多く、また早期初頭の遺構確認面は遺物の確認面より下位になる場合が多かったため、ここで扱う出土遺物は住居等の遺構の上層部に含まれていたものもかなり含んでいると考えてよいだろう。

2　草創期・早期土器の概要と分布

出土した草創期・早期土器の内訳は、草創期後半の第Ⅰ群土器が1点、早期初頭の第Ⅱ群土器が2,208点、早期前半の第Ⅲ群土器が1点、早期後半の第Ⅳ群土器が5点であり、第Ⅱ群土器が圧倒的主体を占める。ここでは集落が形成された時期にあたる第Ⅱ群土器を中心に、各時期の土器の分布状況を見てみよう（126頁表・第131図参照）。

草創期後半では、第Ⅰ群土器が早期集落から北西側に離れた95区K-1グリッドから出土している（第132図）。1点のみの出土であり、多くを語れないが、当遺跡には良好な水場があり、そのことが立ち寄る場所の一つとして選択された理由ではなかろうか。

早期初頭では、東側の丘陵端部に集落が形成される。この時期に該当する第Ⅱ群土器のグリッド別出土総量一覧と分布図を124頁表と第131図に示した。表では細別毎に点数を記載した。出土点数の粗密は各類別の比率に符号しており、各類別あるいは細別による分布状況の偏りは見受けられない。分布図では第Ⅱ群土器を一括して該当するグリッドに出土点数を記載した。遺物の分布は、遺構が密集する84区V～Y-7～14グリッドから85区A～C-7～14グリッドに集中し、一分はその南東側にも及んでいる。また、その北側にあたる84区V～Y-18～21グリッド付近にもう一つの分布域があり、さらに遺構密集域の西側及び94区にもわずかな散布が認められる。これらの範囲は、早期初頭集落の諸活動の範囲とその方向性を暗示しているように見える。

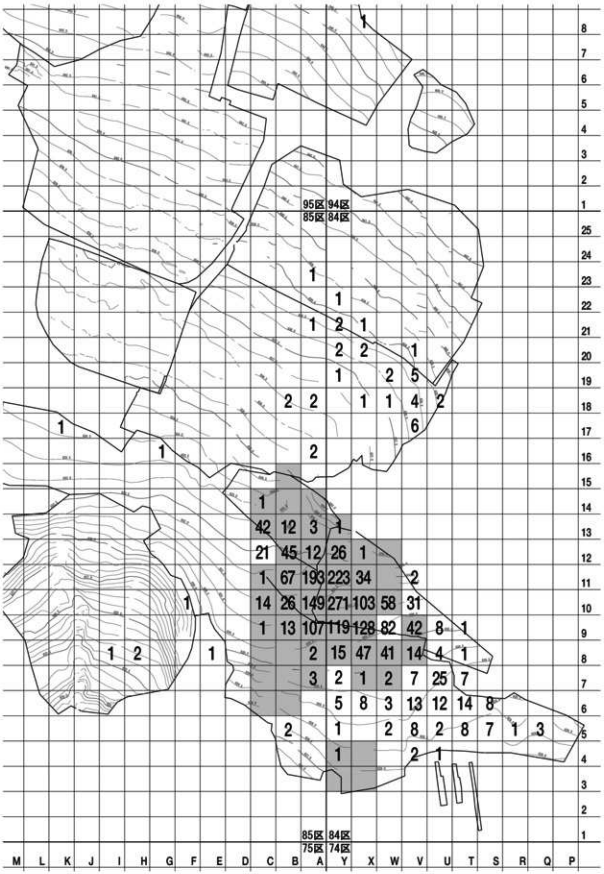
その後集落が移動した後、早期段階でこの集落が継続されることはなかったが、第Ⅲ群及び第Ⅳ群土器はいずれも早期初頭集落の中心域付近から出土しており、活動の際に立ち寄ることはしばしばあったのであろう。

檜木Ⅱ遺跡　縄文早期第Ⅱ群土器遺構外出土総量　一覧　　平成20年６月藤巻

＊１類は撚糸文系、２類は縄文系、３類は押型文系、４類は無文系、５類は稲荷原式、６類は判読不能を一括する。

区	グリッド	合計	1a	1b	1c	1d	2a	2b	3a	3b	3c	3d	3e	4a	4b	4c	5類	6類
84区	Q－5	3		3														
	R－5	1		1														
	S－5	7		3			1							2		1		
	S－6	8		3			2			1		1		1				
	T－5	8		2			1			1	1				1	2		
	T－6	14		3		1	2							1	1	5		1
	T－7	7			1		1							3	1	1		
	T－8	1														1		
	T－9	1				1												
	U－4	1														1		
	U－5	2					1									1		
	U－6	12		6		1			2					1	2			
	U－7	25		16		1	1							2	2	3		
	U－8	4		1			1									2		
	U－9	8		2	1									3	2			
	U－18	2						1						1				
	V－4	2		2														
	V－5	8		3												5		
	V－6	13		5		1	1								1	4	1	
	V－7	7		3		1	1	1								1		
	V－8	14		4		3	2	1			1				1	2		
	V－9	42		15		7	4	1						6	4	5		
	V－10	31		7		2	11	2	1	1	1		1		4	1		
	V－11	2				1	1											
	V－17	6		2			1	1						1		1		
	V－18	4				1	1	1						1				
	V－19	5		2				2						1				
	V－20	1												1				
	W－5	2					1											1
	W－6	3		2			1											
	W－7	2						1									1	
	W－8	41	1	19		2	6	1			2		1	4		5		
	W－9	82	1	28		5	24	6	1				1	4	6	4	2	
	W－10	58		23	2	6	7	2	1	1	1		1	4	1	9		
	W－18	1		1														
	W－19	2		1												1		
	X－6	8		6			1		1									
	X－7	1				1												
	X－8	47		20	2	5	6	3			1			2	4	3	1	
	X－9	128		59	2	12	16	13		1	1	2		4	4	12	2	
	X－10	103	1	53	3	10	9	4		1	5			7	2	8		
	X－11	34		20			9	1			1			1	1	1		
	X－12	1														1		
	X－13	0																
	X－18	1		1														
	X－20	2		1										1				
	X－21	1															1	
	Y－4	1						1										
	Y－5	1		1														
	Y－6	5		4										1				
	Y－7	2		2														

区	グリッド	合計	1a	1b	1c	1d	2a	2b	3a	3b	3c	3d	3e	4a	4b	4c	5類	6類
	Y−8	15		6		3	3	1								2		
	Y−9	119	1	52		9	13	6	1	3		11		5	2	4		12
	Y−10	271	2	132	2	16	52	18		3	9	7		2	7	10	2	9
	Y−11	223	1	104	1	5	51	10	2	3	6	3		3	7	18	7	2
	Y−12	26		15			5	3						1	1	1		
	Y−13	1		1														
	Y−19	1																1
	Y−20	2		2														
	Y−21	2												1		1		
	Y−22	1													1			
85区	A−7	3		1			1											1
	A−8	2						1								1		
	A−9	107	1	57		6	13	9			1	4		4	1	9	1	1
	A−10	149	4	63		9	31	9	2	5	2		1	1	5	7	1	9
	A−11	193	2	58	1	10	47	18		1	5		2	2	9	18	5	15
	A−12	12		1			6	1		1	1							2
	A−13	3		2										1				
	A−16	2		1			1											
	A−18	2		1			1											
	A−21	1						1										
	A−23	1		1														
	B−5	2		2														
	B−9	13	1	6			2					1				3		
	B−10	26	1	13			5		1	1		1		2		2		
	B−11	67	2	20	1	1	15	8				1		1	3	14	1	
	B−12	45		19	3	2	8	2						2	1	5		3
	B−13	12		8			3									1		
	B−18	2		1		1												
	C−9	1							1									
	C−10	14		8	2	2	1		1									
	C−11	1					1											
	C−12	21		11			2	2	1					4		1		
	C−13	42		16		1	2	10	1					5	2	5		
	C−14	1					1											
	E−8	1													1			
	F−10	1		1														
	G−16	1		1														
	H−8	2		1										1				
	I−8	1												1				
	K−17	1		1														
	P−18	1		1														
94区	X−8	1		1														
	表採	2					1					1						
	G無し・不明	49		20	3	4	14	6	1							1		
	合計	2208	18	951	24	130	391	147	17	23	38	32	7	88	77	183	25	57
	類別合計	2208		1123			538				117				348		82	



第131図　縄文草創期・早期上器　グリッド別分布図（トーン部分は早期遺構が存在するグリッドを示す）

３　草創期・早期土器の内容

まず出土土器の分類を示し、群毎に説明したい。

第Ⅰ群土器　草創期後半

１類　表裏縄文土器

第Ⅱ群土器　早期初頭土器群

１類　撚糸文系土器群

　　ａ、密接した撚糸文を施すもの

　　ｂ、間隔の開いた撚糸文を施すもの

　　ｃ、格子目状撚糸文を施すもの

　　ｄ、条痕文を施文したもの

２類　縄文系土器群

　　ａ、単節縄文を施文したもの

　　ｂ、無節縄文を施文したもの

３類　押型文土器

　　ａ、楕円文を施すもの

　　ｂ、山型文を施すもの

　　ｃ、格子目文を施すもの

　　ｄ、市松文を施すもの

　　ｅ、平行線文を施すもの

４類　無文土器

　　ａ、胎土に結晶片岩を含むもの

　　ｂ、胎土に金雲母を含むもの

　　ｃ、胎土に岩片を含み、砂粒が少ないもの

　　ｄ、胎土に石英等の砂粒を多量に含むもの

５類　稲荷原型無文土器

６類　類別不能の一群を便宜的に一括する

第Ⅲ群土器　早期沈線文系土器群

１類　竹ノ内式土器

２類　中部系沈線文土器

第Ⅳ群土器　早期条痕文系土器群

（１）第Ⅰ群土器（第132図１）

１点のみの出土である。表裏に単節縄文を施文した薄い作りの土器で、胎土に繊維は含まない。使用された縄文は２段単節ＬＲで、表面には縦位に、裏面には横位に施文している。土器の厚さは３㎜前後で薄く、器面には弱い凹凸が認められる。胎土は細砂を微量に含み、焼成は良好で緊密で堅い。

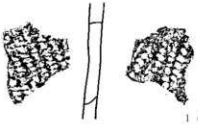
（２）第Ⅱ群土器（第134図２～第157図25）

本県では撚糸文土器を草創期に、押型文土器を早期に含める報告例が一般的だが、当遺跡では両土器が住居等から共伴した状態で出土しており、これらを群別することはできないことから、ここでは便宜的に早期初頭とした。

第Ⅱ群土器は総数2,208点が出土しており、内訳は１類が1,123点、２類が538点、３類が117点、４類が348点、５類が25点、６類が57点である。１類の撚糸文系土器群が総数の約半分を占め、次いで２類の縄文系土器群が残りの約半分を占め、さらに４類の無文土器、押型文土器の順になる。

器形はいわゆる砲弾形の深鉢で、その他の器種は出土していない。口縁部形態は類によって特徴があり、直線的に立ち上がるもの、大きく外反するもの、希に内湾するもの等がある。底部は直線的に尖るものと丸みをもつものとがあり、乳房状の突起を持つものは少ない。

本群土器は胎土に特徴があり、各類毎に特徴的な混和材が加えられている。一つは結晶片岩を加えるもので、砂粒は比較的少なく、１類土器の多くが該当する。もう一つは金雲母を加えるもので、石英をはじめとする砂粒を多く含み、２類と３類の多くがこれに該当する。そのほかに、各種岩片を含み砂粒が少ないものと、石英等の砂粒を多く含むものとがあり、４類の無文土器はこの４種で分類した。このうち、砂粒が少ないものは結晶片岩を含むものに類似し、石英等の砂粒を多く含むものは、金雲母を含むものに近い印象を受ける。なお、５類は砂粒が少ない一群に属している。



１ (1/1)

第132図　遺構外遺物（１）

１類　撚糸文系土器群（第134図２～第144図211）

総数1,123点が出土しており、そのうち210点を図化した。文様要素をもとに、さらに４細分した。

１類ａ（第134図２～13）

密接した撚糸文を施すもので、総数は18点で数は少ない。口縁部がやや開くものが多く、口唇部は丸頭状で外側がやや肥厚するものもある。２・３は細い撚糸を密接して巻いた原体を使用しており、本遺跡では最も密接する部類である。胎土は、２・３・７・８が砂粒を多く含むもの、４～６は岩片を含み砂粒が少ないもの、９～13は結晶片岩を含むものである。なお、２と11は補修孔が認められる。

当初は夏島式土器を念頭に分類したが、１類ｂとの違いは明確ではない。ここでは夏島式新段階～稲荷台式古段階に比定しておきたい。

１類ｂ（第134図14～第142図165）

間隔の開いた撚糸文を施す一群で、総数755点が出土している。そのうち、胎土に結晶片岩を含むものが439点、金雲母を含むものが86点、その他が230点である。１類のなかで主体をなす一群で、その多くは稲荷台式土器に比定されよう。

口縁部は直立ぎみにやや開くものと大きく外反するものとがあり、前者は口唇部が円頭状で外側がやや肥厚するものが多いのに対し、後者では肥厚するものが少ない。また、前者では口唇部を入念に研磨するものが多い。

撚糸文の施文は、器面が乾いてから平滑にし、その後に施文したものが多い印象を受ける。撚糸文の圧痕や縄の節が不明瞭なものが多い点は、そのことを示している。また、撚糸文の施文後に器面を研磨したものも見受けられる（98～106）。文様の施文は、体部全体に及ぶものと、帯状施文により空白が生ずるものとがあり、撚糸文が垂直に走行するものと斜走するものとがある。また、斜走するものでは走行が微妙に蛇行したり、途中で方向を変えるものも多く見受けられる。なお、撚糸文の施文は体部のみを原則とするが、65号住居２では口縁部内面に施文が認められ、６・７号住居９と12号住居１および36・37号住居１では口唇部に施文が認められる。この点については後で触れたい。

撚糸文の原体は、１段Ｒと１段Ｌが認められるが、Ｒ縄を使用したものが多い。第140図140は２段ＬＲ縄を使用したもので、当遺跡では唯一のものである。また、142～154は１段Ｌ縄のいわゆる「撚り戻し」を使用したもので、特異な印象を与える一群である。おそらくＬ縄をＬ方向に巻いたものであろうが、意図的に効果をねらっている可能性もあり、注意が必要であろう。

原体縄の太さは一般的なものが主体であるが、かなり細いものも認められる。第139図108～126にその代表例を示した。特に115～126は極細のもので、遺構出土のものも含めて数個体ありそうだ。県内平野部の遺跡では見かけない一群である。

胎土は、混和剤に結晶片岩を含むものと金雲母を含むものとがあり、本類では前者が主体を占める。また、口縁部が直立して口唇が円頭状の一群は結晶片岩を含むものが多く、口縁部が大きく外反する一群は金雲母を含む傾向が認められる。

14～36は、口縁部が直立ぎみに開き、口唇部が円頭状で外側にやや肥厚する一群で、このうち14～32は胎土に結晶片岩を含む。垂直走行の撚糸文を全面に施文するものが多い。37～42・141は口縁部が外反する一群で、このうち39・40以外は胎土に金雲母を含む。43～82は撚糸文を全面に施文する胴部片で、施文は垂直走行のものが多く、胎土に結晶片岩を含むものが多い。48には補修孔が認められる。

第138図83～97は撚糸文を帯状に施文する一群で、走行が蛇行するものや、方向がまちまちとなるものが多い。90は外面の一分が剥落しているが、剥落部にも撚糸文の施文が認められる。

98～106は撚糸文施文後に研磨が施された一群で、胎土に結晶片岩を含むものが多い。107は撚糸の間隔が広い土器で、胎土に金雲母を含む。

第139図108～126は細い撚糸を使用した一群で、施文は蛇行するものが多く、116～126では空

白を置いて帯状に施している。また、118では口縁部付近に横位の施文が認められる。

第140図127～139は節の大きな撚糸を使用する一群である。142～154はL縄を使用した「撚り戻し」の一群で、口縁部片はいずれも外反している。

第142図155～164は本類の底部である。

1類c（第144図199～211）

格子目状撚糸文を施すもので、総数24点が出土している。そのうち、胎土に金雲母を含むものが23点、その他が1点で、結晶片岩を含むものはない。ちなみに、ここに示した13点はいずれも胎土に金雲母を含む。

口縁部が大きく外反する深鉢で、図示した口縁部片3点は、いずれも口唇部が角頭状を呈する。使用された原体が判読できるものは少ないが、205・206はR縄、209・211はL縄を使用している。施文は、縦位に帯状施文するものが多く、199・202～204では施文間の空白が認められる。また、206～211では施文の乱れも看取される。

1類d（第142図165～第144図198）

条痕文を施すもので、総数209点が出土している。そのうち、胎土に結晶片岩を含むものは110点、金雲母を含むものが34点、その他は65点である。

165～182は、絡条体原体を引きずって施文したと思われる一群で、口唇部が丸頭状で外側が肥厚するもの（165～168・170）、口唇部が大きく外反するもの（169）、口唇部が内削ぎ状で尖るもの（171・172）がある。このうち、169は口唇部にも条痕文の施文が認められる。文様は縦位に施文されるものが多く、168のように全面に施文するものと、165～167・169・181のように空白を設けて帯状に施文するものとがある。182は横位に施文された希な例である。胎土はいずれのものもあり、特に偏りは見受けられない。なお、165には補修孔が認められる。

183～198は硬い施文具で条痕文を施したと思われる一群で、焼締まって堅固なつくりのものが多い。文様の施文は、前者と同様に縦位に均質に施すもの（184～189）と、重複しながら任意方向に全面施文したもの（190～198）とがある。183は唯一の口縁部資料で、口唇部は丸頭状で、弱く内湾する口縁部に横位および斜位の条痕文が施される。また、189には深く強い横位の沈線が認められる。胎土は、結晶片岩を含むものが多く、他に金雲母を含むものが5点、砂粒を多く含むものが1点ある。

なお、この一群は沈線文系土器群以後の条痕文系土器に類似するが、内面に施文が認められないこと、胎土に繊維を含むものがないこと、土器の作りや胎土が本群土器と一致していること等を勘案し、本類に含めた。

2類　縄文系土器群（第145図212～第152図344）

総数538点が出土しており、そのうち133点を図化した。長野県では表裏縄文土器とされる一群で、押型文土器と共伴する土器群として知られている。当遺跡出土の本類土器は、口縁部の形態と文様施文が特徴的で、縄文はしっかり撚った細身の原体を使用したものが多い。単品で出土した場合は関東の井草式土器との区別が難しい。当遺跡でも最後までその判断に苦慮したが、口唇部文様帯の違いと口縁部内面施文帯幅の違いなどから、長野県に分布する表裏縄文系土器群との認識に至った。なお、胴部片は前期後半代の土器との区別が難しく、一部に判別ミスがあるかもしれない。

本類には単節縄文と無節縄文が使用されており、縄文が縦走するもの、斜走するもの、横走するもの、羽状を構成するもの等が認められる。表裏縄文系土器群では、縄文の走行を優先して分類することが多いが、当遺跡出土土器は細片が多く、傾き等の判定が難しいものも多いこと、器面の劣化したものが多いことなどの理由から、単節と無節の違いと比率を明確にすることを第一義とし、これらを2細分した。

2類a（第145図212～第149図304）

単節縄文を施文したもので、総数391点が出土しており、2類bの2倍以上の点数が出土している。胎土は、結晶片岩を含むものが7点、金雲母を含む

ものが316点、その他が68点で、金雲母を含むものが圧倒的多数を占める。

口縁部は大きく外反するものが多い。縄文の施文は、口唇部と口縁部内面に及ぶものが多く、それらは口唇部が角頭状となるが、口唇部に施文のないものは丸頭状あるいは先細り状となるものもある。

器面調整は、当遺跡の場合は撫でが一般的で、裏面に横方向の撫で痕をとどめるものや、指頭痕を残すものもまま認められる。

原体は、単節ＲＬとＬＲとが使用されているが、ＲＬがやや優勢で６割以上が該当する。外面の施文は縦走、斜走、横走、羽状構成の他にランダムなものもあるが、口唇部および内面の施文は横位施文による斜走縄文に限られる。当遺跡では口縁部内面の施文幅が３～５cmに及ぶものが多く、その場合は縄文帯２帯程度の施文が一般的である。

なお、当遺跡では内面全体に縄文の施文が認められるものは２点のみである。

212～240はいわゆる縦走縄文を施す一群である。212～221の口縁部は、いずれも口唇部に縄文の施文が認められる。212・214・217・220・221では口縁部外面の１帯目に縄文を横位施文し、以下を縦位施文としている。212では一部に羽状縄文が認められる。口縁部内面の施文帯幅は広いものが多いが、215・218・220のように内面に施文がないものもある。胴部片では、225～228で条の走行に変化が見られる。

241～274は斜走縄文を施す一群で、外面の施文はほとんどが縦位施文である。241～248は、口唇部と口縁部内面にも縄文が施文されるもので、内面の施文幅は広いものが多い。241・245には補修孔が認められる。249は口唇部に縄文が施文されるが、口縁部内面には施されない。250～257は外面のみに縄文が施されるもので、口唇部は丸頭状あるいは先細り状となるものが多い。254には補修孔が認められる。

なお、胴部片では、258と264は内面全体に縄文の施文が認められた。当遺跡では希な事例である。

276～282は横走縄文を施す一群で、276と277には口唇部と口縁部内面に縄文が施される。また、276には補修孔が認められる。

283と284は縄文をランダムに施文する一群である。283は口縁部が直線的に開くもので、口唇部と口縁部内面に縄文は施されない。

285～293は羽状縄文が施文された一群である。縄文はいずれも同一原体を縦横に交互に施文して羽状を構成しており、285・287・288・290は縦羽状、289・293は横羽状、286・291・292は菱形を構成するものと思われる。

第149図294～304は本類の底部である。丸みをもつものと、直線的に尖るものとがある。

２類ｂ（第150図305～第152図344）

無節縄文を施文するもので、総数147点が出土している。胎土は、結晶片岩を含むものが6点、金雲母を含むものが114点、その他が27点であり、２類ａと同様に金雲母を含むものが圧倒的多数を占めている。口縁部形態や文様施文等の特徴も２類ａと共通している。使用された原体はＲとＬとがあり、Ｒが圧倒的に多様されている。

305～317は縦走縄文が施文される一群である。305・306・309～311は口唇部と口縁部内面に縄文が施文される一群で、305・306では内面の縄文帯幅が確認できる。307・308は外面のみに縄文が施されたもので、口縁部の外反も弱い。312は口縁部に山形の小突起をもつ特異な土器で、口唇部に縄文が施文されるが、内面には施されない。

318～322・324～337は斜走縄文が施文された一群である。322は外面のみの施文、328は外面と口唇部のみの施文で、その他は口唇部と口縁部内面に縄文が施文されている。また、318～321は外面の縄文が横位施文であり、その他は縦位施文となる。胴部片では、337は内面に縄文が施文されている。323は横走縄文が施文されたもので、内面に縄文は施文されていない。

338・339は羽状縄文を施すもので、いずれも同一原体を縦横に施文して羽状縄文を構成している。

338は口唇部と内面に縄文が施文されている。

340～344は本類の底部である。底部形態が丸みをもつもの、直線的に尖るもののほかに、先端が乳房状に尖るものが認められる。

3類　押型文土器（第152図345～第153図389）

総数117点が出土しており、そのうち45点を図化した。117点のうち、胎土に結晶片岩を含むものが2点、金雲母を含むものが96点、その他が19点で、金雲母を含むものが圧倒的多数を占めている。なお、胎土に繊維を含むものはない。

口縁部は大きく外反するものが多い。文様の種類は5種類認められたが、異種文様が施文されたものは確認されていない。施文は、空白をおいて帯状施文するものと密接施文するものとがあり、量的には後者が多い。以上のことから、出土した押型文土器は概ね樋沢式段階に比定されるものと思われる。

以下、文様毎に報告する。

3類a（345～359）

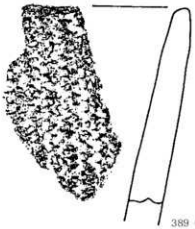
楕円文を施すもので、総計17点が出土しており、そのうち15点を示した。345は外反する口縁部片で、口唇部は丸頭状で外側がやや肥厚する。文様は、肥厚部無紋帯下に縦位に施し、口唇部にも横位に施文している。口縁部内面には施文されない。346～358の胴部片では、縦位施文を基本に全面に密接施文している。359は特徴的な細長い楕円文で、両側に空白があることから、縦位の帯状施文であろう。

3類b（360～368）

山形文を施すもので、総計23点が出土しており、そのうち9点を示した。いずれも細片であり、施文が不鮮明で判然としないものもあるが、360～362・366は横位方向、363・365・367は縦位方向に施文しており、いずれも密接施文したものと思われる。368は平行線の中に山形文を刻み込んだ特異な原体のもので、当遺跡ではこれ1点のみの出土である。

3類c（369～376・378）

格子目文を施したもので、総計38点が出土しており、そのうち9点を示した。369は大きく外反した口縁部で、口縁部に無紋帯を置いて、体部に縦位密接施文している。その他の胴部片も縦位に密接施文したものが多いが、374は空白部を置いた帯状施文となっている。



第133図　遺構外遺物

3類d（377・379～384）

市松文を施すもので、総数32点が出土しており、そのうち7点を示した。小片が多いが、施文は横位と縦位とがあり、空白が認められるものはないことから、全面に密接施文したものであろう。

3類e（385～388）

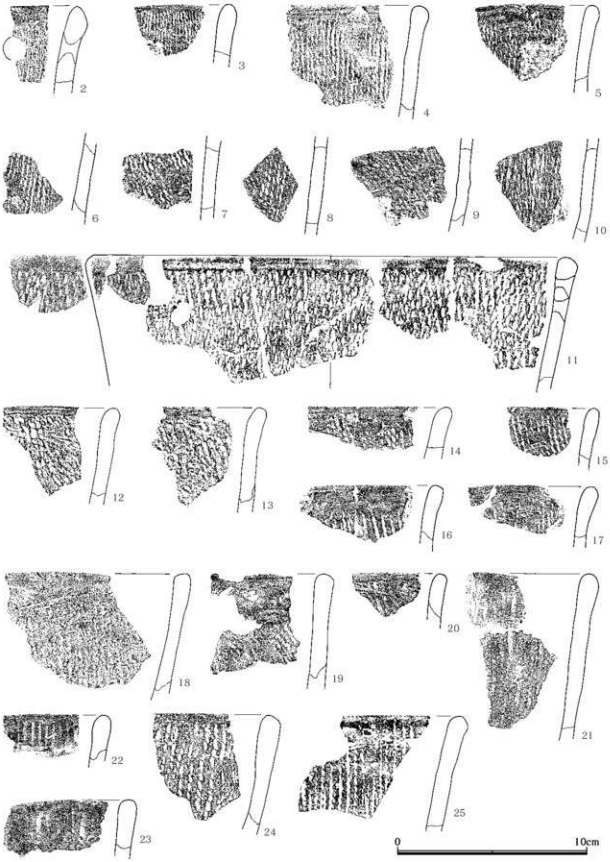
平行線文を施すもので、総数7点が出土しており、そのうち4点を示した。いずれも胴部片で、縦位に密接施文している。

なお、389は当初押型文土器に分類したもので、その後詳細に観察したが、施文原体がわからない。

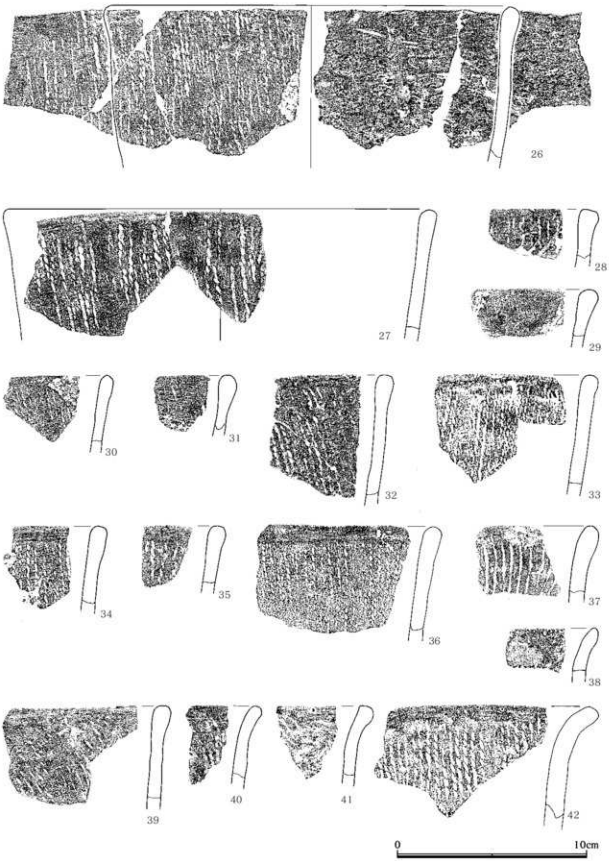
ここに原寸の図を示す（第133図）。一見すると、押型文か縄文を重複して施したようにも見えるが、縦位の棒状の凹みが一定間隔で並んでおり、あるいは植物の茎等の自然物を使用している可能性があるかもしれない。

4類　無文土器群（第153図390～第156図451）

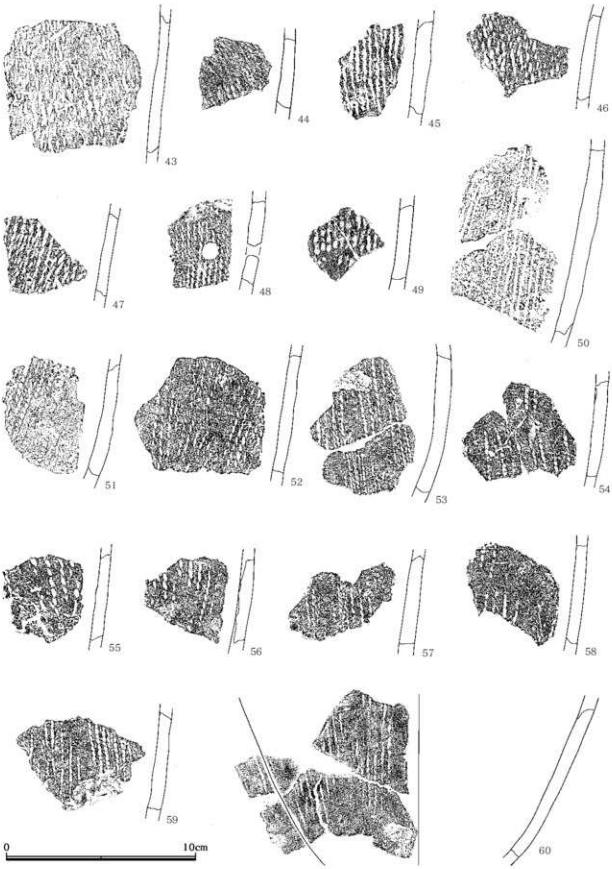
総数348点が出土しており、そのうち62点を図化した。本類は便宜的に胎土の混和材で3細分したが、その内訳は結晶片岩を含むものが88点、金雲母を含むものが77点、その他が183点であった。



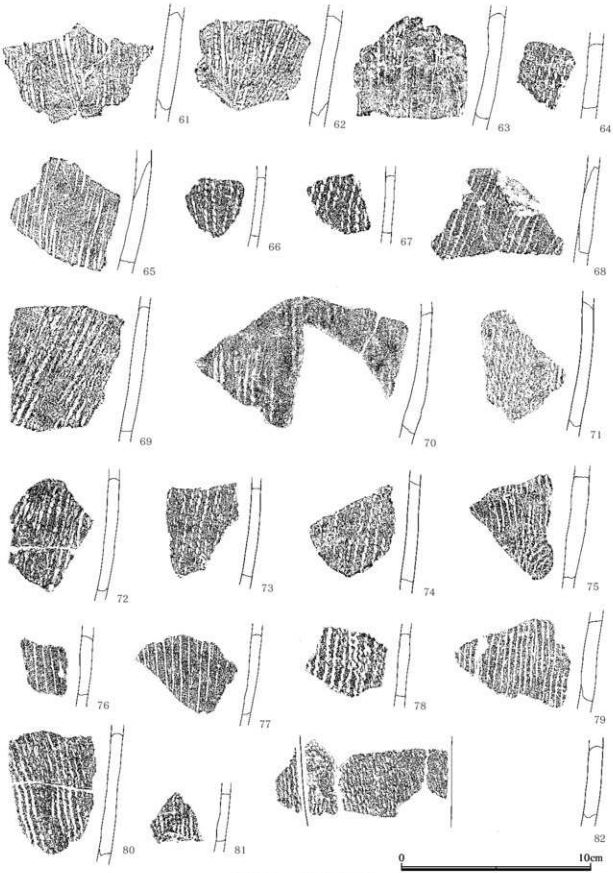
第134図　遺構外遺物（2）



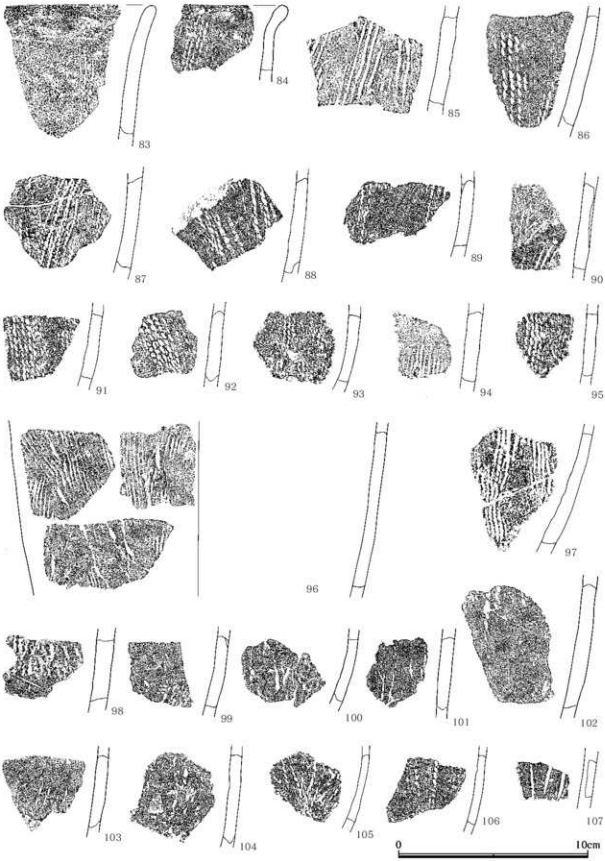
第135図　遺構外遺物（3）



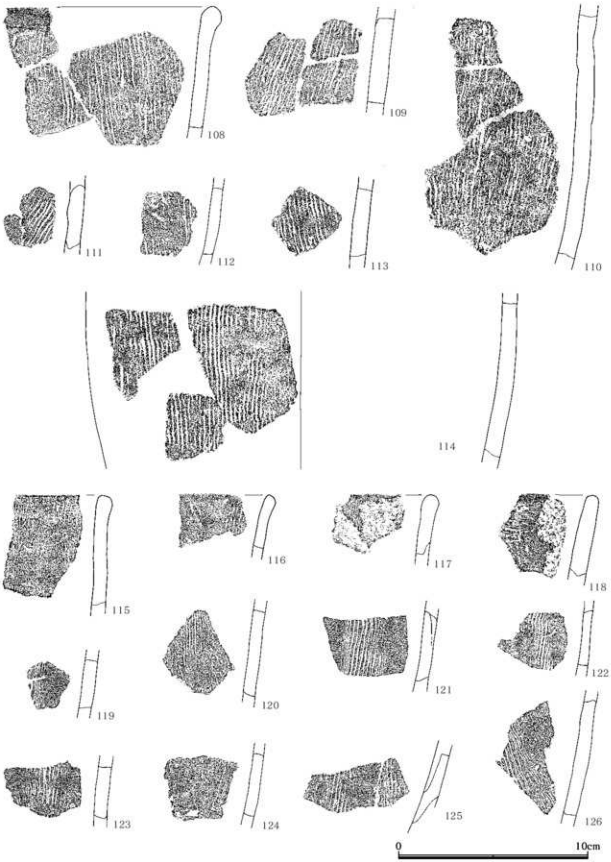
第136図　遺構外遺物（4）



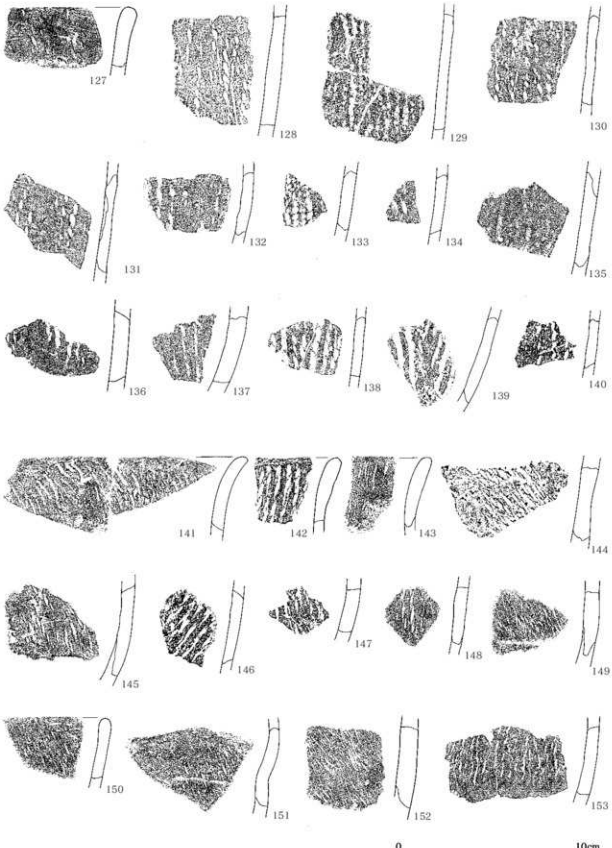
第137図　遺構外遺物（5）



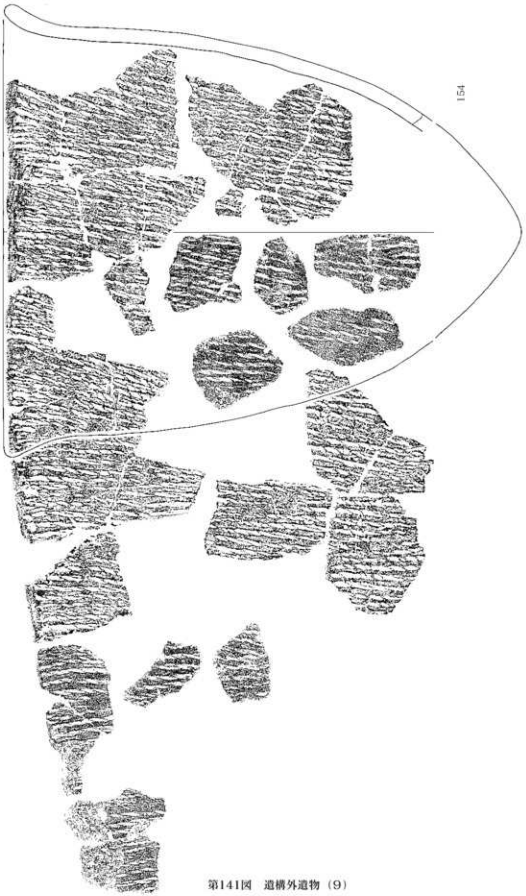
第138図　遺構外遺物（6）



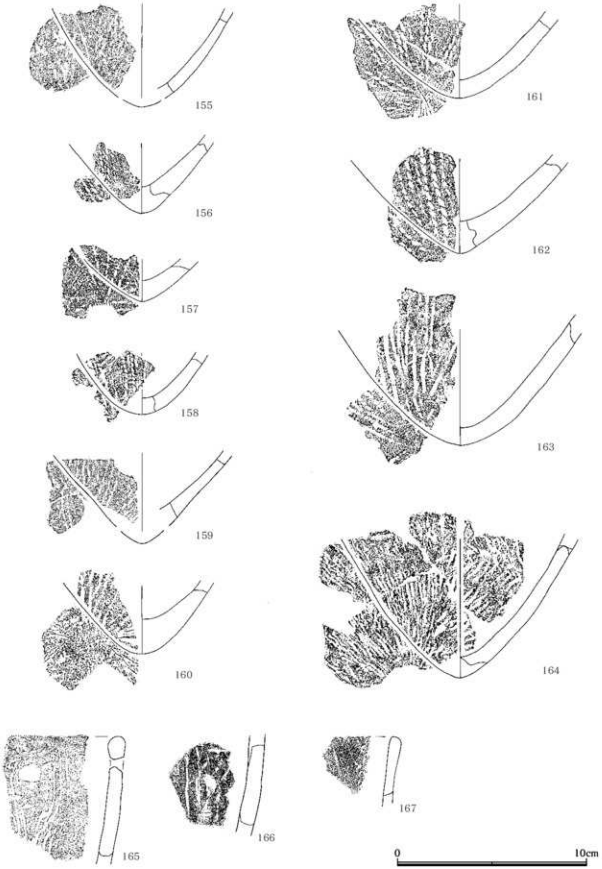
第139図　遺構外遺物（7）



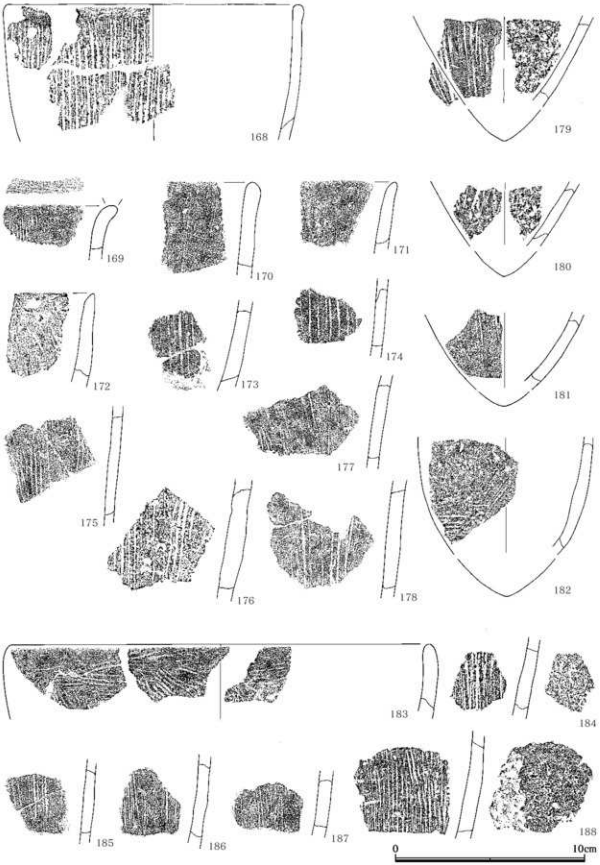
第140図　遺構外遺物（8）



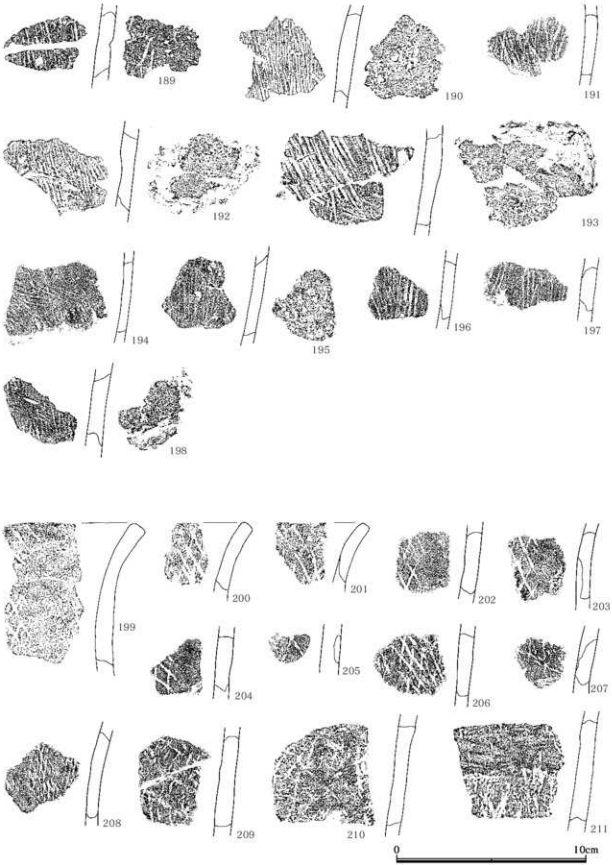
第141図　遺構外遺物（9）



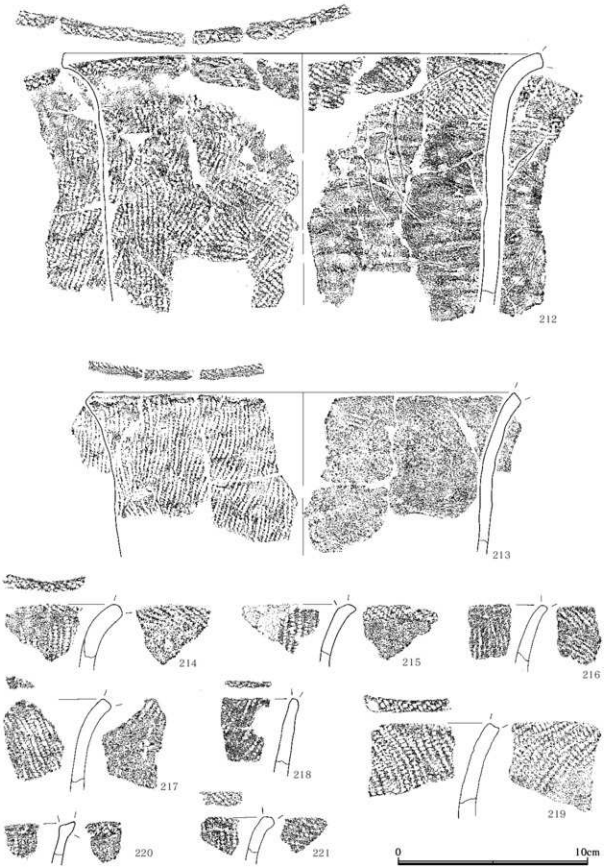
第142図　遺構外遺物（10）



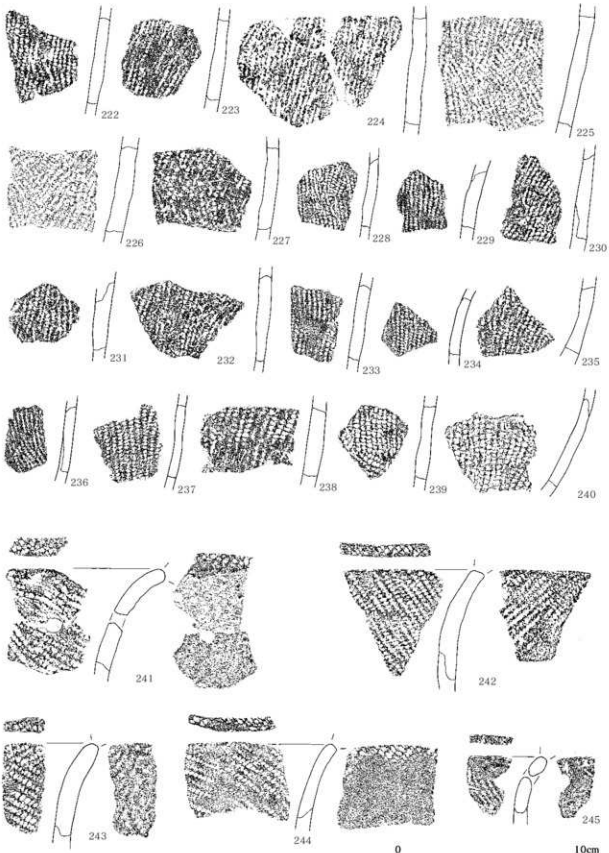
第143図　遺構外遺物（11）



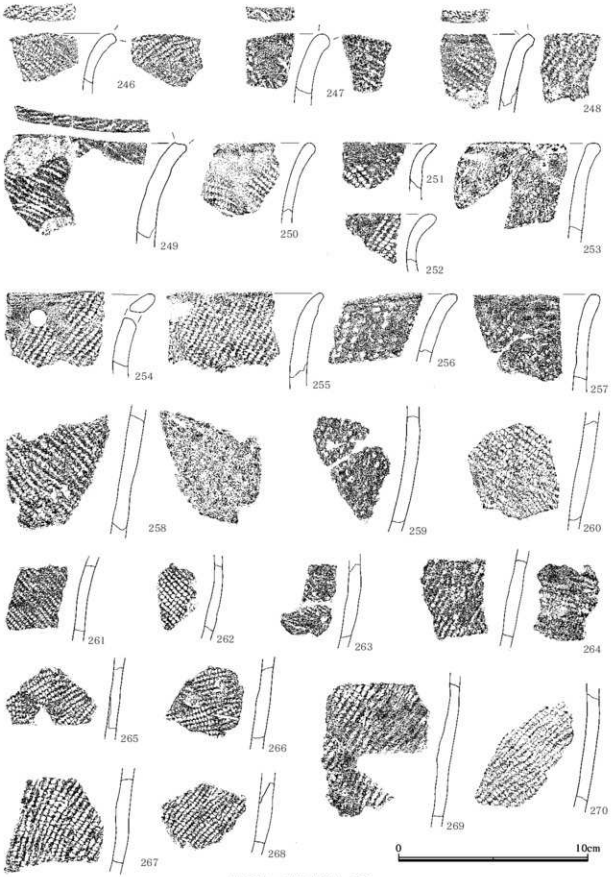
第144図　遺構外遺物（12）



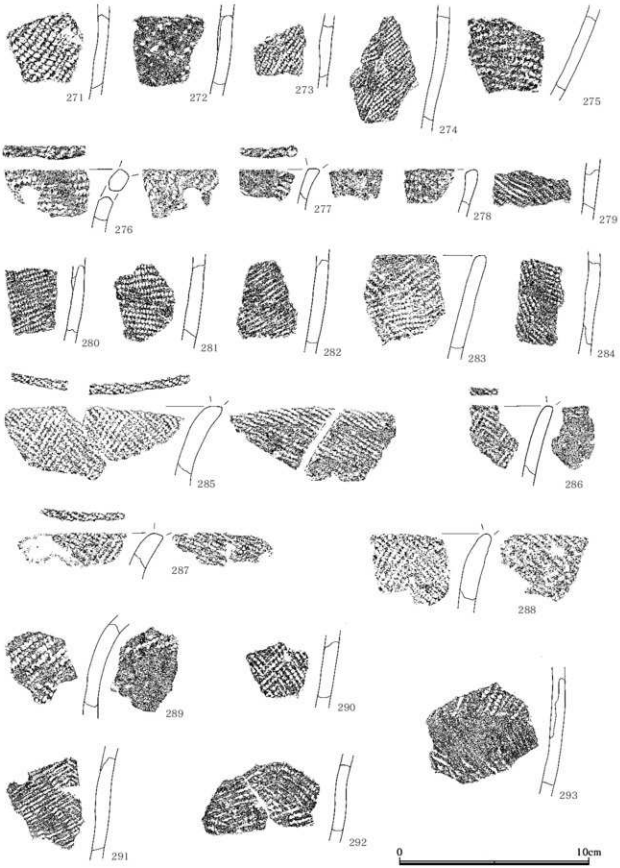
第145図　遺構外遺物（13）



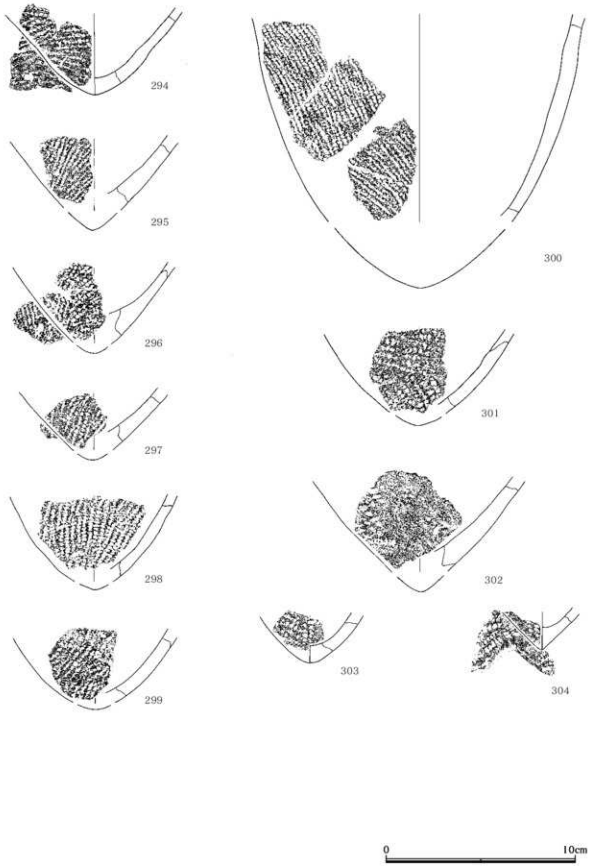
第146図　遺構外遺物（14）



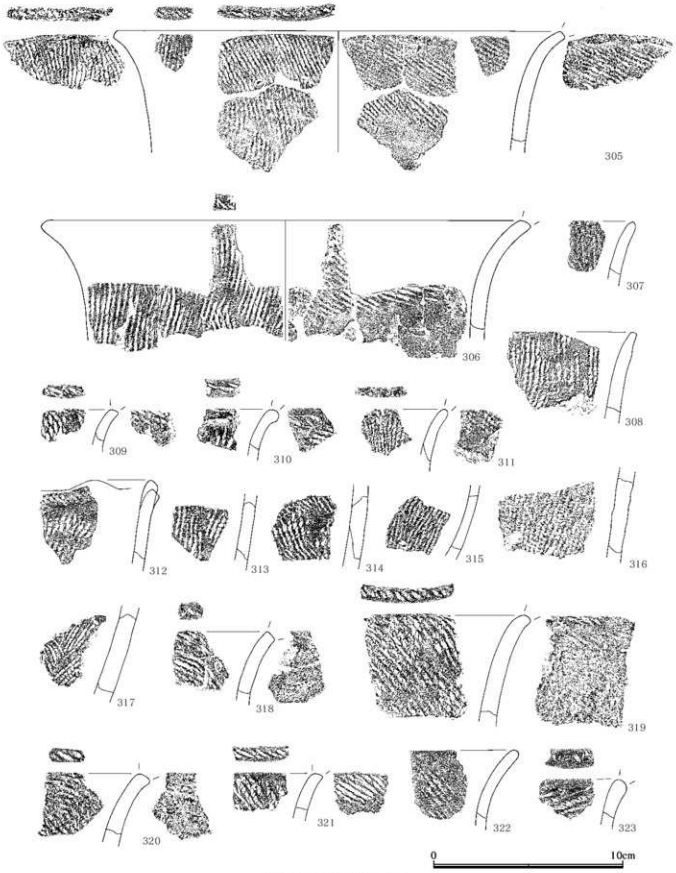
第147図　遺構外遺物（15）



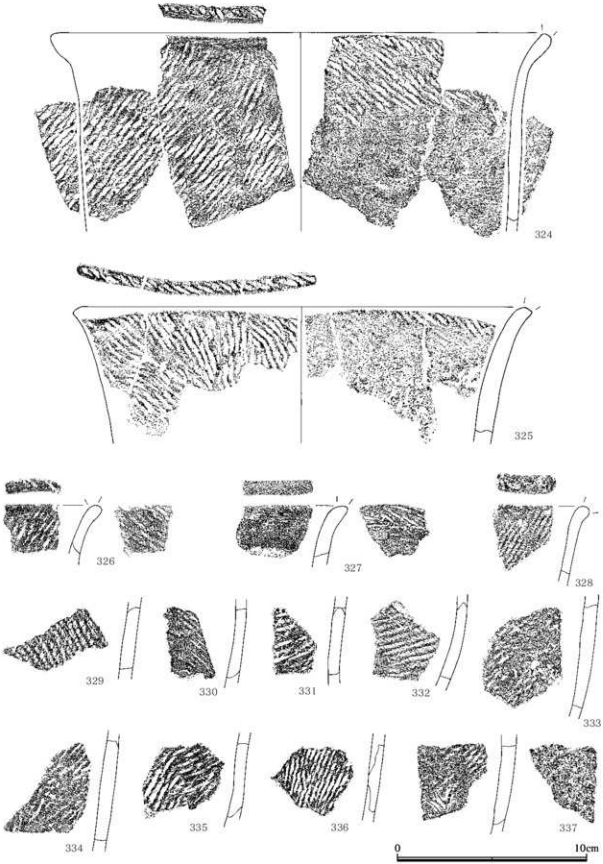
第148図　遺構外遺物（16）



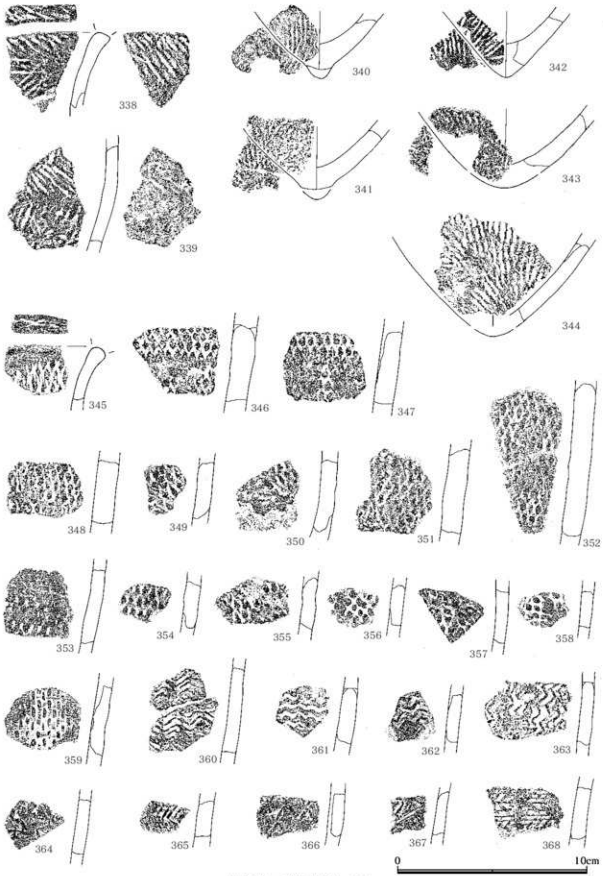
第149図　遺構外遺物（17）



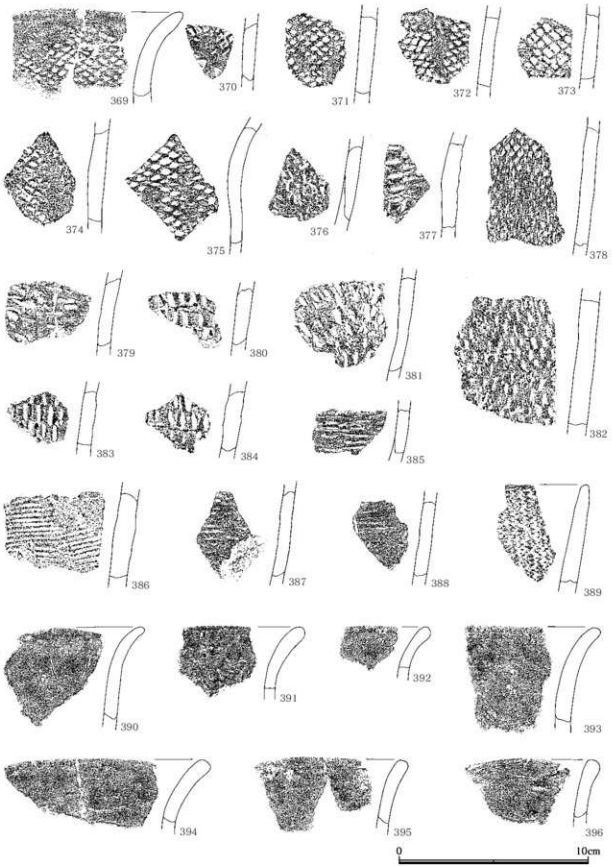
第150図　遺構外遺物（18）



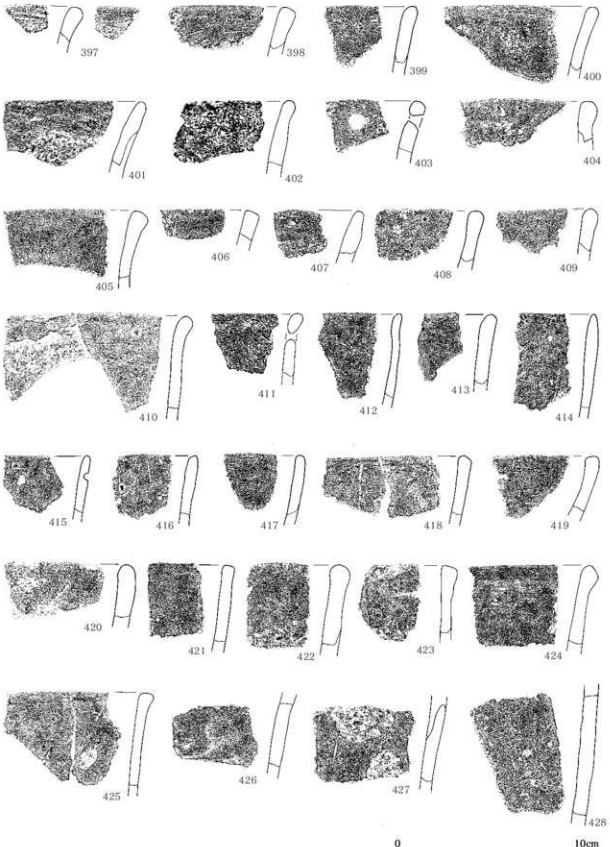
第151図　遺構外遺物（19）



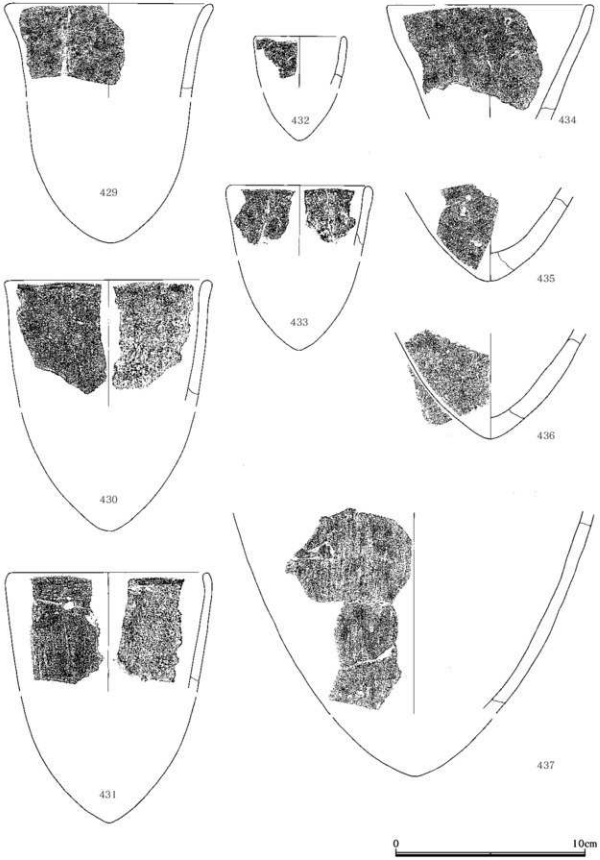
第152図　遺構外遺物（20）



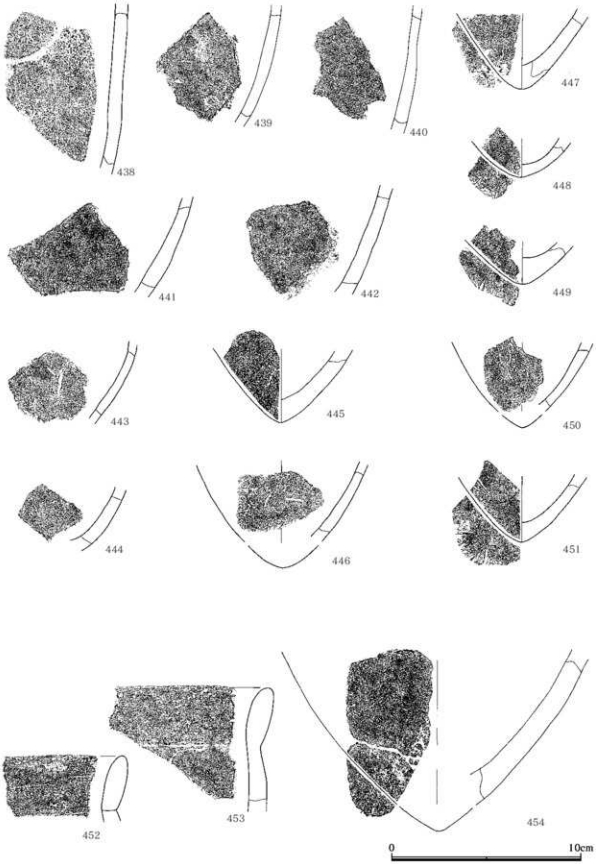
第153図　遺構外遺物（21）



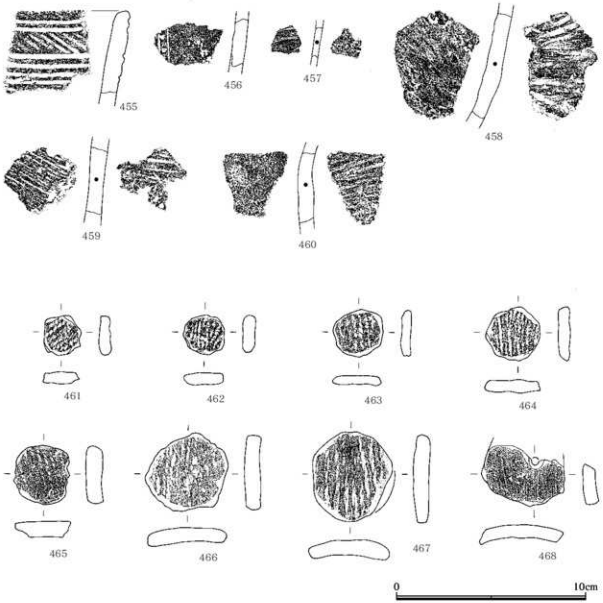
第154図　遺構外遺物（22）



第155図　遺構外遺物（23）



第156図　遺構外遺物（24）



第157図　遺構外遺物（25）

ここでは一括して扱う。

器形を推定できるものが比較的多く認められたため、可能な限り復元してみた。あくまで推定ではあるが、本類は口径20～25cmの平均的なサイズのほかに10cm前後のものも多く、小さなものでは8cmと5cmのものまで認められた。土器のつくりや器面調整は丁寧なものが多く、口唇部や外面に研磨を施すものも少なくない。当遺跡の無文土器には、粗製的な要素が認められるものは少ない。

口縁部形態は大きく開くものと直立ぎみのものが主体で、後者には内湾ぎみのもの（419・431・434）も少数認められる。大きく開くタイプは器面がナデで仕上げられ、胎土に金雲母を含むものが多く、2類・3類と共通する部分がある。一方、直立ぎみの一群は口唇部や外面に研磨が施され、胎土に結晶片岩を含むものが多く、1類b・dと共通するようだ。

出土土器のなかで最も小さな口径5cmの土器（432）は、手づくねでつくられており、器面に凹凸があり、口唇部もやや歪んでいる。胎土には結晶片岩を含んでおり、本群土器の特徴を備えている。

５類　稲荷原型無文土器（第156図452～454）

総数25点が出土しており、うち３点を図化した。形態が稲荷原式古段階の土器と共通しており、当遺跡では無文土器以外は出土していないことから、ここでは便宜的にこの名称を使用する。

器厚が１㎝前後の厚手の土器で、口縁部が外折して肥厚し、口縁部から外面にかけて研磨を施すものが多い。胎土は砂粒が少なく、結晶片岩や金雲母を含まない。

当遺跡出土の土器はこのタイプのみであり、他の本群土器との判別は容易であるが、中期前半期の無文土器との判別は難しく、多少の入れ違いはあるかもしれない。

以上、第Ⅱ群土器の内容について述べたが、この他に遺構外から第Ⅱ群土器を使用した土製円盤が８点出土しているので、ここで紹介しておきたい（第157図461～468）。大きさは、直径２㎝ほどのものから4.5㎝のものまである。使用した土器は、461・463・465～467の５点が１類ｂ、468が１類ｄ、462・464の２点が２類ａである。468の中央付近にある孔はおそらく補修孔で、意図的にこの位置に配置したものであろう。

当遺跡では住居からも土製円盤が３点出土しており、これで総計11点となった。

（３）第Ⅲ群土器（第157図455・456）

早期沈線文系土器群は２点のみの出土である。

１類の455は、胎土に石英をはじめとする砂粒を多量に含む厚手の土器で、横位沈線帯の間を斜位の沈線で充填しており、竹ノ内式に比定されよう。

２類の456は砂粒を少量含むもので、内面は剥落している。外面は入念なナデが施されている。文様は、細沈線による縦位の平行沈線間に小さな円形刺突を施すもので、中部系の沈線文土器であろう。

（４）第Ⅳ群土器（第157図457～460）

早期条痕文系土器群はここに示した４点のみの出土である。いずれも表裏面に条痕を施し、胎土に繊維を含んでいる。

457は３㎜ほどの薄手の土器で、条痕文の施文は浅く、胎土に細粒の結晶片岩と微量の繊維を含む。458～460は胎土に多量の繊維を含んでおり、条痕文は明瞭なものが多い。

457は他の本群土器とは明らかに異質であり、槻木式に該当する可能性が高い。

4　遺構外出土土器（前・中期）

本遺跡の遺構外出土土器のうち前期初頭より後期の資料を扱う。しかし、当地域で濃密に出土する、中期後半～後期中葉にかけての土器資料は極めて少量で、このことも本遺跡の特性となろう。ここでは、前項の草創期・早期分類を踏襲して、前期以降の出土土器の大別を提示する。なお、遺物番号は早期の番号を踏襲せず、新たに通し番号で付した。

Ⅴ群　前期初頭～中葉

調査区全域での出土が見られる。繊維を含み、羽状縄文系土器を中心にまとめた。

1類　花積下層式（1・2・20～43）：比較的出土量を見る一群である。撚糸側面圧痕を施す例は少なく、原体幅の短い羽状縄文を施す例が多い。

2類　関山式（44～50）：44～46をⅠ式、組紐地文の47～50をⅡ式とした。

3類　黒浜式（51～65・69・70）：口縁部意匠が顕著な例が無く、有尾式としての確定性は無い。黒浜式として判断した。69は35号住2に近似する。

4類　異系統の土器群（66～68・71、215～221）：信州系や東海系の土器群であろうか。検討を要する。特に215～221は中越式あるいは北白川下層式との関係も考慮したい。

Ⅵ群　前期後葉～末葉

1類　諸磯a式・b式（72～90）：客体的である。72～79はa式、80～84はb式と見られる。85・86はb・c式、87～90もb式～c式の範疇であろう。

2類　諸磯c式（91～108・111～113・115～119）：ボタン状貼付文や体部対弧意匠を集めた。小片が多いが10号集石には大型の口縁部破片を見る。c式終末段階では、111～113などが相当する。

3類　十三菩提式併行（4・5・120～168）：多様性を含み、量的にも充実する一群である。結節浮線文を多用する一群、平行沈線や細沈線によるもの、細沈線と三角印刻を配する例、斜位・格子状沈線を充填する例、縄文施文の例などが見られる。

4類　異系統の土器群（5、109・110・114）：5の類例は少ない。内皮沈線による施文が多用され、体部の2条の横位隆線が特徴的である。109・110は北白川下層式、114は北陸系の例であろう。

Ⅶ群　中期初頭～前葉

1類　五領ヶ台式（6～8・9、222～376）Ⅰ式が少なくⅡ式は充実する。細沈線を施す例も少なく、地文縄文が圧倒する。また、口縁部の装飾に撚糸文を充てる例も少量見られる。口縁部に格子目文や斜位沈線を充填する一群も量的に見ることができる。Ⅱ式終末段階の縄文施文で覆われる一群もあるが、前葉段階の縄文施文土器との区別が難しく、混在する可能性もある。

2類　阿玉台Ⅰa式・Ⅰb式（14～16、377～414）：量的に多く、Ⅰa式の出土が目を引く。377や378・386は典型的な口縁部形態であろう。また、体部のヒダ状圧痕を施す例も多くを阿玉台式として捉えたが、前葉段階の他の土器群にも見ることのできる要素のため、今後の検討を要しよう。

3類　勝坂式直前～勝坂1式古（12・13・17・18・19、415～532）量的に充実する。多様な文様要素を見せ、地域性が活発化した時期であろう。本書では具体的な型式名を充てていないが、阿玉台式との相互の関係も考えなければならない土器群である。

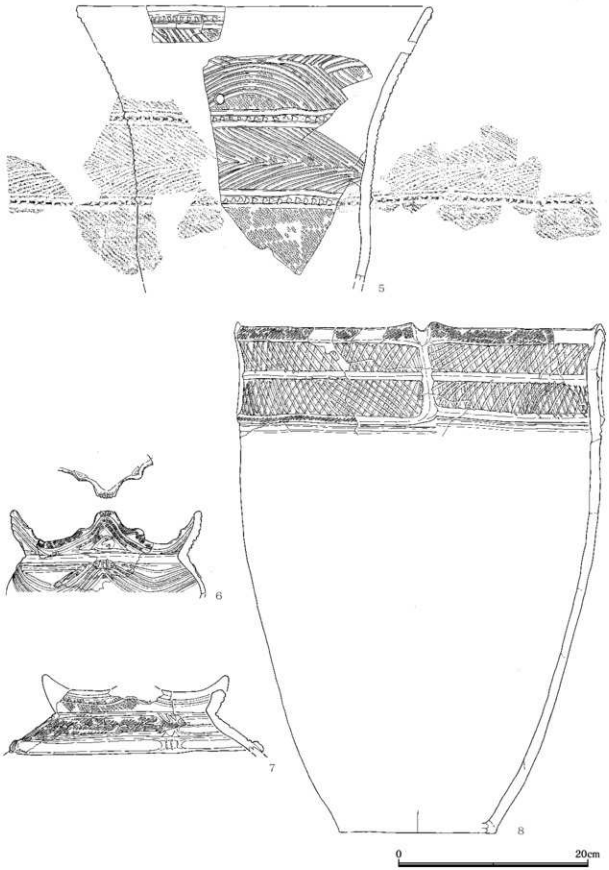
4類　異系統の土器群（10・11、294）：10は「深沢式」と捉えた。量的には少ないが、内皮沈線を多用し、頸部に幅狭ながら無文帯を設ける特徴を持つ。また、11・294は類例が少ない。これも北陸系の影響も考えておきたい。

Ⅷ群　中期中葉以降

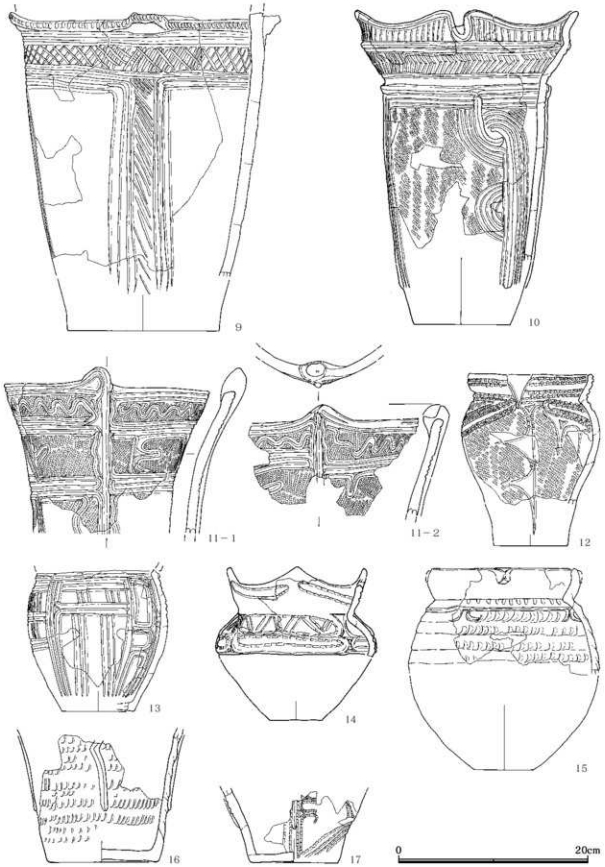
加曽利EⅠ式古段階（533・534）：少量の出土であるが、10号集石には個体の出土が見られることから、周辺に該期集落跡の存在は予想されよう。

後期以降（535～547）：少量の出土であり、客体的な存在である。本遺跡がある長野原町林地区は、後期集落跡の存在が予想されており、本遺跡の資料もその外縁部に属するものであろうか。545は晩期、546・547は弥生前期土器である。

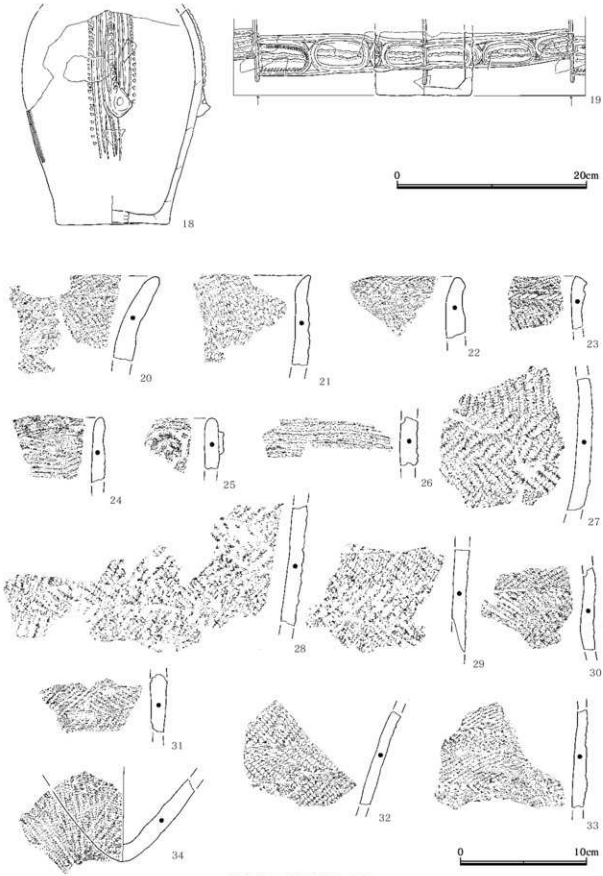
第158図　遺構外遺物（26）



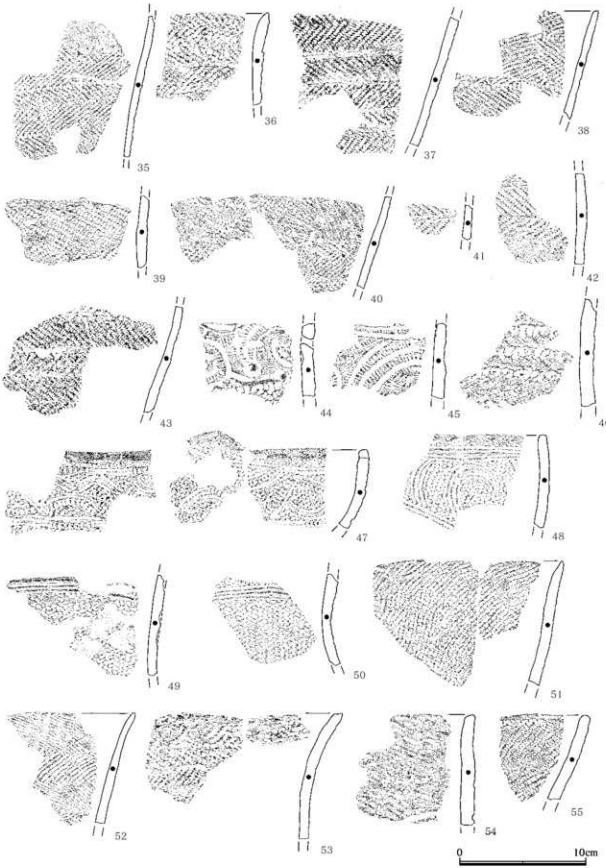
第159図　遺構外遺物（27）



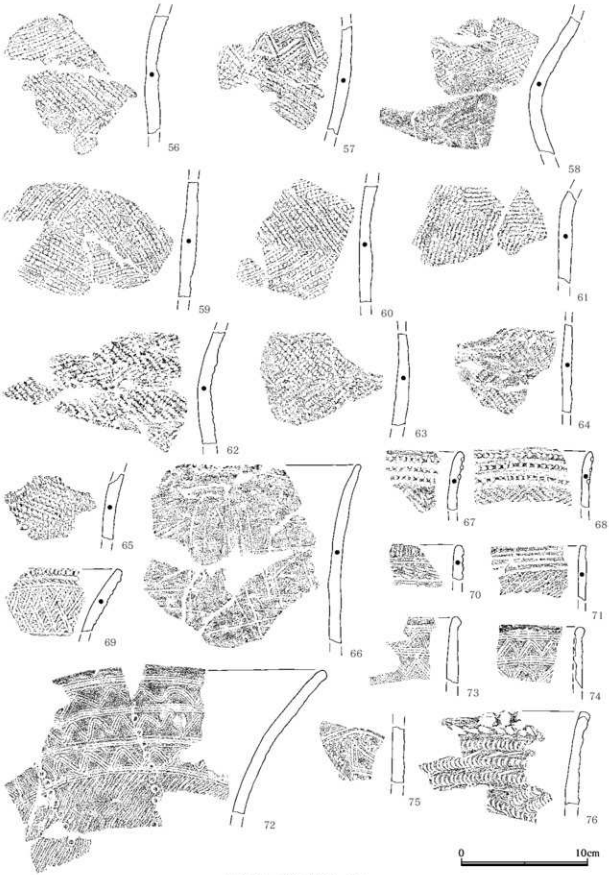
第160図　遺構外遺物（28）



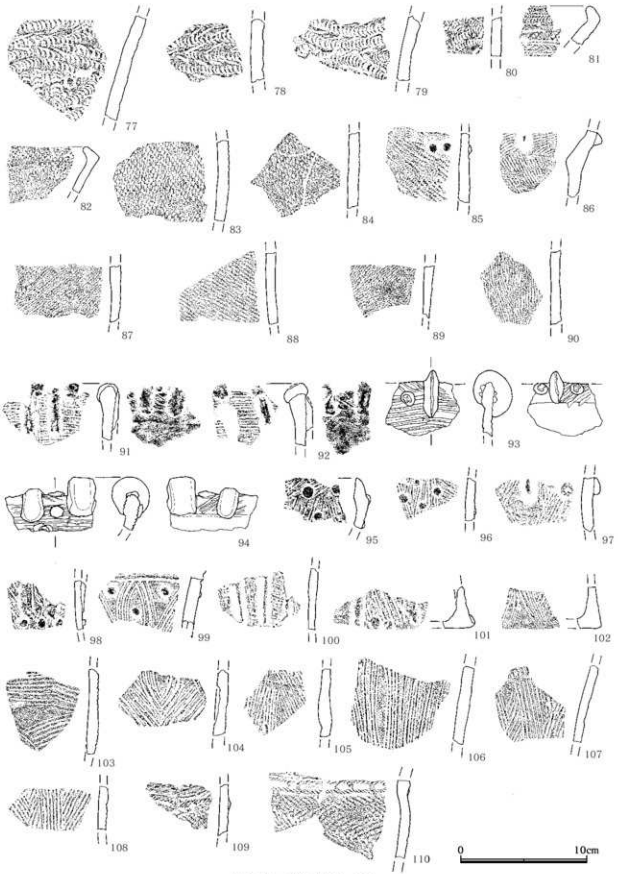
第161図　遺構外遺物（29）



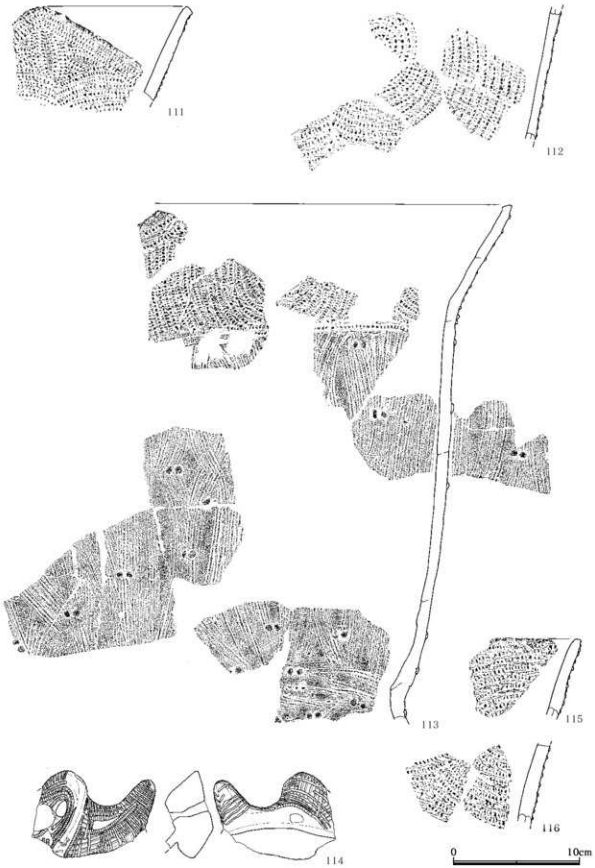
第162図　遺構外遺物（30）



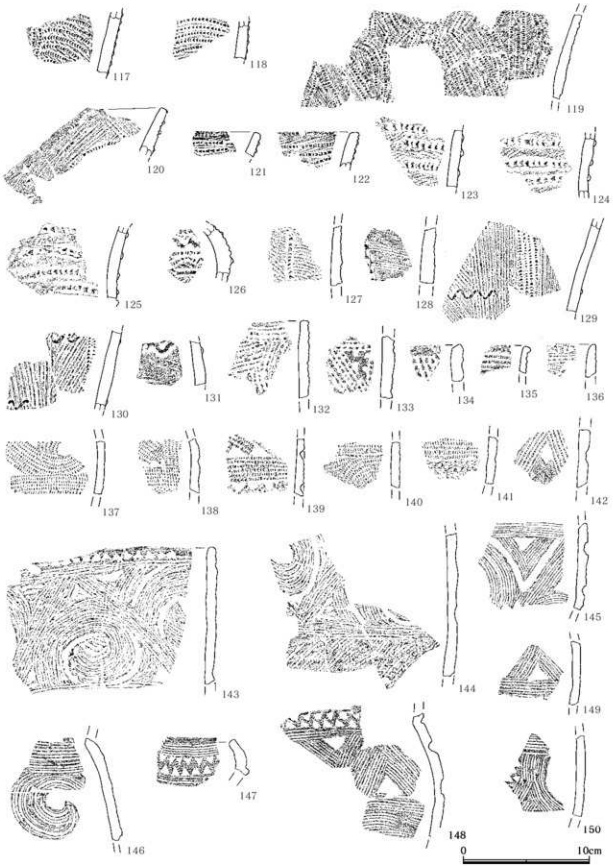
第163図　遺構外遺物（31）



第164図　遺構外遺物（32）

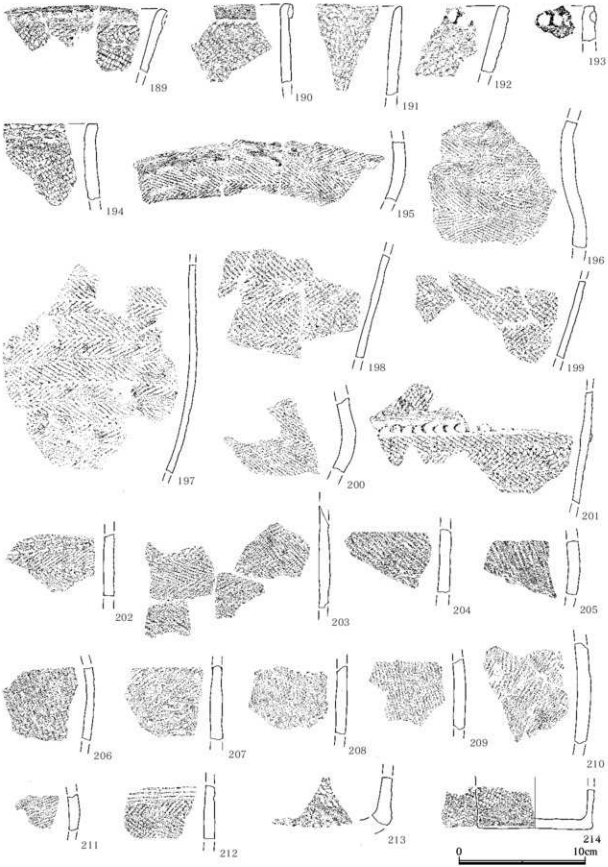


第165図　遺構外遺物（33）



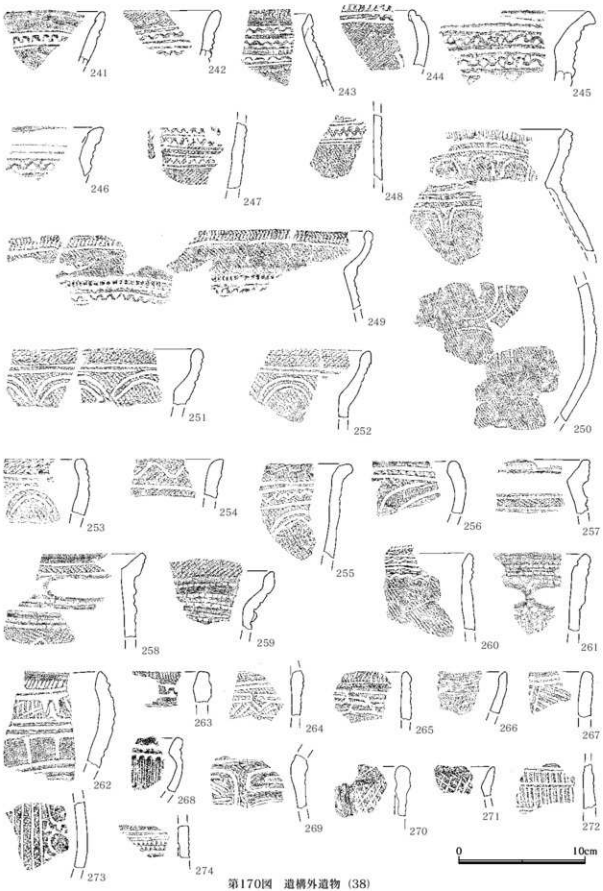
第166図　遺構外遺物（34）

第167図　遺構外遺物（35）

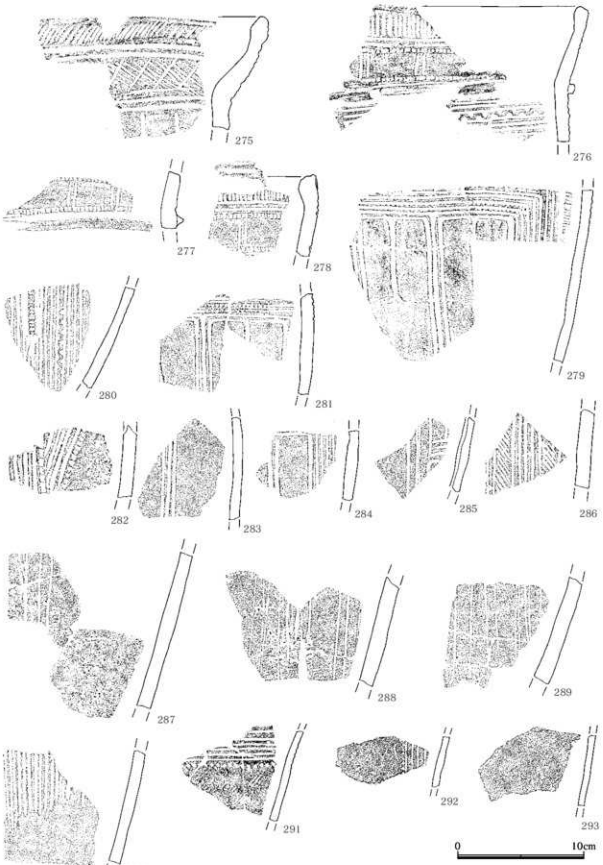


第168図　遺構外遺物（36）

第169図　遺構外遺物（37）

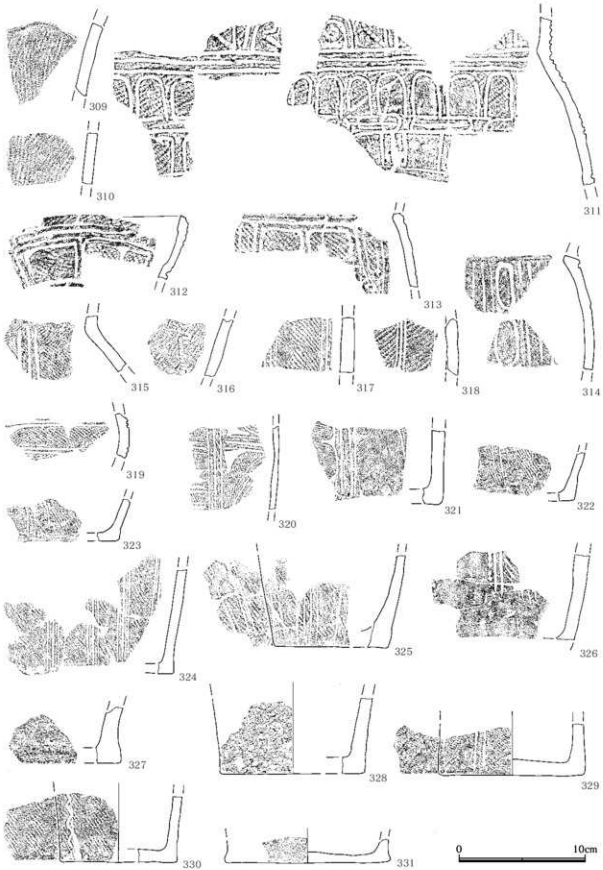


第170図　遺構外遺物（38）

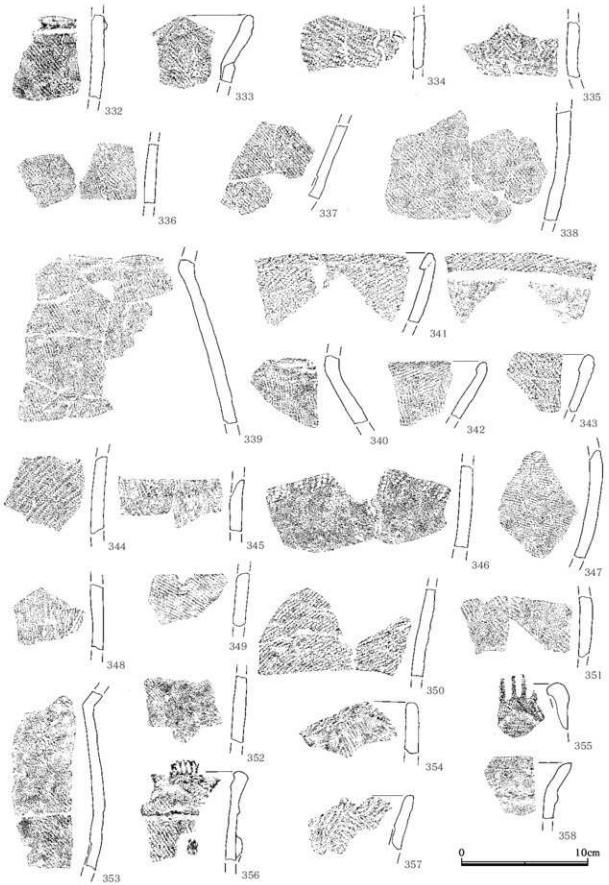


第171図　遺構外遺物（39）

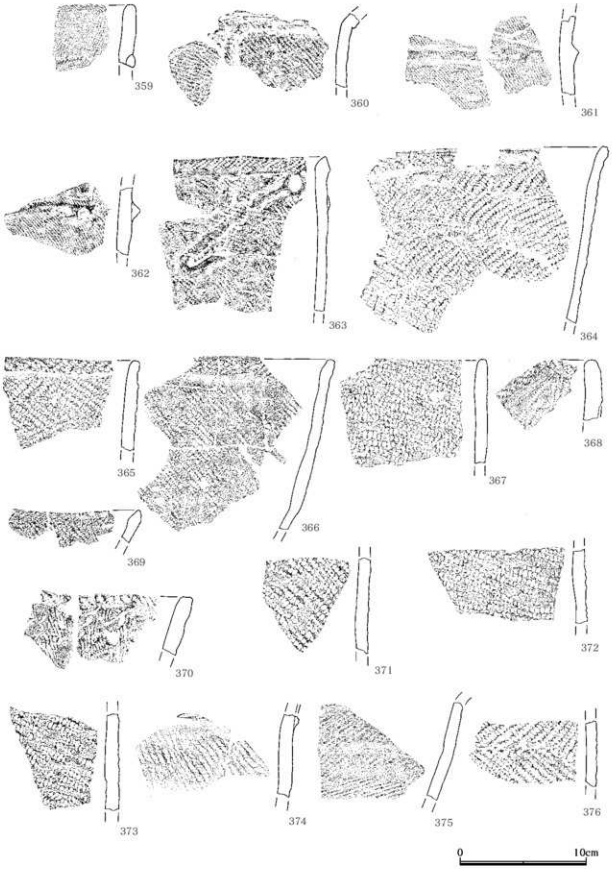
第172図　遺構外遺物（40）



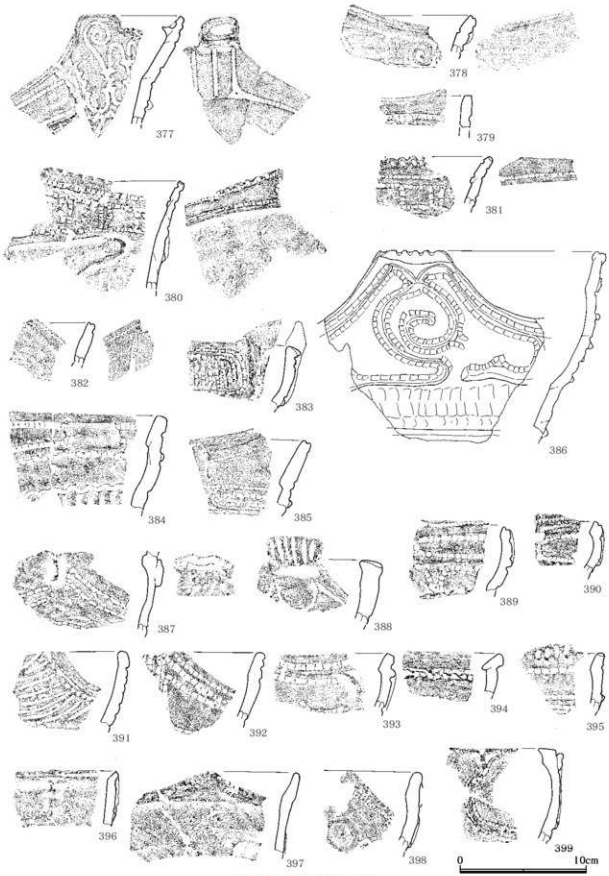
第173図　遺構外遺物（41）



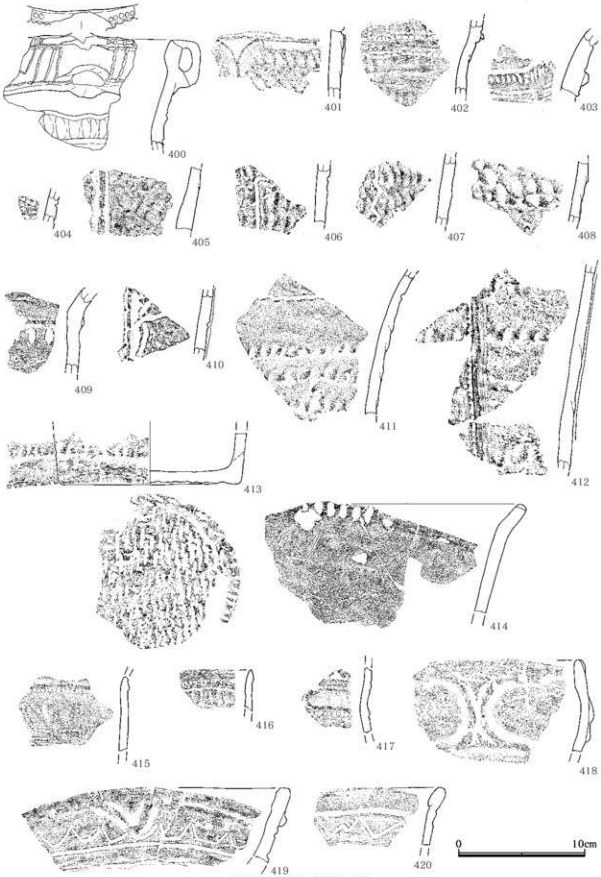
第174図　遺構外遺物（42）



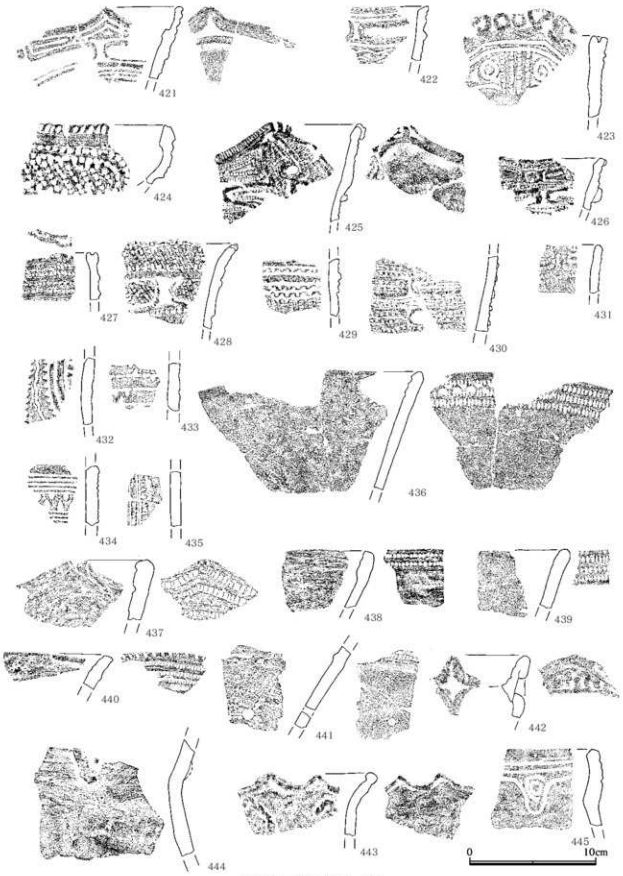
第175図　遺構外遺物（43）



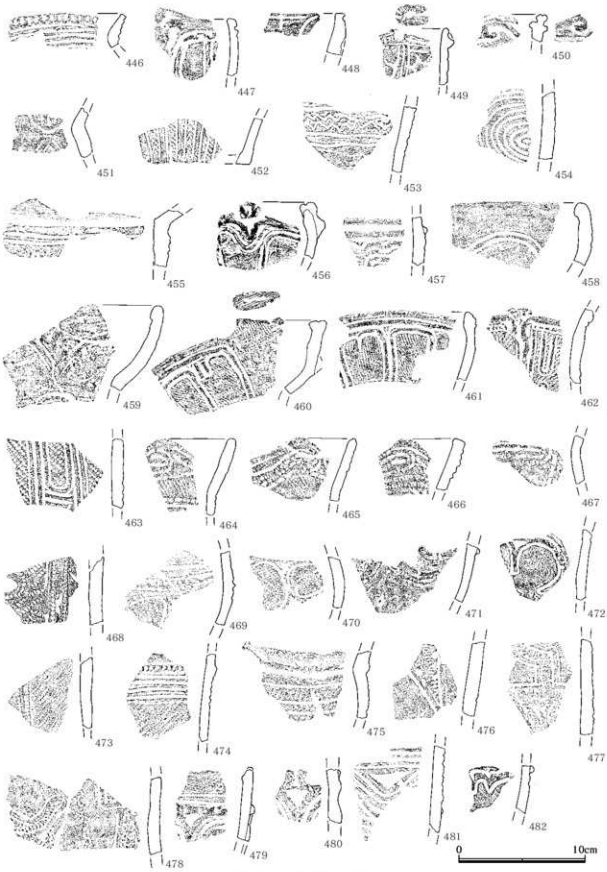
第176図　遺構外遺物（44）



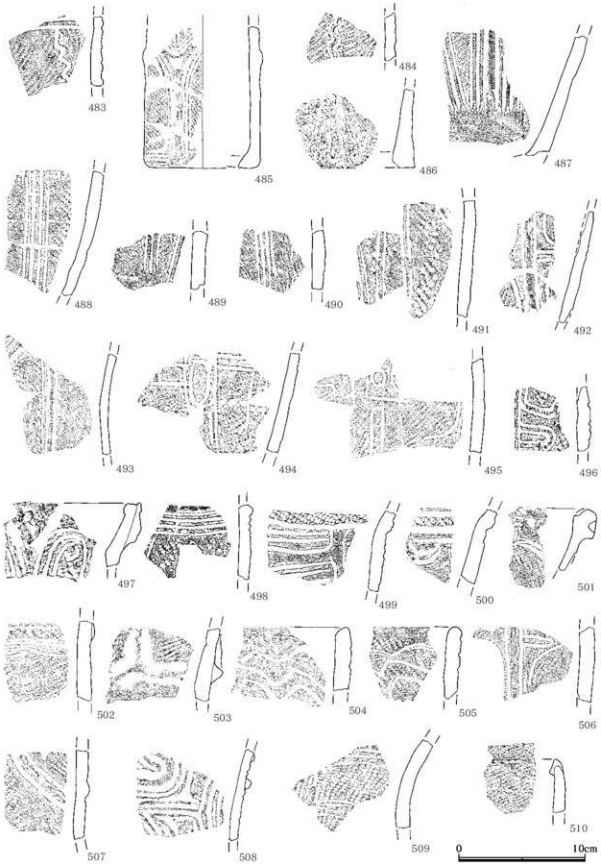
第177図　遺構外遺物（45）



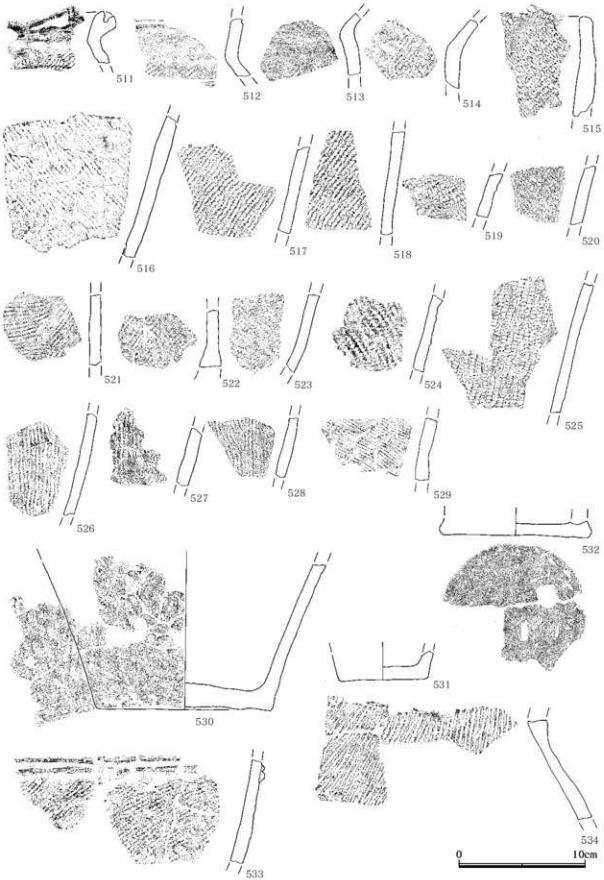
第178図　遺構外遺物（46）



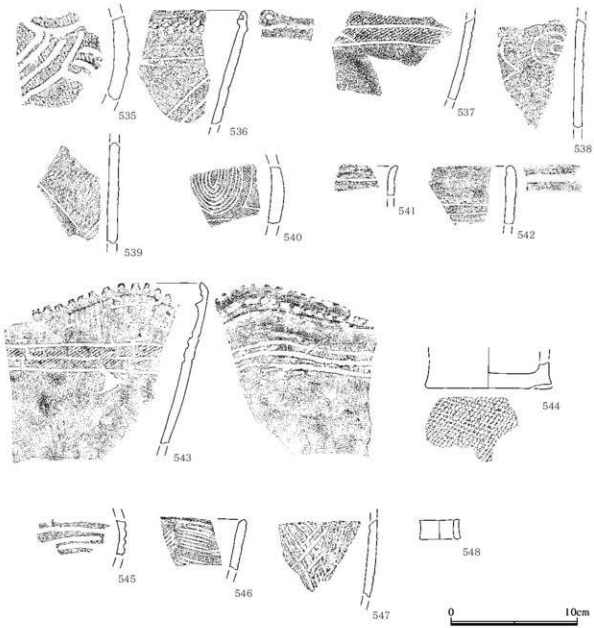
第179図　遺構外遺物（47）



第180図　遺構外遺物（48）



第181図　遺構外遺物（49）



第182図　遺構外遺物（50）

5　石器

本遺跡では多数の縄文時代の石器が出土している。これらの石器には大きく分けて狩猟・採集、加工、調理、呪術の4つの種類の用途がある。ここでは、それぞれの説明を行うこととする。

狩猟具　ここに含まれる石器の種類は、尖頭器、石槍、有舌尖頭器、打製石鏃などである。狩猟は縄文時代以前の旧石器時代から、人々の大きな生業のひとつであった。古いものとしては槍先と考えられている尖頭器がある。大きいが薄くて細身の形状は、槍の先に装着することでその機能を十分に発揮して、大形の動物を標的とするのに適していた。だが、大形の動物の絶滅に伴い、狩猟の対象が猪などの中形の動物に変わって行くのに伴い、打製の石器の矢じりを先端に装着した弓矢が登場する。これにより俊敏な小動物に対しての狩猟も十分対応できるようになったと考えられる。この打製石鏃は縄文時代を代表する石器のひとつであり、縄文時代の遺跡で多量に発見されるとともに、時期や地域によって実に様々な形態のバリエーションが見られる石器である。また、その登場が縄文時代草創期に限定される有舌尖頭器は、尖頭器から打製石鏃への移行期での中間的な役割を持った資料と考えられるが、本遺跡では出土していない。

加工具　ここに含まれる石器の種類は、打製石斧、磨製石斧、削器（スクレイパー）、楔形石器（ピエス・エスキーユ）、石匙、石錐（ドリル）、礫器、砥石などである。木の伐採や土堀具の道具である石斧には、板状の素材を打ち欠く加工のみで完成した打製石斧と、打ち欠いた後さらに研磨して仕上げた磨製石斧とがある。ともに柄を装着して使用され、打製石斧は現在のスコップのような土掘り具として、竪穴住居や掘立柱建物などの掘削や地下茎のイモ掘りなど食糧採集にも使われたと考えられている。打製石斧より鋭くかつ強い刃先を持つ磨製石斧は、樹木の伐採などに威力を発揮し、一部はのみなどの工具としても使われたようでもある。

また、加工の道具としての削器は、皮なめしのほか木や骨を削ったり、獣の肉を切ったり、まさに多目的な利器であったと考えられている。中でも石匙と呼ばれる上部をつまみ状に整形したものは、縄文時代に入ってから登場する石器のひとつで、つまみの部分にひもをかけて携帯したものと推定されている。石錐は骨角器などに穴をあける錐として、楔形石器は、タガネのようにハンマーと対象物との間におかれた間接具と考えられている。礫器は、初期の人類が最初に作った石器と言われており、打ち割り機能の他、スクレイパーに近いものや、石斧に近いものなど、用途は様々である。砥石は磨製石斧などの石器や骨角器、木器の整形・研磨などに使われたと考えられており、特に有溝砥石は使用面の一部が溝状に凹んだ独特な形状である。

調理具　ここに含まれる石器の種類は、敲石（叩き石）、凹石（くぼみ石・多孔石）、石皿、磨石（擦り石）、スタンプ形石器、三角錘石器、抉入磨石などである。縄文時代の食糧は、狩猟・漁撈で獲得する獣や魚などの動物質以外に、木の実などの植物質が大きな位置を占めていた。植物を調理するための道具も、遺跡には多数残されている。敲石や凹石の一部は堅い木の実を割るために、石皿と磨石はすりつぶして製粉するのに使われた。これらはそれぞれ兼用することも多かったらしく、ひとつの石器に磨ったり叩いたりした痕跡が残っているものや、石皿の縁や裏側に凹みのあるものもよく見られ、多機能な石器であったことが読み取れる。スタンプ形石器や三角錐形石器、抉入磨石などは、使用痕から調理道具の仲間であると考えられているが、発見される地域・時期ともに限られているため発見例が少なく、明確な機能はまだわかっていないのが現状である。

次に、ここで本遺跡での縄文時代の石器の細分基準を明らかにする。

尖頭器は槍先に装着するために、楕円形の礫や薄い板状の素材薄片から両面加工体を作り出し、尖った先端部と基部を作り出す資料である。本遺跡からは1号溝から2点出土しており、石材は珪質変質岩と黒曜石である。打製石鏃は、薄い剥片を素材とし

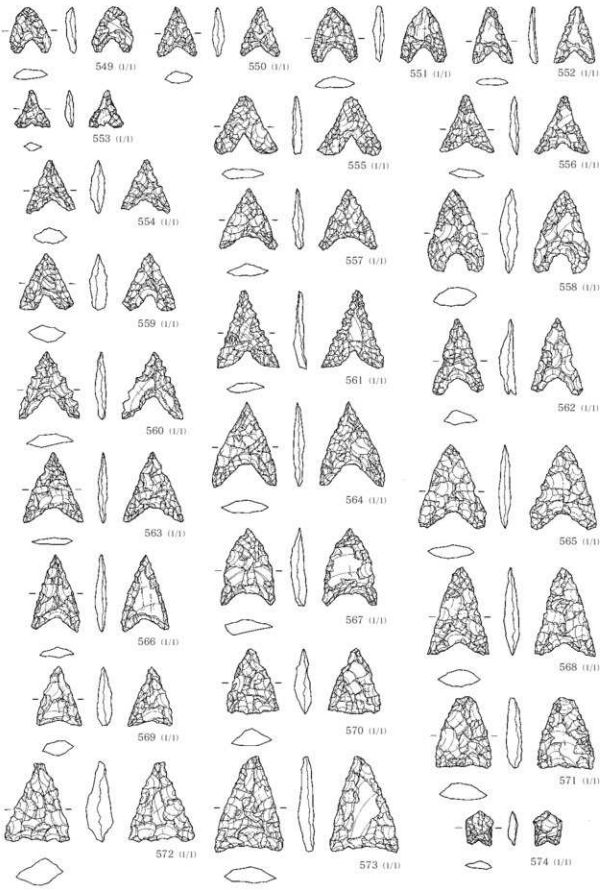
て、周囲に押圧剥離などの調整加工を加えることで、矢じりの先を作り出す。本遺跡からは109点が出土している。資料の形状から従来の分類である凹基無茎（１類）、平基無茎（２類）、有茎（３）類の三つの形態とする。ただし、先端部欠損や、下半部欠損、両・片方の脚欠損など一部を欠損した資料も多く、その部位によっては分類不可能な資料も存在する。石材は黒曜石が最も多く、チャートやこの地域の限定石材である珪質変質岩も多く用いられる。打製石斧は、礫を分割して板状の素材を作り出し、周辺に調整加工を加えることで、装着可能な斧の形態を作り出す。資料の形状から従来の分類である短冊形（１類）、撥形（２類）、分銅形（３）類の三つの形態とする。本遺跡では18点と数が少ない。欠損状況も、刃部欠損、刃部残、刃部・頭部両欠損（つまり、中間部のみ残存）、頭部欠損などが認められる。また、未成品がいくつか認められる。さらに、破損部分に調整を加えて再生する、いわゆるリダクションも考えられる資料も存在する。石材は黒色頁岩が15点と多く、細粒輝石安山岩４点、珪質頁岩１点、変質玄武岩１点、石材鑑定不可３点がある。磨製石斧は、その形状から断面が隅丸長方形の定角式（１類）、断面が楕円形の乳棒状（２類）の二つに分類する。本遺跡からは８点出土しており、石材は黒色頁岩４点、珪質頁岩２点、変質蛇紋岩１点、変玄武岩１点である。

削器は、剥片を素材とし、素材剥片自体の形状を著しく変えることなく、その周縁や側縁の部分に細かな調整加工を施し、刃部を作り出した資料である。石材は珪質変質岩が最も多く、黒色頁岩や細粒輝石安山岩や黒曜石なども用いられている。石匙は、機能的には削器と同様の用途に用いられるものだが、摘み部分が作出されているという定型化された石器ということで、分類されるものである。形態から、縦型（１類）と横型（２類）の二つに分類した。石材は黒曜石が主体である。石錐は、小型（１類）と大型（２類）の二つに分類した。７点が出土しており、黒曜石や珪質変質岩などである。加工痕のある剥片は、削器とほぼ同様の用途を持つが、調整加工の少なさなどからこの分類名称とした。本遺跡からは187点出土している。石材は珪質変質岩が最も多く、黒曜石や細粒輝石安山岩、珪質頁岩などである。

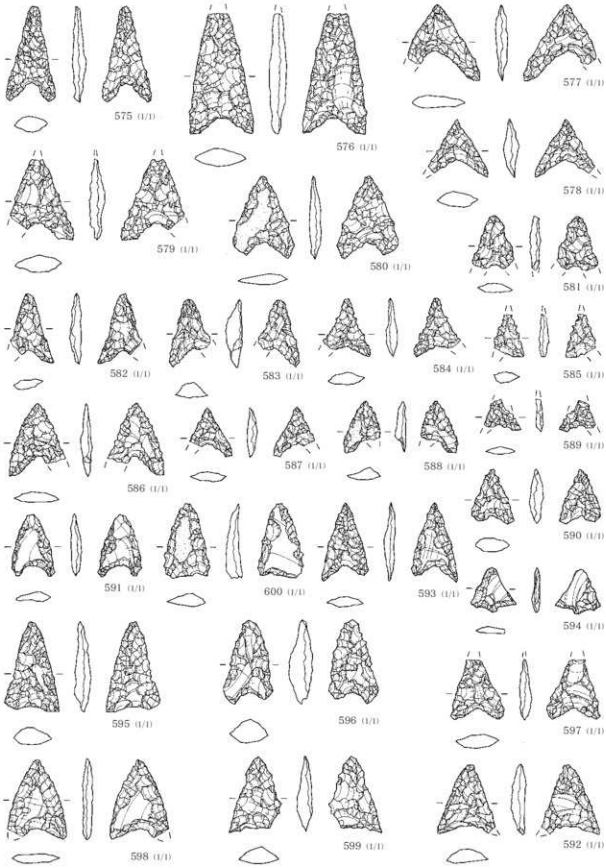
石核は、打製石鏃や削器、石匙、石錐などの小型の石器類の素材剥片を打ち剥ぐための母核であり、37点が出土している。石材は細粒輝石安山岩や珪質変質岩、黒色頁岩、黒曜石などである。

砥石は、その機能から用いられる石材が砂岩を主体としており、研磨による窪みや線条痕が認められる。また、板状の素材から割り取るための磨り切り痕が残っている資料もある。石材は凝灰質砂岩が最も多く、凝灰質シルト岩や細粒輝石安山岩などである。詳細は、第４章第６節を参照していただきたい。

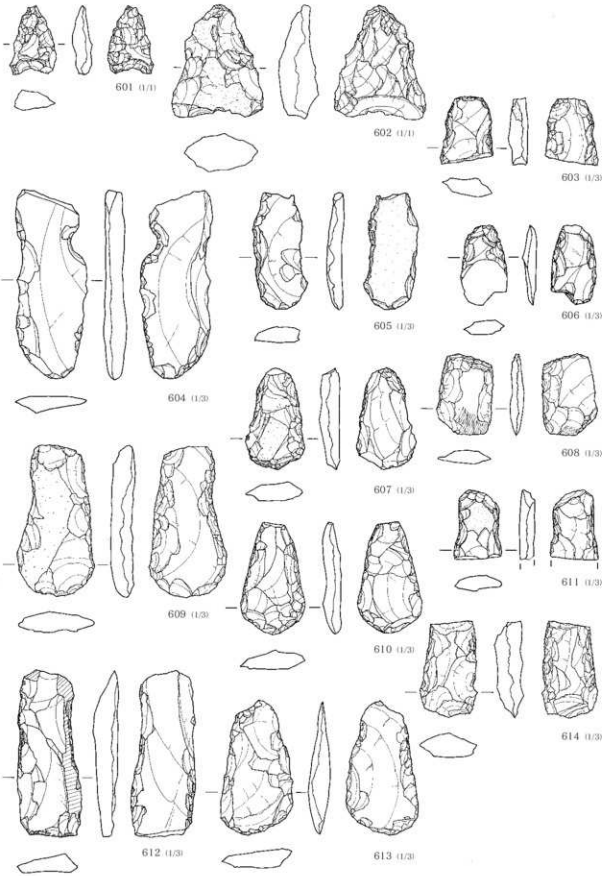
敲石は、楕円形や棒状の礫の先端、あるいは側縁部分など敲打の痕跡が残されている資料で、石器製作や粉砕などの調理具などとして使われていたと考えられる。石材は細粒輝石安山岩や変質安山岩、石英閃緑岩、溶結凝灰岩などである。多孔石は、礫の片面か、あるいは両面にくぼみ穴が多数残存する資料で、欠損した石皿の裏面などにも認められることもある。また、くぼみ孔の数が二、三つの場合は、くぼみ石とも呼称する。石材は安山岩が多い。磨り石は、扁平な楕円礫や棒状の礫などの側面に磨いたり、擦ったりした痕跡が認められる資料である。この器種も敲石や多孔石などとの併用が多い。石材は安山岩が多く用いられる。石皿は僅かに２点の出土である。両方共に破損しており、裏面には数は少ないものの、くぼみ痕が残されていることから多孔石への転用が考えられる。石材は安山岩などが多い。スタンプ形石器は半分に分割した楕円形や棒状の礫を用いて、その分割面や周縁部分を使用する粉砕のための道具である。石材は細粒輝石安山岩や石英閃緑岩、ひん岩、変質安山岩、変質デイサイトなどが用いられている。詳細は、第４章第６節を参照していただきたい。



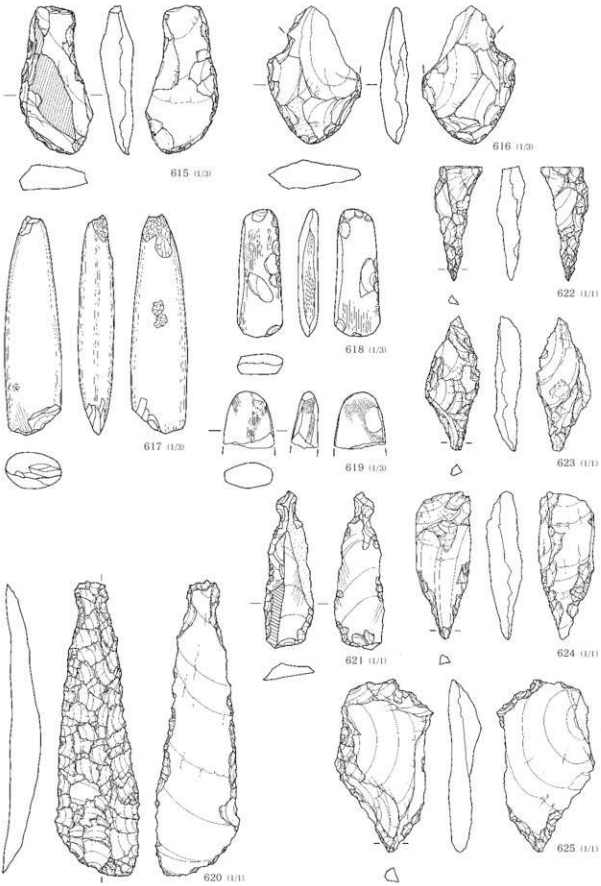
第183図　遺構外遺物（51）



第184図　遺構外遺物（52）

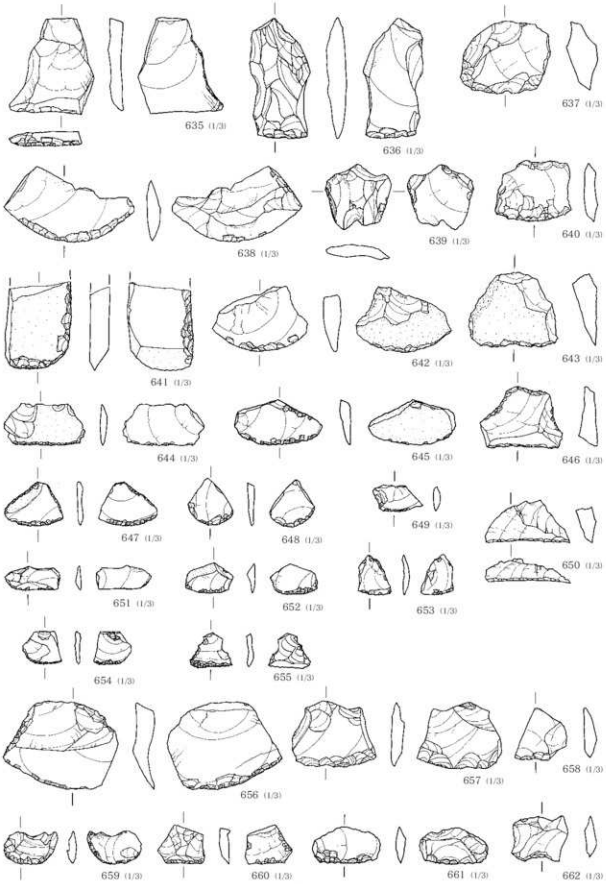


第185図　遺構外遺物（53）

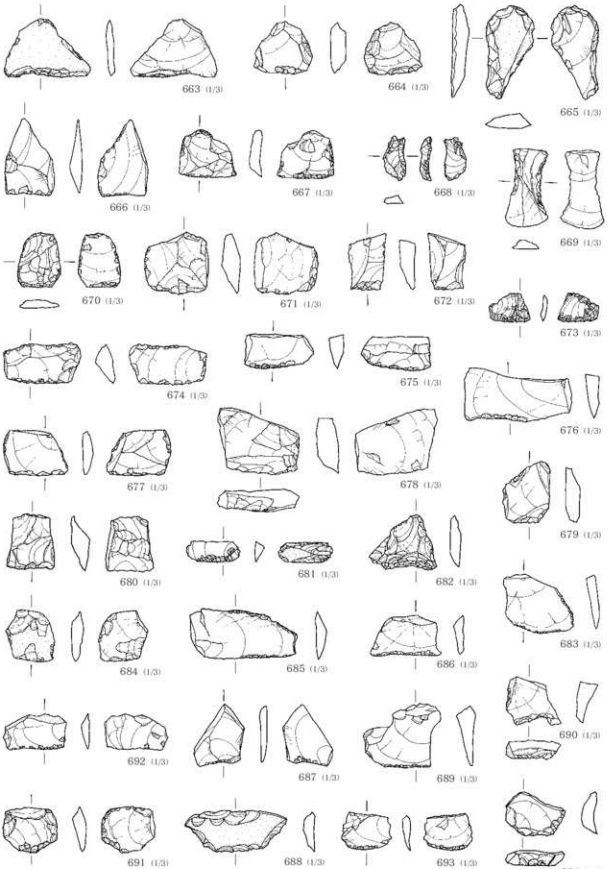


第186図　遺構外遺物（54）

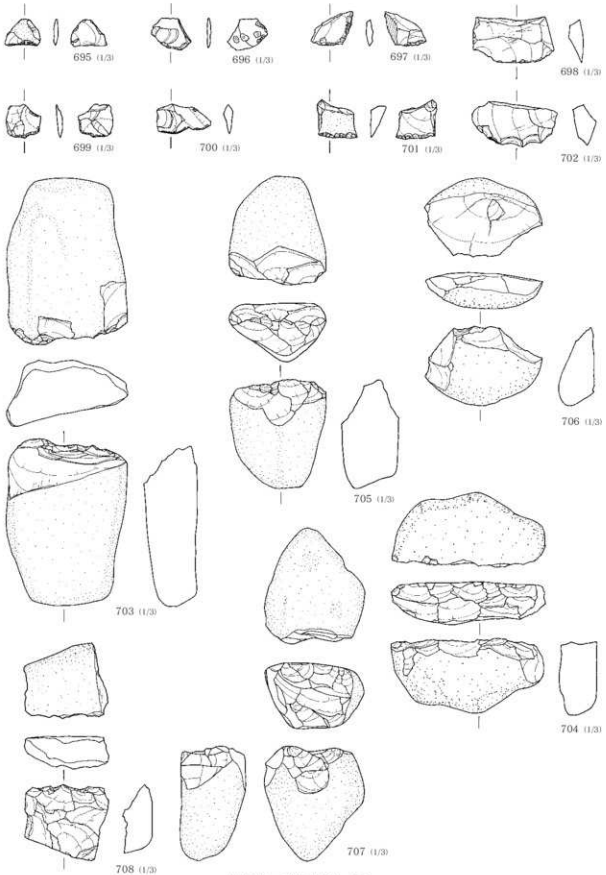
第187図　遺構外遺物（55）



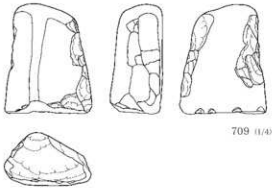
第188図　遺構外遺物（56）

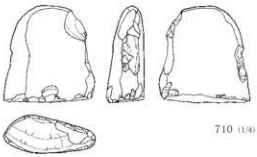


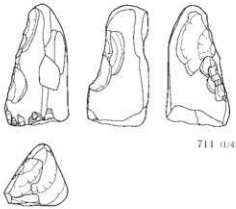
第189図　遺構外遺物（57）

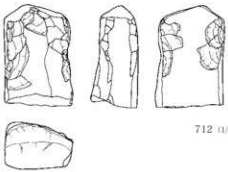


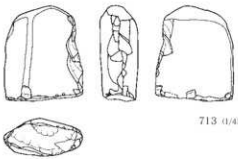
第190図　遺構外遺物（58）

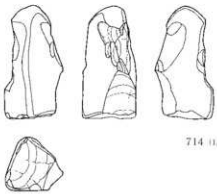

709 (1/4)

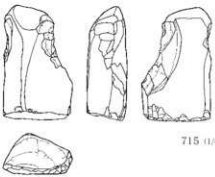

710 (1/4)

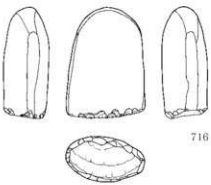

711 (1/4)


712 (1/4)

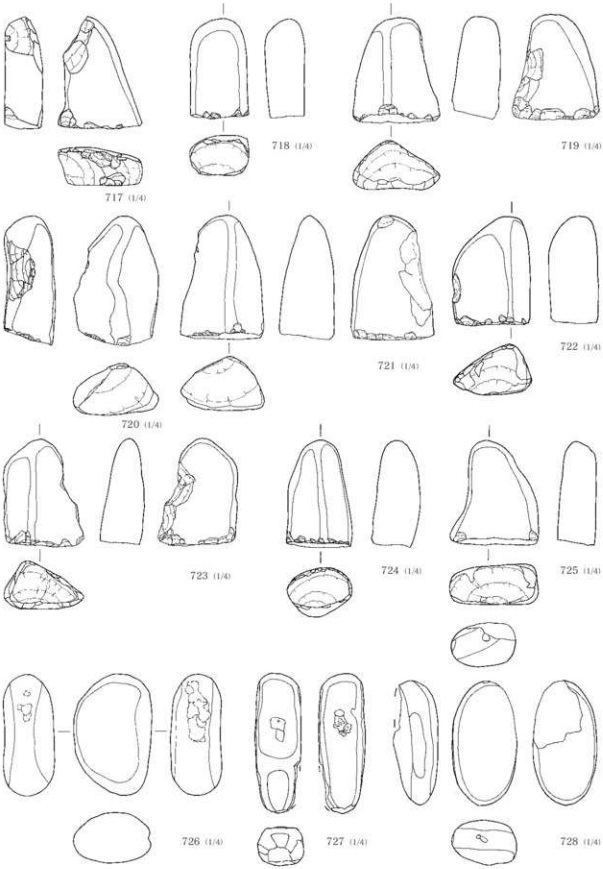

713 (1/4)


714 (1/4)

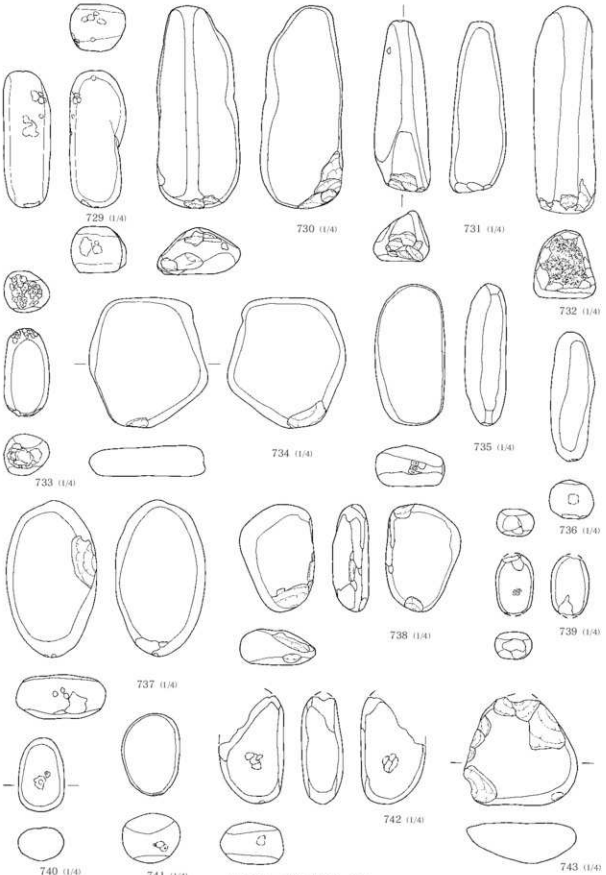

715 (1/4)


716 (1/4)

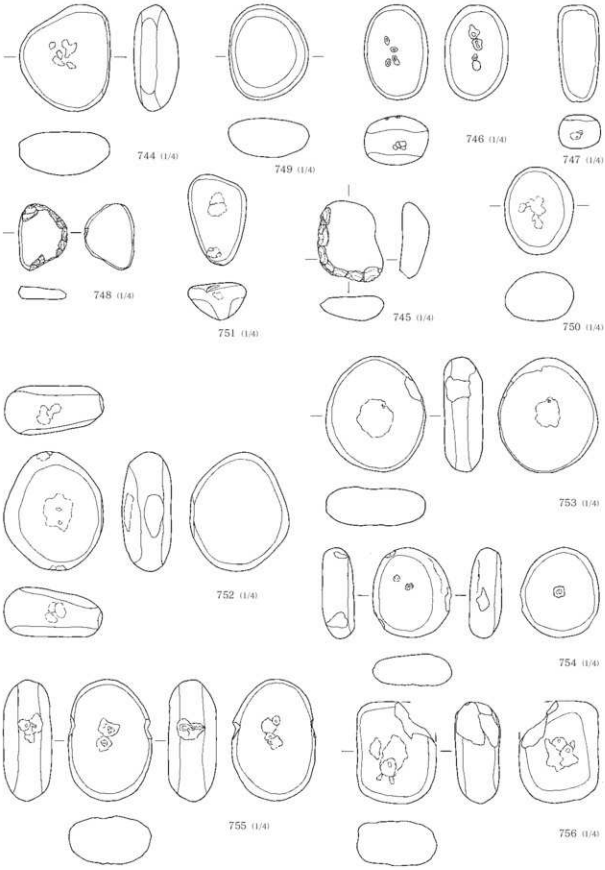
第191図　遺構外遺物（59）



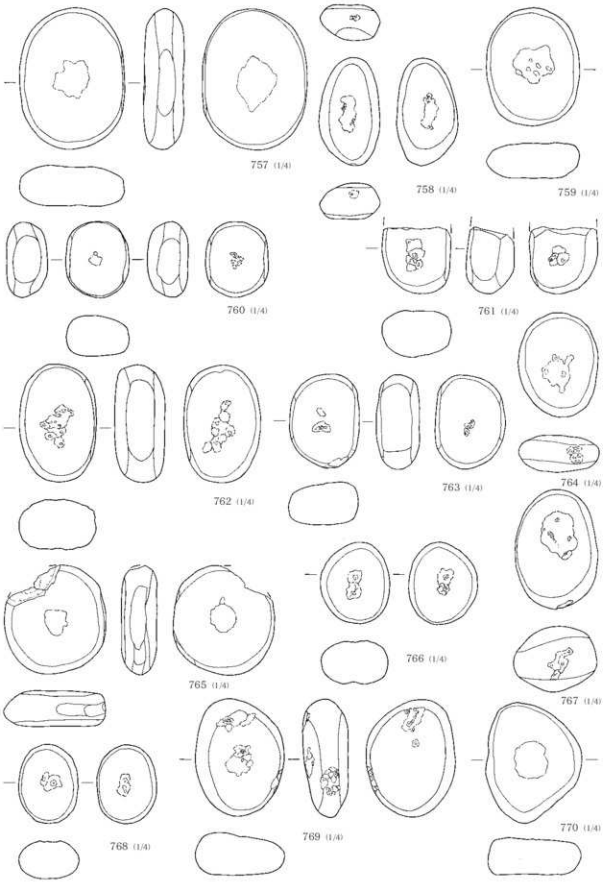
第192図　遺構外遺物（60）



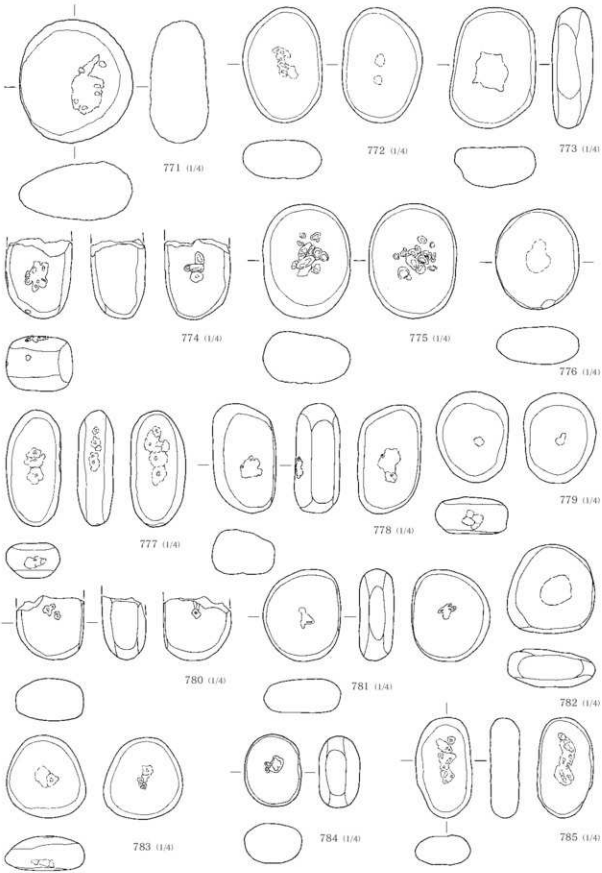
第193図　遺構外遺物（61）



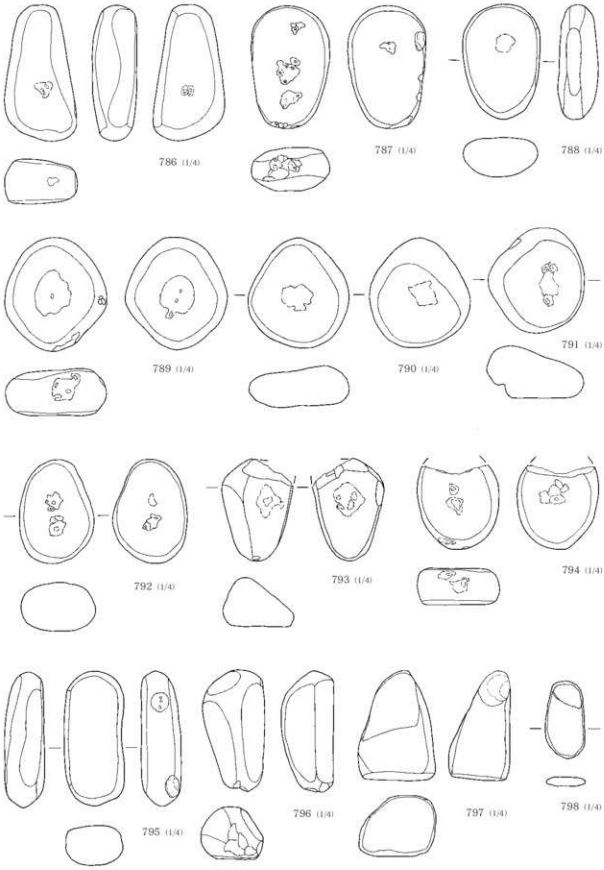
第194図　遺構外遺物（62）



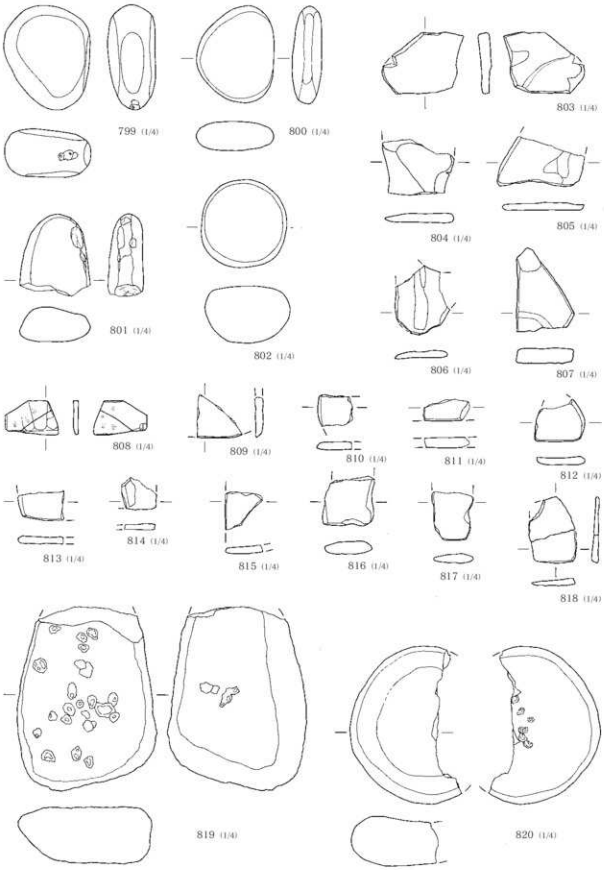
第195図　遺構外遺物（63）



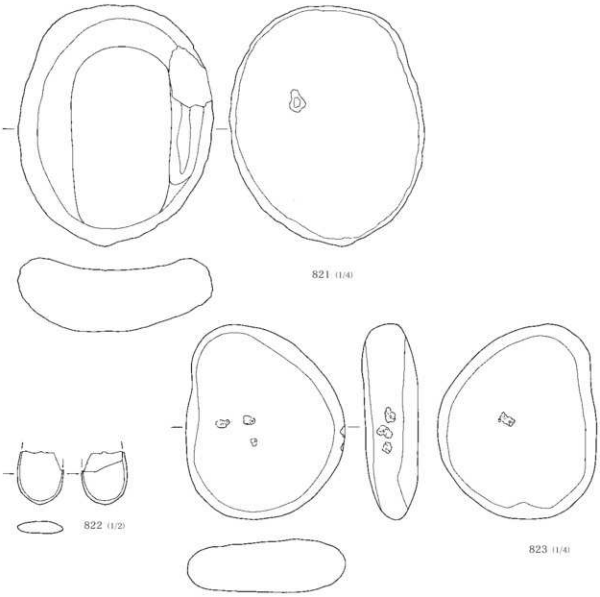
第196図　遺構外遺物（64）



第197図　遺構外遺物 (65)



第198図　遺構外遺物（66）



第199図　遺構外遺物（67）

第３節　補遺

本遺跡から出土した遺構・遺物については、その時期別に区分し、縄文時代は本書に、平安時代と中近世については「檜木Ⅱ遺跡（1）平安時代・中近世編」2008 に収録したが、一部の遺物について記載漏れがあったために、ここに補遺として収録する。

（1）遺構について

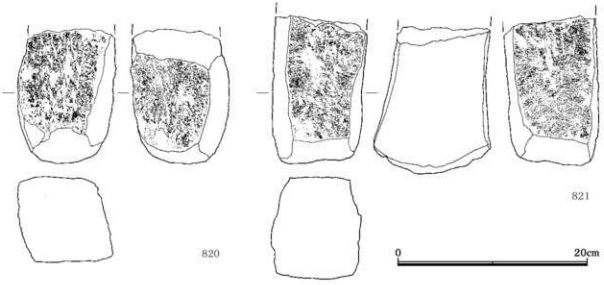
平安時代の遺構は、竪穴住居が大半で、84区から85区にかけての扇状地形の微高地部分に分布する。

中近世の遺構としては、掘立柱建物・テラス・石列・石垣・礎石・陥し穴・墓・土坑・溝・ピット・焼土・湧水・倒木等が検出されている。陥し穴は遺跡のほぼ全面に存在するが、その他は遺跡の南側半分の84区から85区にかけて集中している。特に、85区は地域の民間信仰の対象である『つぶらっこ』様を中心に分布している傾向が見て取れる。

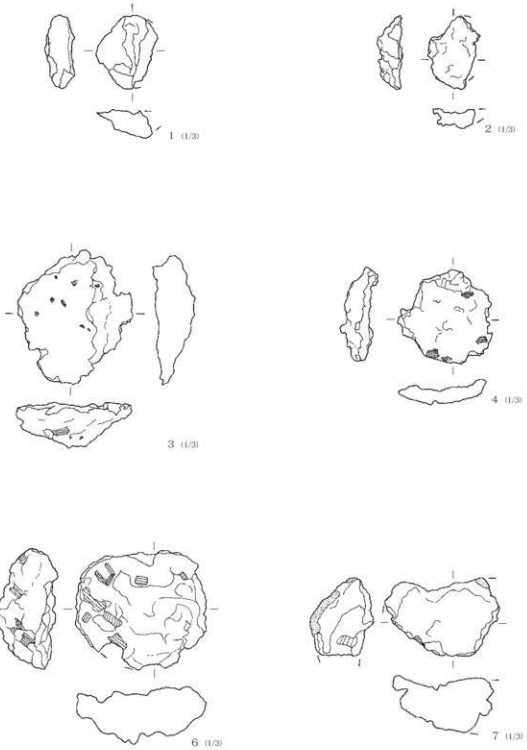
（2）遺物

遺物としては、陶磁器や軟質陶器も少量ながら出土している。金属製品では、以前紹介した煙管（キセル）点の他に、さらに雁首の破片が１点あった。他に、鉄鍋や鎌、古銭などが出土している。石製品では砥沢石の砥石が注目される。産出地は甘楽郡南牧村の砥沢であるが、当時は利根地域の砥石としてのブランドであった「沼田砥」の名称で広く流通していたとの事である。ここでは平安時代、あるいは中近世と考えられる砥石を２点収録した。この他に擦り石、一部には敲打の痕跡も残っている事から敲き石として分類した資料もある。

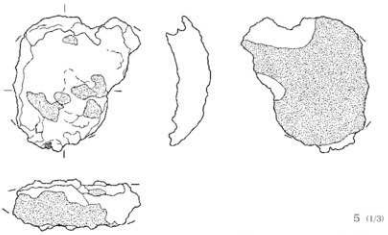
なお、鉄滓については、以前報告した資料も含めて、笹澤氏に実測と観察をお願いした。



第200図　砥石



第201図　鉄滓1



※上面のトーンは酸化土砂、下面のトーンは炉床土。

第202図　鉄滓２

No.	遺物名	出土位置	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
1	椀形鍛冶滓(椀小・含鉄)	４号住居	4.5	5.8	2.0	56.0	5	銹化(△)	小形。滓質は密。炉床土は発泡。下面の酸化土砂中に鍛造剥片あり。
2	椀形鍛冶滓(椀小)	21号住居	4.2	5.8	1.3	44.0	1	なし	粘土質溶解物主体。上面左手に羽口顎部の残存あり。
3	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	21号住居	9.2	10.5	3.0	303.0	6	L(●)	滓質は密。上面は銹化、含鉄部あり。鉄分豊富。表面に小形の木炭痕。
4	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	21号住居	7.2	7.5	2.4	109.0	3	銹化(△)	小形。上面左手に羽口顎部の残存あり。薄手。
5	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	70号住居	10.2	10.7	3.1	419.0	5	H(○)	滓質は密。上面は銹化、含鉄部あり。鉄分豊富。下面には炉床土が残存。
6	椀形鍛冶滓(大・含鉄)	84区グリッド39	10.3	9.2	3.9	489.0	7	L(●)	大形。滓質は密。上面は銹化、含鉄部あり。鉄分豊富。
7	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	Ｊ－７Ｇ	9.1	6.2	4.2	280.0	4	銹化(△)	滓質はやや密。断面に大形の気泡あり。銹化部少なく、粘土質溶解物主体か。

平安時代竪穴住居出土土器類未掲載総量表

重量単位　g

住居No.	土師器　杯		土師器　甕		須恵器　杯		須恵器　椀		須恵器　蓋		須恵器　甕		須恵器　瓶他		須恵器　羽釜		灰釉陶器　椀		灰釉陶器　他		重量計	摘　要
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
3号住居			1	2.1																	2.1	本文記載遺物無し
4号住居	7	41.1	49	163.2	7	46.0	1	12.1	1	27.2	1	55.3	1	5.0	46	937.5	4	112.8			1400.2	
5号住居	20	115.7	167	597.6							19	941.6	7	88.7	1	30.4					1774.0	
16号住居			6	55.2	17	181.0	4	45.4			1	11.5			195	1843.9	3	30.8			2167.8	
19号住居	1	2.2	10	56.3	12	66.6	1	11.3							9	230.3					366.7	
20号住居			5	90.0	6	16.7									8	162.0					268.7	
21号住居	4	9.9	4	26.8	1	10.9	1	2.5			1	36.4			166	2619.0	1	2.4			2707.9	
22号・25号住居			7	29.3	2	7.8																報告書記載
22号住居			7	29.3	2	7.8															37.1	
25号住居			55	488.6	7	62.1	3	15.1			7	531.7			5	62.7					1160.2	
23号・24号住居	1	5.2	251	1195.0	40	174.0	16	190.0			88	2704.4			30	277.2	4	38.4				報告書記載
23号住居			28	148.8	2	5.9					4	122.0					4	28.6			305.3	
24号住居			213	1018.1	38	168.1	16	190.0				2582.4	1	10.7	4	38.4					4007.7	
26号・27号住居	4	13.6	177	730.9	14	93.9	8	68.9			1	36.3									943.6	
28号住居			8	34.0	3	23.6					5	215.1			5	157.7	1	18.6			449.0	
30号住居	3	38.2	88	677.8	19	122.0	11	148.1			10	195.5			5	141.4	6	55.6			1378.6	
33号住居	104	248.2	125	1068.2	32	141.8	2	25.2			14	369.5			56	1072.2	13	95.1			3020.2	
40号住居			11	70.1	2	21.1									1	59.3					150.5	
41号住居			18	59.6							1	74.6			2	29.7					163.9	
42号住居															5	60.4	2	10.3			70.7	
43号住居			14	138.9	1	1.4					1	70.2			6	109.1	1	9.7			329.3	
44号住居			9	107.1																	107.1	

住居No.	土師器　杯		土師器　甕		須恵器　杯		須恵器　椀		須恵器　蓋		須恵器　甕		須恵器　瓶他		須恵器　羽釜		灰釉陶器　椀		灰釉陶器　他		重量計	摘　要
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
45号住居							1	6.0			2	98.7			159	257.3					362.0	
46号a・46号b住居	1	2.9	24	218.0	8	47.6	9	174.3			4	79.0			1	3.9	1	5.9			531.6	
69号住居			60	301.8	13	55.3					31	1547.7					耳皿 1	13.5			1918.3	
70号住居			45	140.8	12	18.3					1	58.3									217.4	
71号住居	2	31.1	9	56.7	18	213.9	5	70.9			14	213.3			102	2255.7	23	83.6	3	20.7	2945.9	
72号住居			82	410.0			8	131.8			9	693.5									1235.3	
74号住居	5	15.8	65	135.2	22	73.8	4	17.6			4	66.4			8	172.1	8	36.7			517.6	
75号住居			153	487.2	2	9.0					1	90.1									586.3	
76号住居			189	897.2	20	132.5	6	80.4													1110.1	
77号住居																						本文記載遺物無し
78号住居																						本文記載遺物無し
79号住居																						本文記載遺物無し
小計a	151	518.7	1622	8209.5	258	1519.3	80	999.6	1	27.2	131	8089.1	9	104.4	784	10243.0	67	503.6	3	20.7	30235.1	

平安時代遺構外出土土器類未掲載総量表

重量単位　g

住居No.	土師器　杯		土師器　甕		須恵器　杯		須恵器　椀		須恵器　蓋		須恵器　甕		須恵器　瓶他		須恵器　羽釜		灰釉陶器　椀		灰釉陶器　他		重量計	摘　要
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
84区	9	37.0	282	2071.3	80	455.3	23	455.3			17	426.2	6	66.2	23	426.2	5	66.0			4003.5	
85区	9	26.6	300	1247.0	53	302.6	53	302.6			35	376.3	7	266.0	33	376.3	32	136.4	1	5.4	3039.2	
94区			2	6.7							1	10.1			13	332.0					34808.0	
95区	72	329.4	567	400.9	74	506.9	74	506.9			163	4534.1	6	122.2	1	14.7	40	243.1	3	35.0	6693.2	
出土地不明	2	14.1	25	103.9	3	15.3	3	15.3			2	20.6					3	9.9	1	0.3	179.4	
小計b	92	407.1	1176	3829.8	210	1280.1	153	1280.1			218	5367.3	19	454.4	70	1149.2	80	455.4	5	40.7	14264.1	
合計(a+b)	243	925.8	2798	12039.3	468	2799.4	233	2279.7	1	27.2	349	13456.4	28	558.8	854	11392.2	148	959.0	8	61.4	44499.2	